



始



特218
23



訂新
草然徒解通

著三哲本塚

京 東

行發堂册有株式會社





緒言

- ◆本書は昭和三年九月に刊行した『通解徒然草』にかなり根本的な改訂を加へたものであります。
- ◆改訂の主なる理由は、大東亞戦局に當面せる中等教育國文教科の参考書として、其の使命をより完全に遂行せしめようと意圖した事であります。
- ◆徒然草は我が古典中でも特に人口に膾炙したもので、中等教科の教材としても多分に採用されて居ります。けれども現下の中等教育といふ見地から嚴重に検討する時、不適切なりと認むべき部分が相當に見出されます。私はこの新訂に於て、思ひ切つてさうした部分を削除する事と致しました。
- ◆尤も本書の精神はどこ迄も古典としての徒然草の全貌を出来るだけ完全な形に於て中等學徒に示すといふ事に存するのでありますから、特に不適切なりとして削除する程の必要を感じない部分は、凡て之を存留する事と致しました。
- ◆本書は原文の各段落毎に「通解」「文旨」「語義」の三項を掲げて居ります。その形式は舊版と同一であります。之が記述の態度精神に於ては、上述する所の意圖の下に、かなり舊版のそれと相異なるものがあります。乃ち「通解」に於ては文の表現の遺漏なき平明化といふ點に特に留意し、「文旨」に於ては努めて國民思想・國民情操といふ立場から文の精神を闡明して、之を現下の國民生活上に活

かすべく、學習者の心構を説く事に意を用ひ、「語義」に於ては語句語法を詳悉して、原文の理解を透徹せしめると同時に、醇正なる國語を了悟し、一般古典文學に對する理解力を涵養するの素地たらしめるやうに努めました。

◆舊版が公にされてから既に十五年、その間には原文の解釋上著者自らの考の變つて來た點もかなりありますし、色々な學者の研究も公にされました。中にも橋純一氏の考證的研究によつて啓發是正された點が尠くありません。それも亦この新訂を成すに至つた大きな理由の一つであります。

◆要するにこの新訂は、現下中等教育國文教科の參考書として、その使命を全うすべく、著者の教育良心・學問良心を傾倒して成つたものであります。

徒然草について

徒然草は吉野時代に兼好法師の作つたもので、平安時代の作品たる枕草子と相並んで、隨筆文學の雙璧として最も人口に膾炙した古典の一つである。

作者兼好法師は本名をうらみのかねよしと曰つた。ト部氏は中臣氏と並んで祭祀を家職とした家で、天兒屋あまのこゝろ根尊を遠祖として綿々と續いた家柄である。兼好の家は庶流で、祖父兼名かねなから分家獨立し、兼名は從四位下右京大夫、父兼顯かねのあきは治部少輔に任ぜられ、兄弟には大僧正慈遍じみん、民部大輔從五位上兼雄かねたけがあり、兼好も亦左衛門佐に任ぜられた。即ち兼好は由緒深い神祇の家の庶流として當時の貴族の末班に列してゐたといふわけである。

兼好の歿したのは後村上帝の正平五年（二〇一〇）四月八日六十八歳であつた事が古い文書によつて明かに推定される。従つてその生誕は弘安六年（一九四五）で、蒙古襲來の翌々年に當るわけである。即ち弘安から正平、鎌倉時代から吉野時代へ掛けての六十八年、その前半生は末班の官人として、後半生は一個の遁世者として、作者兼好は世に存在してゐたのである。

兼好は俗名カネヨシの文字をそのままケンカウと音讀して出家後の名にした。その出家の動機については、歌道の上で殊寵を蒙つた後宇多法皇の崩御を悲しんでの事だといふのが、古來殆ど定説のやうになつてゐたのであるが、續千載集ついでせんざい雜下に「題しらず、兼好法師」として、

いかにしてなくさむものぞうき世をもそむかですぐす人に問はばや

といふ歌が載つてゐる。これは『兼好法師家集』にも「修學院といふところにこもり侍りしころ」といふ題の下に四首の歌が連ねてあるその最後の一つで、「うき世をも」が家集の方では「世の中を」となつてゐるに過ぎない。續千載集は爲世が後宇多院の御旨を拜して元應二年（一九八〇）に撰進したもので、その成つたのは後宇多法皇崩御

の正中元年（一九八四）六月に先立つこと正に五年、兼好三十八歳の時であるから、兼好の出家は少くもそれ以前で、その動機も全く不明なものと推定されなくてはならない。蓋し第五段に於て

不幸にうれへに沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。

と書いてゐるのは、彼自らの遁世心境でもあつたのだらう。

徒然草述作の年代についても色々學者の間に議論があるが、大體に於て後醍醐帝の御代、元弘の亂の直前の頃、即ち皇紀一九九〇年前後、兼好四十八歳前後の述作と見て大過ないであらう。その編次についても色々傳説があり議論も存するのであるが、記述の心理過程の比較的系統立つてゐる點から見て、大體に於て現在あるがまゝの編次に於て兼好自らの手に綴られ、それがそのまま世に傳つたものと見て然るべきであらう。

徒然段は序段一つと本文二百四十三段とから成つてゐて、短きは一行より長きは數十行に及び、長短相錯綜して、その文體も亦多種多様、純然たる平安系の文調もあれば、當時の所謂和漢混淆文調もあり、果して同一人の手に成つたものと疑はれるやうに極端に違つた表現も難つてゐて、爲めに一部の學者をして後人の竄入なりと斷ぜしめるやうな個所さへある。けれどもさうした確乎たる反證の擧げられない限り、作者の饒かな趣味的人生觀と豊富な文藻との發露として、そのあるがまゝの多種多様を寧ろ徒然草そのものの眞面目と認めるべきであらう。

記述の内容も亦實に多種多様で、自然、人事、考證等の隨感隨想論議教訓が、頗る多岐に涉つてゐるのであるが、それを一貫するものは彼の趣味的人生觀であつて、その奥に横はるものは佛敎的厭世觀であり、老莊の思想であり、儒敎の道義であり、更に古尊今卑、都尊田卑、官尊民卑の尙古思想である。其の説く所必ずしもあるがまゝに之を現代國民生活の上に反映せしむべきものでない事固より言を俟たざる所であるが、而もその思想の渾然として歸一する時は實に清閑に徹し閑寂に徹する事であつて、明かに我が國民性の大きい一面の發露である。これがあるが

ために徒然草の文は深く吾人の心奥の琴線に共鳴を感じしめるのであつて、その意味に於て兼好は明かに一個の國民的哲學者である。その説く所固より體系立つた論理的哲學ではないけれども、彼は人生に對する直接の體驗鍊磨とそして犀利な觀照とを通して人生哲學を體得し、之をあらゆる視角から情味に富み變化に富んだ表現を以て物語つてゐるのである。その哲學が彼一個の哲學者であると同時に、上述するが如く國民思想の大きい一面を代表して、日本國民の凡てに深い感銘を與へる所に、徒然草の文學としての生命が存するわけである。

徒然草の時代は實に『神皇正統記』の時代であり、『太平記』の時代であり、『新葉集』の時代である。あゝした深刻な時代相、時代思潮が、この述作の上に端的に現はれてゐない事は、寧ろ怪むべき事であるけれども、而も深くその文を味讀する時、さうした時代相が遁世の哲人兼好の胸奥に反映して、彼をして時に慨然として過去を追憶せしめ、時に慨然として人生を内觀せしめ、その結果が一部の徒然草となつて表現せられたものだといふ感じが、まざまざと讀者の胸に迫つて來るのである。徒然草が枕草子と共に隨筆文學の雙璧として古來國民の間に愛誦せられた所以もそこに存するであらうし、吾々が今日の世局下に於て、更に新しい用意を以て之を味讀して、その底に貫流する「清閑」「閑寂」の眞諦を正しく現下國民生活の上に活かし來らねばならぬ所以も亦明かにそこに存するのである。單なる一個の隱遁文學として白眼視去るが如きは、決して徒然草の本質を正當に認識する所以ではない。

徒然草は足利時代の末葉まで専ら傳寫によつて行はれてゐたのであるが、慶長以來活字印刷の術が發達するに従つて段々と印行流布するに至つた。その最初の開板は慶長九年（二二六四）の『徒然草壽命院抄』で、その後十四種以上も活字印行されたのであるが、何れの刊本も其の本文は殆ど變異なく、特に異本と稱すべきものは認められなかつた。所が近く昭和六年五月に川瀨一馬氏の校訂の下に正徹本が世に公にせられるに及んで、本文の同異がかなり學界の問題になつて來た。正徹の自筆本は徒然草の現存古寫本中最も古いものであり、兼好を去る比較的近い時代のものである。その意味に於て正徹本は或は吉澤博士の所説のやうに「原本の姿を最も正しく傳へたもの」

と謂へるかも知れないが、吾人が詳細に流布本と比較検討した所によれば、やはり慶長以來流布し來つた徒然草の本文の方が、多くの場合どうしても吾々にしつくり來る。川瀬氏が謂ふ所の「流布本との本文の同異に至つては八百餘箇所に及び、其の多くは、流布本より遙かに優れてゐると認められるのである」といふ言葉は遽かに首肯し難い。されば正徹本徒然草はどこ迄も一つの異本として尊重研究せらるべきものであつて、所謂徒然草——古典として人口に膾炙してゐる徒然草そのものとしては、依然として慶長以來廣く天下に流布し來つたまゝの形體に於て研讀せらるべきものと信ずるのである。

目次

序	段	つれづれなるまゝに……………	一
第一	段	いでやこの世に生れては……………	二
第二	段	いにしへの聖の御代の……………	三
第三	段	(削除)	
第四	段	後の世のこと心にわすれず……………	四
第五	段	不幸にうれへに沈める人の……………	四
第六	段	(削除)	
第七	段	あだし野の露消ゆる時なく……………	七
第八	段	(削除)	
第九	段	(削除)	
第十	段	家居のつきづきしく……………	二
第十一	段	神無月のころ……………	二
第十二	段	おなじ心ならむ人と……………	三
第十三	段	ひとり燈火のもとに……………	三
第十四	段	和歌こそ……………	三
第十五	段	いづくにもあれ……………	四
第十六	段	神樂こそ……………	四
第十七	段	山寺にかきこもりて……………	四

第十八	段	人はおのれをつまやかにし……………	四
第十九	段	をりふしのうつり變ること……………	四
第二十	段	某とかやいひし世すて人の……………	六
第二十一	段	よろづの事は月見るにこそ……………	六
第二十二	段	何事も古き世のみぞ……………	六
第二十三	段	衰へたる末の世とはいへど……………	六
第二十四	段	齋宮の野宮に……………	六
第二十五	段	飛鳥川の淵瀬常ならぬ世……………	七
第二十六	段	風も吹きあへず……………	七
第二十七	段	御國讓の節會……………	七
第二十八	段	諒闇の年ばかり……………	八
第二十九	段	静かにおもへば……………	八
第三十	段	人のなきあとばかり……………	八
第三十一	段	雪のおもしろう降りたりし朝……………	八
第三十二	段	九月二十日の頃……………	九
第三十三	段	今の内裏つくりいだされて……………	九
第三十四	段	甲香は……………	九
第三十五	段	手のわるき人の……………	九
第三十六	段	久しくおとづれぬ頃……………	九
第三十七	段	朝夕へだてなく馴れたる人の……………	九
第三十八	段	名利につかはれて……………	一〇

第三十九段 ある人法然上人に……………一〇七
 第四十段 因幡の國に……………一〇八
 第四十一段 五月五日賀茂のくらべ馬を……………一〇九
 第四十二段 唐橋中將といふ人の子に……………一一一
 第四十三段 春の暮つ方……………一一三
 第四十四段 あやしの竹の編戸のうちより……………一二四
 第四十五段 公世の二位のせうとに……………一二九
 第四十六段 柳原の邊に……………一三〇
 第四十七段 ある人清水へまゐりけるに……………一三〇
 第四十八段 光親卿院の最勝講奉行して……………一三三
 第四十九段 老きたりて……………一三三
 第五十段 慶長の頃伊勢の國より……………一三五
 第五十一段 龜山殿の御池に……………一三六
 第五十二段 仁和寺にある法師……………一三九
 第五十三段 これも仁和寺の法師……………一三九
 第五十四段 御室にいみじき兒の……………一四一
 第五十五段 家のつくりやうは……………一四一
 第五十六段 久しく隔りて逢ひたる人の……………一四〇
 第五十七段 人のかたり出でたる歌物語の……………一四三
 第五十八段 道心あらば……………一四四
 第五十九段 大事を思ひたゝむ人は……………一四八

第六十段 眞乘院に盛親僧都とて……………一五三
 第六十一段 御産のとき飯おとすことは……………一五八
 第六十二段 延政門院……………一五九
 第六十三段 後七日の阿闍梨……………一六〇
 第六十四段 車の五緒は……………一六一
 第六十五段 このごろの冠は……………一六三
 第六十六段 岡本關白殿……………一六三
 第六十七段 賀茂の岩本橋本は……………一六七
 第六十八段 筑紫にながしの押領使……………一六七
 第六十九段 書寫の上人は……………一七一
 第七十段 元應の清暑堂の御遊に……………一七三
 第七十一段 名を聞くよりやがて面影は……………一七五
 第七十二段 賤しげなるもの……………一七六
 第七十三段 世に語り傳ふること……………一七六
 第七十四段 蟻の如くあつまりて……………一八三
 第七十五段 つれづれわぶる人は……………一八五
 第七十六段 世のおぼえ花やかなる……………一八八
 第七十七段 世の中にそのころ人の……………一八九
 第七十八段 今やうの事どもの……………一九〇
 第七十九段 何事も入りたゝぬさま……………一九二
 第八十段 人ごとに我が身にうるとき事……………一九四

第八十一段 屏風障子などの……………一九六
 第八十二段 うすものの表紙は……………一九八
 第八十三段 竹林院入道左大臣殿……………二〇〇
 第八十四段 法顯三藏の天竺に渡りて……………二〇三
 第八十五段 人の心すなほならねば……………二〇三
 第八十六段 惟繼中納言は……………二〇六
 第八十七段 下部に酒飲まする事は……………二〇八
 第八十八段 あるもの小野道風の書ける……………二二二
 第八十九段 奥山にねこまたといふもの……………二二四
 第九十段 大納言法印のめしつかひし……………二二七
 第九十一段 赤舌日といふ事……………二二八
 第九十二段 ある人弓射ることを習ふに……………二二二
 第九十三段 牛を賣るものあり……………二三三
 第九十四段 常磐井相國……………二三六
 第九十五段 箱のくりかたに……………二三七
 第九十六段 めなもみといふ草あり……………二三八
 第九十七段 その物につきて……………三三九
 第九十八段 たふとき聖のいひおきける……………三三〇
 第九十九段 堀川相國は……………三三三
 第一百段 久我相國は……………三三四
 第一百一十段 ある人任大臣の節會の……………三三五

第一百二段 尹大納言光忠入道……………三三五
 第一百三段 大覺寺殿にて……………三三八
 第一百四段 (削除)……………三三八
 第一百五段 (削除)……………三三八
 第一百六段 高野の證空上人……………三三九
 第一百七段 (削除)……………三三九
 第一百八段 寸陰惜む人なし……………三四一
 第一百九段 高名の木のぼりといひし男……………三四五
 第一百十段 雙六の上手といひし人に……………三四七
 第一百十一段 團基雙六このみて……………三四八
 第一百十二段 明日は遠國へ赴くべしと……………三四九
 第一百十三段 おほかた聞きにく……………三五三
 第一百十四段 今出川のおほい殿……………三五三
 第一百十五段 宿河原といふ所にて……………三五六
 第一百十六段 寺院の號さらぬよろづの物……………三五八
 第一百十七段 友とするにわろきもの……………三六〇
 第一百十八段 鯉のあつもの食ひたる日は……………三六一
 第一百十九段 鎌倉の海にかつをといふ魚……………三六三
 第一百二十段 唐のものは……………三六四
 第一百二十一段 養ひ飼ふものには馬牛……………三六五
 第一百二十二段 人の才能は……………三六七

第百二十三段 無益の事をなして……………三六〇
 第百二十四段 是法法師は……………三七一
 第百二十五段 人におかれて……………三七三
 第百二十六段 ばくちのまけ極りて……………三七四
 第百二十七段 あらためて益なきことは……………三七五
 第百二十八段 雅房大納言は……………三七六
 第百二十九段 顔回は……………三七九
 第百三十段 物に争はず……………三八一
 第百三十一段 費しきものは財をもて……………三八四
 第百三十二段 鳥羽の作道は……………三八五
 第百三十三段 夜のおとよは……………三八六
 第百三十四段 高倉院の法華堂の三昧僧……………三八七
 第百三十五段 資季大納言入道とかや……………三九一
 第百三十六段 醫師あつしげ……………三九五
 第百三十七段 花はさかりに……………三九七
 第百三十八段 祭過ぎぬれば……………三九八
 第百三十九段 家におりたき木は……………三九八
 第百四十段 身死して財残ることは……………三九九
 第百四十一段 悲田院の幾蓮上人は……………四〇〇
 第百四十二段 心なしと見ゆるものも……………四〇一
 第百四十三段 人の終焉のありさまの……………四〇三

第百四十四段 梅尾の上人……………四〇四
 第百四十五段 御隨身秦重躬……………四〇五
 第百四十六段 明雲座主……………四〇七
 第百四十七段 灸治あまた所に……………四〇八
 第百四十八段 四十以後の人……………四〇九
 第百四十九段 鹿茸を鼻にあて……………四〇九
 第百五十段 能をつかむとする人……………四一〇
 第百五十一段 ある人の曰く……………四一二
 第百五十二段 西大寺静然上人……………四一四
 第百五十三段 篤兼大納言入道……………四一六
 第百五十四段 この人東寺の門に……………四一七
 第百五十五段 世にしたがはむ人は……………四一九
 第百五十六段 大臣の大妻は……………四二〇
 第百五十七段 筆をとればもの書かれ……………四二四
 第百五十八段 盃のそを捨つる事は……………四二七
 第百五十九段 みなむすびといふは……………四二八
 第百六十段 門に頼かくるを……………四二八
 第百六十一段 花の盛は……………四三〇
 第百六十二段 遍照寺の承仕法師……………四六一
 第百六十三段 太衝の太の字……………四六二
 第百六十四段 世の人相逢ふ時……………四六三

第百六十五段 あづまの人の……………四六四
 第百六十六段 人間の営みあへるわざを……………四六五
 第百六十七段 一道にたづさはる人……………四六六
 第百六十八段 年老いたる人の……………四六九
 第百六十九段 何事の式といふことは……………四七一
 第百七十段 さしたる事なくて……………四七三
 第百七十一段 貝をおほふ人の……………四七五
 第百七十二段 若き時は……………四七八
 第百七十三段 小野小町がこと……………四八二
 第百七十四段 小鷹によき犬……………四八三
 第百七十五段 世にはこゝろえぬ事の……………四八四
 第百七十六段 黒戸は……………四八五
 第百七十七段 鎌倉中書王にて……………四八六
 第百七十八段 ある所の侍ども……………四八八
 第百七十九段 入宋の沙門道眼上人……………四八九
 第百八十段 さざちやうは……………四九一
 第百八十一段 ふれくこゆき……………四九二
 第百八十二段 四條大納言隆親卿……………四九三
 第百八十三段 人つく牛をば角を切り……………四九四
 第百八十四段 相模守時頼の母は……………四九五
 第百八十五段 城隍奥守泰盛は……………四九七

第百八十六段 吉田と申す馬乗の……………四九八
 第百八十七段 よろづの道の人……………四九九
 第百八十八段 あるもの子を法師になして……………五〇一
 第百八十九段 今日はその事をなさむと……………五〇二
 第百九十段 (削除)
 第百九十一段 夜に入りて物のはえなしと……………五〇三
 第百九十二段 神佛にも……………五〇六
 第百九十三段 くらき人の人をはかりて……………五〇六
 第百九十四段 達人の人を見る眼は……………五〇八
 第百九十五段 ある人久我繩手を……………五〇三
 第百九十六段 東大寺の神輿……………五〇三
 第百九十七段 諸寺の僧のみにあらず……………五〇五
 第百九十八段 揚名介にかぎらず……………五〇六
 第百九十九段 横川の行宣法印が……………五〇七
 第百一百段 吳竹は葉ほそく……………五〇八
 第百一百一段 退凡下乗の卒都婆……………五〇八
 第百一百二段 十月を神無月といひて……………五〇九
 第百一百三段 勅勘の所に頼かくる作法……………五〇〇
 第百一百四段 犯人を管にて打つときは……………五〇一
 第百一百五段 比叡山に大師勘請の起請文……………五〇二
 第百一百六段 徳大寺右大臣殿……………五〇四

第二百七段	龜山殿建てられむとて……………	四四六
第二百八段	經文などの紐をゆふに……………	四四七
第二百九段	人の田を論ずるもの……………	四四九
第二百十段	喚子鳥は……………	四五〇
第二百十一段	萬の事は頼むべからず……………	四五一
第二百十二段	秋の月は……………	四五四
第二百十三段	御前の火爐に……………	四五五
第二百十四段	想夫戀といふ樂は……………	四五六
第二百十五段	平宣時朝臣……………	四五七
第二百十六段	最明寺入道……………	四五九
第二百十七段	ある大福長者の曰く……………	四六一
第二百十八段	獅は人にくひつくものなり……………	四六六
第二百十九段	四條黃門命せられて曰く……………	四六七
第二百二十段	何事も邊土は……………	四七一
第二百二十一段	建治弘安の頃は……………	四七四
第二百二十二段	竹谷乘願房……………	四七六
第二百二十三段	田鶴のおほいどののは……………	四七七
第二百二十四段	陰陽師有宗入道……………	四七八
第二百二十五段	多久資が申しけるは……………	四七九
第二百二十六段	後鳥羽院の御時……………	四八一

第二百二十七段	六時禮讃は……………	四八〇
第二百二十八段	千本の釋迦念佛は……………	四八五
第二百二十九段	よき細工は……………	四八八
第二百三十段	五條の内裏には……………	四八九
第二百三十一段	關別當入道は……………	四八七
第二百三十二段	すべて人は……………	四九〇
第二百三十三段	よろづの科あらじと思はゞ……………	四九三
第二百三十四段	人のものを問ひたるに……………	四九四
第二百三十五段	主ある家には……………	四九七
第二百三十六段	丹波に出雲といふ所あり……………	四九九
第二百三十七段	柳宮に据うるものは……………	五〇二
第二百三十八段	御隨身近友が自讃とて……………	五〇三
第二百三十九段	八月十五日、九月十三日は……………	五〇五
第二百四十段	(削除)	
第二百四十一段	望月のまじかなる事は……………	五〇六
第二百四十二段	とこしなへに違順に……………	五〇八
第二百四十三段	八つになりし年……………	五〇九

新訂 通解 徒然草

塚本哲三著

序 段

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯すゐに向ひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつづければ、あやしうこそものぐるほしけれ。

【通解】 所在なさに、朝から晩まで硯に向つて、それからそれへと心の中に浮んで来るたわいもない事を、何がどうと云ふ事もなく書きつけて行くと、妙にどうも氣狂じみたものであるわい。

【文旨】 所在なさに、終日硯に向つて、心に浮ぶがまゝを書いて行くと、何だか妙に氣狂じみてゐる、といふのである。これが徒然草一卷の總序であつて、徒然草といふ名も此の書き出しの言葉から來てゐるのである。

【語義】 ○つれづれなるまゝに。徒然無聊であるのにまかせて。つれづれは徒然の字を當てる。この語の原義は連々で、それからそれへと色々の思ひが胸に浮んで來るといふやうな心的状態である。それに大別して二つの場合がある。一つは何をするといふ用事もなく、ひまで、所在が無いといふ場合、一つはもつとせつばつまつて、何をしても心が慰められず、遺瀆ないといふ場合である。こゝは前者の場合と考へられる。○ひぐらし。終日。それを

をして日を暮すといふ意の副詞。○視にむかひて 字を書く、筆を執る、といふのを修辭的に言うたまでである。○心にうつりゆく 心に移つて行く、それからそれにと心に浮んで来る。「心の鏡に映つて行く」の義とする説もあるが、「移り行く」と見た方が「つれづれなる」の語義に對しても自然だらう。○よしなしごと たわいもない事、つまらぬ事、深い譯も何もない事の意。「よしなきこと」といふのが熟して一語となり、「なきこと」が「なしごと」と轉化したのである。○そこはかとなく 何をどうといふ事なく。sokohaka-to-naku と發音する。この語の原義は選擇意志がないといふ事である。即ち、あれは書く、これは書かぬといふやうな事なく、そばから漫然と書くといふのである。○あやしうこそ「あやし」には、妙だ、變だ、不思議だ、といふ場合と、つまらぬ、粗末な、賤しい、といふ場合とがある。こゝは勿論前者である。精しく言へば、自分ながらどうも變だと思へる様に、といふ心持である。○ものぐるほし「物狂はし」の轉。何となく氣狂じみてゐる、いやもうとんと氣狂じみてゐる、といふやうな意で、極めて軽い自己嘲笑的な措辭である。

第一 段

いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。

【通解】 いやもう、此の世に生れては、誰しも、あゝありたい、斯うありたいと、如何にも願はしかりさうな事が、色々と澤山にあるやうである。

【文旨】 これがこの段の總括である。「いでや」と筆端を改めて、いよ／＼隨感隨録の筆を起す。そして世に生れた人として誰しも願はしかりさうな事が澤山にある、というて、次々にそれを列擧して結論に向はうとするのである。

る。

【語義】 ○いでや いやもう、それはもう。自他の言動を否定し歎息する時に用ひるのが語の原義で、従つて下に否定の語を伴ふか、又は否定的な思想を含めていふのが原則である。こゝもその趣で、それはもう、この世に生れたからには、誰しも願はしかるべき事は多々あらう。が、その願望の多くが、所詮は願つて詮なきつまらぬものだ」といふ氣持で、自然にこの語が置かれたものと考へられる。○生れては 生れて來ては。生れた者は誰しもの意。○願はしかるべき事「かる」は「くある」の約。「べき」は指定推量の助動詞で、此の文の場合では「成程願はしからう」「そりや願はしいと思ふのも無理はない」といふやうな心持。○多かめれ「多くあるめれ」の約略で、多くあるやうだの意。

みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人御ありさまはさらなり、たゞうども、舍人など賜はるきはは、ゆゑしと見ゆ。その子、うまごまでは、はぶれにたれど、なほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口をし。

【通解】 天皇の御位は誠に申すも畏れ多い事である。親王様の御末——孫王様に至るまで、これは人間の御種でない、神の御種であらまされるのが、如何にも尊い事である。次に攝政關白の御有様は言外にもないこと、それ以外の貴人も、お上から近衛の舍人などを賜はる程の家柄の人は、實に大したものに見える。まういふ人の子や、孫までは、官位が下つて了つてゐても、やはりどこかうひ／＼しく上品な所がある。その邊から下の方は、その家柄家柄に應じて、うま／＼と氣が向いて來て出世し、得意然たる顔附をしてゐるのも、自分ではそれをひどくえらい氣

であるのだから、他人の目から見れば誠にどうもなさないものだ。

【文旨】 まづ第一に世人の驕望の的たる家柄といふものが、望んで詮ないものだといふのである。天皇、皇族、それは固より世人の望むべき筋でない。攝政關白から、一般貴人の舍人など賜はるべき分限の者、これもそれゆゑ家柄の定めがあつて、普通世人の望み得べき範圍でない。それで、そこ迄は「いともかしこし」やんごとなき「ゆゆしと見ゆ」「なまめかし」といふ言葉で、それ相當に褒めちぎつておいて、扱それ以下の家柄——「程につけつゝ時にあひしたりがほなる」者を捉へ來つて、「自らはいみじと思ふらめど」と一寸からかつて置いて「いと口をし」と、どし、いんとけなし附けて了つてゐる。人の悪い話だが、實にきびく、して溜飲のさがるやうな筆致である。

【語義】 ○みかど。天皇。元來「御門」の義で、皇居の御門の稱から、皇居の稱となり、更にその内に住み給ふ天皇の稱ともなつたのである。○いともかしこし。誠に畏れ多い。○竹の園生の末葉。親王の御子様即ち孫王。末葉は竹の縁でいうたまでで別義はない。「竹の園生」は親王をいふ語。支那の漢の文帝の子、梁の孝王が、方三百里の苑を築いて、その中に澤山の竹を植ゑたといふ故事から出た語。園生の「生」は、芝生の生と同義で、凡て草木の生えてゐる所の稱。「園」といふ語が既に草木の生えてゐる所の稱であるので、結局「園生」も「園」も同義である。○人間の種ならぬ。和漢朗詠集の親王の詩に「此花非人間種。瓊樹枝頭第二花」(後江相公)「此花非人間種。再養平臺一片霞」(菅三品)とある句をそのまま取つたのである。○やんごとなき。甚だ尊い。○一人の攝政關白。朝廷の第一位の人の義。○さらなり。言ふ迄もない、更めていふには及ばぬ。○たゞうど。只の人。たゞびとの音轉で、この文の場合では、攝關以外の貴人を指してゐるのである。○舍人など賜はるきは。朝廷から舍人などを下される身分。「舍人」は隨身ともいつて、近衛舍人即ち近衛府の職員たる府生・番長等で皇族・貴族の警護に當るもの稱である。之を賜はる勅旨を兵仗の官旨といつて、攝關には必ず賜はるが、ごく稀にその次の清藤の大臣にも下賜される事がある。この當時は西園寺家の實兼がそれで、入道前太政大臣、又は北山の大相國とい

つて大いに權勢を振つてゐた。さうした家柄を意中に置いての立文であらう。「きは」は際の義で、分際、分限、身分の意。○ゆゆしと見ゆ。大したものに見える、すばらしいものに思はれる。○うまご。孫。「う」は接頭語で、別義はない。○はふれにたれど。落ぶれて了つてゐても。官位が下つて父祖に及ばなくなつて居ても。○なほなまめかし。やはりどこことなく品がよい。「なほ」はそれでもやはりの意。「なまめかし」といふ語には、生——即ちうぶで、悪ずれのしない、ぶらぶらしくない上品さ、といふ心持を多分に持つてゐる。この文の場合でいへば、さすが大家の末は末だけに、官位が低くなつてはゐても、どこか世間ずれのしない、うひ／＼しい上品さがあるといふのである。○下つた。下の方。「つ」は「の」の意。○ほどにつけつゝ。家柄々々に應じて。「ほど」は身の程の意。「つゝ」は「て」の意。○時にあひ。時運に遭逢して。うまく運が向いて來て出世するといふ意。○したり顔なるも得意然としてゐるもの。こゝの文脈は、

したり顔なるも「みづからはいみじと思ふらめど」といふ口をしといふやうに「みづからはいみじと思ふらめど」の一句を距てて「したり顔なるも」と口をし」と接するのである。「なるも」は「なるもの」の意。「したり顔」は、得意然たる顔附。○みづからはいみじと思ふらめど。自分ではえらいものだと思ふだらうが「みづからは」といふ語の言外に、自然、他人から見れば……、といふやうな心持が含まれてゐる。○口をし。つまらない、なさない。

法師ばかり羨しからぬものはあらじ。「人」には木の端のやうに思はるゝよ」と、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛に、のゝしりたるにつけて、いみじとは見えす、増賀聖のいひけむやうに、名聞ぐるしく、佛の御教にたがふらむとぞ覺ゆる。ひたぶるの世すて人は、なか

なかあらまほしきかたもありなむ。

【通解】坊さんくらゐ羨しくないものはあるまい。人には木の端のやうに思はれるよ」と、清少納言が書いてあるのも、ほんとに尤もな事である。坊さんが大した權勢で、勢を振つてゐるにつけて、それが別段えらいとは見えないで、増賀上人の言うたとかいふやうに、如何にも世間の名聞に汲々たるやうで、佛の御教にそむく事だらうと思はれる。但、只一途に世を捨てて佛道を行ずる人は、それは寧ろ望ましく好ましい點もあることであらう。

【文旨】前節を受けて、坊主も望ましいものではないといふのである。當時の社會に於ける僧侶の地位は仲々高いものであつた。従つて僧位僧官や、立派な寺の住持を目途にして、坊主になりたいと願つた者も多くあつたに違ひない。兼好は自分の趣味主觀の上から、それをも一蹴し去つたのである。そして終りに一寸書き添へて、一口に法師というても、ひたぶるの世捨人は「これは又格別で、それには、なか／＼あらまほしきかた」があらうと結んでゐる所に、世間的な俗見から超脱した筆者の趣味主觀が鮮かに窺はれる。

【語義】○法師ばかり。僧侶くらゐ。「法師」は廣く僧侶をさした語。「ばかり」はくらゐ、ほどの意。○羨しからぬ。羨しくない。自分に取つて一向羨しくないといふのである。○木のきはし。木のきはし、こつぱ。ごく値打のない、つまらぬ物、又は所謂枯木冷灰で、一向に人間味の無いものの意の喩。○清少納言が書ける。清少納言は枕草子の作者。枕草子の「ことごとなるもの」といふ項に「思はむ子を法師になしたらむこそ、いと心ぐるしけれ。さるはいとたのもしきわざを、たゞ木のはしのやうに思ひたらむこそ、いとほしけれ」とあるのを引いたのである。○げに。ほんとに。成程如何にもさうだと心に了得した趣をあらはす言葉である。○さることぞかし。尤もな事であるよ。「そ」も「かし」も、丁寧に文意をおさへて念を推す趣を持つた言葉で、碎けた口語でいへば「ですす」に當る。○勢猛にのしりたるにつけて。豪勢な勢で權勢を振つてゐるにつけて。「勢猛に」は豪勢で、權勢がすば

らしくての意。「に」は「にして」の趣。「のしる」は世に權勢を振つてゐるの意。「世間でやかましく評判する」即ち「名聲噴々たる」意だと主張する學者もあるが、この表現では「自らのしる」の趣で、權勢を振ふ、威張るの意と考へられる。高い僧官の人々の有様をいうた文句である。○増賀ひじり。増賀は參議橋恒平の子で、大和多武峰にゐた僧。極めて奇行が多く、往々氣狂じみたことさへやつて、非常に逸話に富んだ僧である。「ひじり」は僧の敬稱。○いひけむやうに。いつたとかいふやうに。「けむ」は過去の事を推測していふ意の助動詞。こゝは「いひしやうに」といふ所を婉曲に推測的に行つたのである。○名聞ぐるしく。世の聞えに囚はれてゐるやうで。「名聞」は世間の聞え、評判。慈惠が大僧正に任ぜられて參内の折、増賀が前驅に交つて、「名聞こそ苦しかりけれ。かたるのみぞたのしかりけれ」と高唱した事が發心集に見えてゐる。その原典のまゝに「名聲の高いのは心苦しい事」と解すべきだと主張する向もあるが、この表現をすなはに味ふ時、「名聲がましく」と書く筈の所を、原典の文句に引摺られて「名聞ぐるしく」といふ風の特種表現を用ひるに至つたものと見た方が、立文主觀にしつくりすると思ふ。○佛の御教に違ふらむ。釋迦の教へ即ち佛の教義に反する事だらう。佛教では名利の外に超脱すべきことを教へるからである。○覺ゆる。思はれる、感ずる。○ひたぶるの世捨人。一意專念に佛道を行ひます人。「ひたぶる」は只一途にそればかりやるといふ意。「世捨人」は世を捨てた人の意で、一般に僧侶の事をいふ言葉である。○なか／＼。却て、寧ろ。○あらまほしきかた。望ましい向。「あらまほし」は、さうあつてほしい、望ましい、羨しい、好ましい、といふ意の形容詞。「かた」は向、方面、點、事、といふやうな意味。

人は、かたちあり様のすぐれたらむこそ、あらまほしかるべけれ。ものうち言ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、ことは多からぬこそ、あかすむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるゝ本性見えむこそ、口をしかるべけれ。

【通解】人は、容貌風采のすぐれてゐようのこそ、如何にも望ましい事に違ひない。そして又、何か物を一寸言うても、それが聞きにくくなく、愛敬があつて、而も口敷を多くきかない人こそ、厭く事なく、いつ迄も対坐してゐたく思はれるものだ。所が、實にいなアと思つて見てゐる人が、つまらぬお喋りをしたりして、自然と今迄のゆかしさのなくなるやうな、見下げた地金のあらはれるやうな事のあるのは、實にどうも口惜しく、苦々しい事であらう。

【文旨】次に望ましい事は容貌風采の秀麗な事である。が、これには言葉の上品さ、口敷の少さが伴はねばならぬ。いくら容貌風采がよくても、下らぬおしやべりなどして、ついたはづみに幻滅を感じしめるやうな地金が現はれでもすると、實になさけないといふのである。この一文節の前後の關係を平靜に味つて見ると、かたちあり様のすぐれたらむこそ

めでたしと見る人

ものうち言ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、ことば多からぬこそ

心おとりせらるゝ本性見えむこそ

と考へられる。めでたしと見る人」は「かたちあり様のすぐれたらむ」人である。さういふ人が「ものうち言ひたる、聞きにくからず、ことば多からぬ」人、即ち「あかすむかはまほしき」人なら、いつ迄たつても「心おとりせらるゝ本性見えむ」等はない。折角いゝ風采容貌を持つてゐても、つい下らぬおしやべりなどやつて、人におやくと「心劣り」されるやうでは實に口惜しい。慎むべきは口だ、言葉遣だといふのが、本文節の要旨と考へられる。

【語義】○かたちあり様 容姿風采。外貌や凡ての様子態度をいふ。○ものうち言ひたる 何か一寸物をいうてゐるもの。○愛敬 古文では「あいぎやう」と濁つて讀む。かはゆい様子を見せてゐるのをいふ語。○あかすむかはまほし。いつ迄も厭く事なく對坐してゐたい。○めでたし 結構だ、立派だ。○心おとりせらるゝ本性 自然に

今迄のゆかしさが無くなるやうな地金。「心おとり」は自分の心の内に先方を劣りさまに感ずる事で、特に、今迄奥ゆかしく思つてゐた其のゆかしさが無くなる、といふやうな趣を持つた語である。せらるゝ」は自然にさうなるといふ意。「本性」は其の人の本來の性質即ち所謂地金。○見えむこそ あらはれようのは實に「見ゆるこそ」といふのを婉曲に述べた言ひ廻しである。この言葉遣は「本性を現はす」をいふ風に他動詞と考へる事も出来るが、「本性が出る」と自動詞に見た方が立文主觀にびつたり来るやうだ。

品かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きにも、うつさば移らざらむ。かたち心さまよき人も、才なくなりぬれば、品くだり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけすけおさるゝこそ、本意なきわざなれ。

【通解】家柄や容貌こそ、成程それは生れつきで如何とも致し方なからうが、心はどうしてか、賢い上にも更に賢い方へと、移したら移されない事があらう。容貌や氣立のよい人も、學才がないとなると、自分より家柄も低く、顔も下卑てみにくいやうな人の中に相伍してゐても、それと對立も出来ずに壓倒されて了ふ、それこそ實に不本意千萬な事である。

【文旨】今迄述べて來た所をしめくゝつて、家柄や容貌は望むに足らず、畢竟大切な事は心の修養だと論じてゐるのである。家柄や容貌は生れ付きだからどうともならぬ、只しようと思へばどうでもなるのは心の修養である。そしてどんなに容貌氣立のよい人でも、腹に學才が出来てゐないといふ事になると、折角の容貌も三文の價値もなくなる。自分より下位の、見にくい容貌の持主の中に立ちまじつても、その中に水際立つて立派に見えるどころか、あべこべにそれ等の人にさへ對立が出来ずに壓倒されて了ふ。さうなると容貌がよいただけ一層なさけない、美男子

としてこれ位不本意な事はなからう。だから、容貌などに望を掛けずに、只學才を修養したいものだといふのである。品即ち家柄のよさは、こゝでは寧ろ客で、主として容貌のよさについて述べてゐるやうに考へられる。

【語義】○品 身分家柄の義。○生れつきたらめ 生れついでるやうがといふ強調的逆接の表現。○などかどうしてか。一種の反語で、下の「移らざらむ」と相呼應してゐる。○心ざま 心の様子、氣だて。○才なくなりぬれば。學才がないとなると。○才は古語では「さえ」といふ、學才、才能、才氣等の意。いくら容貌や氣立がよくても心の才がないとなつては、といふ意。更に簡明にいへば、心に才がなくては、といふのである。即ち「才なきになりぬれば」といふ心持に見ればよい。「なる」を世の定評に成ると迄突込んではやゝ強過ぎよう。○品くんだり 家柄が低く。これは

品くんだり 一人
顔にくさげなる

と對立的に「人」に掛る詞。「才なくなりぬれば品下り」と續くものと考へてはいけない。○顔にくさげなる人にも立ちまじりて。顔の下卑て見にくい人の中に立ちまじつても。にくさげなる」はかはいふりが無い、にくていな意。「人にも立ちまじりて」は「人に立ちまじりても」の意で、「も」の轉位的慣用といふ趣。○かけず かけくらべられず、對立が出来ず。この語は通例「わけもなく」たわいなく」と解かれてゐる。それは平家物語に「桶もたまらず、鎧もかけず通りけり」とある類に準じた解であるが、さうした用例とこゝとは用語主觀が違つて、こゝは筆者独自の特殊用語例のやうに考へられる。○けおさる ひどく壓倒される。「け」は接頭語で、その事の強くひどい趣をあらはす。○本意なきわざ つまらぬこと。本意」は斯うしたいあゝしたいといふ本來の願ひ、望み、考へ、といふ意。それが「本意なし」となると、本來の考へ通りでない、即ち不本意だ、つまらぬ、なさないとなる。「わざ」は「事」の意。

ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならむこそ、いみじかるべけれ。手などつたならずはしりがき、聲をかしくて拍手とり、いたましようするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

【通解】願はしい事は、眞面目な修身齊家の實學、詩を作ること、和歌、音樂の道、それから又、故實禮法に通じたり、朝廷の典禮行事に明かであつたりする方面に於て、人の手本であらうのこそ、實にすばらしいであらう。又手なども相當にうまくすらくと書き、聲面白く拍手を取つて一座の音頭を取り、困つたやうに辭退はしながらも、丸つきり下戸でないのが、男としてはよい事である。

【文旨】いよく結論に入つて、眞に望ましい事は學才の修養だとして、その目を擧げたのである。「手など拙からずはしりがき」から下は、自分の趣味の上から軽く書き添へたといふまでであらう。かなり慾ばつた注文であるが、當年の宮廷生活の理想としては正にこのやうであつたのである。

【語義】○ありたきこと ありたい事、望ましい事。○まことしき文の道 實際的な學問、實學。「文」は書物。「文の道」は學問をいふ。「まことしき」は眞面目な、實際的な意。こゝでは四書五經などの儒學、所謂修身齊家の道をいふのであらう。○作文 漢詩賦を作ることといふ言葉。○管絃 音樂。「管」はくだ、笛の類をいひ、「絃」は絲、琴の類をいふ。○有職に公事のかた「有職」はもとと廣く物識りといふ意から出た語で、朝廷や武家の禮式典故によく通すること。「有職故實」ともいふ。「公事」は朝廷の儀式典禮から凡ての行事をいふ。「有職に」の「に」は、並に、その上に、といふ意の助詞。○人の鑑 人の手本。○手 手跡、筆跡。今日の口語でいふのと同じく、文字を書くこと。○はしりがき すらくと達者に書き。草書に限らず、凡てすらくと書くのをいふ。○聲をかしく

で。歌を歌ふ聲が面白くて、「をかし」は面白い、趣がある、といふ意。てはごく軽い用法で「面白く」といふと殆ど同じ趣である。○拍子とり。手拍子、扇拍子などある、それを取つて歌ふのは、所謂音頭を取つて歌ふ事で、朗詠などの場合、一座の主役となる事である。○いたましろするものから。困つたやうに辭退はしながらも。人から酒をすゝめられて、さも困りぬいたやうに辭退はしながらも、といふのである。「ものから」は反對の思想をあらはす語で、ものの、けれども、ながらも等の意に使はれる。○下戸。酒きらひ、少しも酒を飲まぬこと。上戸（酒ずき）に對する語。○男はよけれ。男はよい。こゝの「は」は或一つを取り立てていふ趣の助詞で、自然その内に、女子供はいけないが、といふ心持が含まれてゐるやうに取れる。

第二 二段

いにしへの聖の御代のまつりごとをも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず、よろづにきよらをつくしていみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて、思ふところなく見ゆれ。
 「衣冠より馬車にいたるまで、あるに隨ひてもちひよ。美麗をもとむることなかれ」とぞ、九條殿の遺誠にもはべる。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、「おほやけの奉物は、おろそかなるをもてよしとす」とこそ侍れ。

【通解】 古への聖天子の御代の御政道をも忘れ、人民が愁へ嘆かうが、國が傷けられ疲弊しようが、そんな事にはお構ひなしに、凡ての事に華美を盡くしてえらいと思ひ、あたり狭さうな様子をして、大威張りに威張り散らし

てゐる人こそ、ほんとになさげなく、如何にも思慮のないやうに見える。「衣冠から馬や車に至るまで、あり合はせのまゝを使へ。美麗を求めてはならぬ」と、九條殿の遺誠にもあります。又順徳院が宮中の事を色々お書き遊ばされた書にも、「天子のお召物は疎略なのがよろしい」とあるので御座います。

【文旨】 これは爲政者の驕奢を戒め、儉約の尊ぶべき事を述べてゐる貴い教訓であるが、それもやはり開き直つた教訓といふでなく、どこ迄も自分の主観の上から「うたて、思ふところなく見ゆれ」というてゐるのである。そしてその内に、自然と、作者の簡易生活に對する憧憬の氣分も見えてゐる。

【語義】 ○聖の御代。聖天子の御代、聖代。○まつりごと。政道。こゝは主として儉約を旨とする政事制令をいうたものと考へられる。○うれへ。愁へ歎き、「愁訴」の義にもいふが、こゝはそこ迄突込むべきではない。○そこなはるゝ。傷つけられる、疲弊する。○知らず。構はず、知らぬ顔をしてゐる。○よろづに。萬事に、何事につけても。○きよら。華美。「清」に「ら」といふ接尾語の添つた語。○所せきさま。あたりせまき様子。あたりも窮屈だといふやうに大きな顔をして威張り散らしてゐるといふのである。○うたて。餘りなさげなく、「うたた」といふ語から轉來したもので、事の甚しく悪い方に進んで、あまりひどい趣を表はす副詞、その内には嫌惡的の趣を多量に含んでゐる。「あまり考へがない」「實に考へない」といふやうに、いきなり「思ふ所なく」をモディファイする單なる程度分量の副詞と見てはならぬ。○思ふところなく。思慮なく、考なく。○馬車。馬や車。馬車ではない。○あるに隨ひて。あり合はせのまゝ。手許に有り合はせたものとか、世間普通のありきたりのまゝとかいふ心持であらう。○九條殿の遺誠。「九條殿」は藤原師輔。遺誠は子孫を戒める爲めに書き残したものの。○順徳院の云々。禁秘抄といふ書をいふ。「禁中」は宮中。○おほやけの奉物。天子のお召し物。「おほやけ」は天子。又、朝廷の事にもいふ。「奉物」は御服の事。禁秘抄に「天位著御物、以疎爲美」とある。

第三段

【注意】この段は、中等教科の題材として不適切と認め、全文を削除する事とした。

第四段

後の世のこと心にわすれず、佛の道うとからぬ、心にくし。

【通解】後世の事を心に掛けて忘れず、佛の道に疎々しくしないのは、誠に奥ゆかしい。

【文旨】簡潔な表現の中に筆者の佛道への深い關心が窺はれる。勿論この一節も開き直つての佛道鼓吹ではない。「心にくし」といふ心の感じをそのままに、さら／＼と短く片附けた所に妙味がある。そして此の事は、必ずしも出家遁世の人ばかりについてでなく、世の人凡ての佛道に對する心掛をいうたものと見てよからう。

【語義】○後の世。來世、後世。佛教でいふ後世、即ち死んだ後の世で所謂極樂往生の事をいふのである。○うとからぬ。うと／＼しくしない。佛の道に深い關心を持つて、常にお念佛を申すとか、お經を上げるとか、お寺参りをするとかいふ類の事を疎略にせぬ、といふのであらう。○心にくし。奥ゆかしい。自分の心にくらしく感ずる程羨しい、といふ心持から來た言葉と考へられる。

第五段

不幸にうれへに沈める人の、かしらふるしなど、ふつ／＼かに思ひとりたるにはあらで、あるかな

きかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたに、あらまほし。顯基中納言のいひけむ、配所の月罪なくて見むこと、さもおぼえぬべし。

【通解】身の不幸によつて深く憂へに沈んだ人が、急に剃髮して佛道に這入るなどいふやうに、ふとした動機からつまらなく入道の決心をしたといふではなくて、心から靜かに佛道に入つて、居るか居ないかも分らぬ様に門をしめきつて、何の期待もなく明し暮してゐるのは、それはそれで又その向きに、如何にも望ましく好ましいものだ。顯基中納言のいうたとかいふ、配所の月を罪なき身で見たい——鳥流しにされて行く地、さうした世間と没交渉な地に於て、而も何の罪もない身で心靜かに月を眺めたいといふこと、それは成程如何にもそんなやうに思はれさうな事だ。

【文旨】同じく佛道に入るにしても、妻子に死別したとか、ひどい失意に陥つたとか、さうした動機で、一時の感激から頭を丸めたといふのでは面白くない、何の期待もなく、只靜かに佛道を行じてゐる、そんなのがほんとは羨しいといふのである。如何にも、わざとらしくない、自然的な風を喜ぶ作者の趣味主觀がよくあらはれてゐて、實によい文調である。最後に顯基中納言の「配所の月罪なくて見む」といふ言葉に共鳴して、それを引用してゐるのも、やはり世俗と没交渉な地に於て、而もほんとに自由な、何の拘束もない氣分で暮したらどんなによからう、といふ作者の主觀である。如何に都離れた、世と没交渉な「配所の月」でも、罪ある身で眺めたのでは、自ら罪に對する後悔もあらう。或は人をうらみ、世をのろふ思も出よう。よしやそれが無實の罪であつても、兎に角罪名を蒙つて流された身には、何等かの條件があり世の拘束がある。若し全く罪のない身——何の拘束もない身としてさうした閑寂の地に月を眺めたら、どんなによい事であらう。そこに兼好が深く共鳴してゐるのである。即ち「あるかなきかに門さしこめて待つ事もなく明し暮す」心境は「配所の月罪なくて見る」心境と、正に其の揆を一にする

村けである。

【語義】 ○不幸にうれへに沈める人。不幸な目に遭つて憂へに沈んでゐる人。「不幸に」は、不幸にて、不幸によりて、不幸の爲めに、である。○かしらおろしなど。剃髪したりする等の如く。○ふつゝかに思ひとりたるにはあらで。つまらなく入道の決心をしたのではなくて、「ふつゝか」といふ語は、太く、ぶきツちよな、ごち／＼して上品でない、といふ意味の言葉である。従つて「ふつゝかに思ひとりたる」といふのも、その「思ひとり」方が「ふつゝか」だ——風流氣のない、味のない、いやにごつ／＼した決心ぶりだ、といふ主観的な感じをいうたものと見てよからう。○あるかなきかに。居るか居ないか分らぬやうに。○待つこともなく。何の期待もなく。○明し暮したる。明し暮してゐるのは。○さるかたにあらまほし。それは又それで望ましくよいものだ。「さういふ風でありたいものだ」と見てはならぬ。「さるかたに」は、それは又それで、それは又さうある向きに、といふ意。○顯基中納言權中納言源顯基。大納言俊賢の二男、後一條の近習の臣で、院崩御の後、大原で出家した人。○配所の月云々。「配所」は配流の地、流罪の地。こゝの言葉は古事談・撰集抄・十訓抄等に見えてゐる。○見む。見たい。「見む」は文法的にいへば「見よう」といふ未來の詞であるが、茲は希望の意を寓したものと見てよい。○さもおほえぬべし。そんな氣もしさうな事だ。「さ」は「しか」で、そのやうな意。「も」は感興の意を持つた助詞。「ぬべし」は現在完了の「ぬ」と「べし」と接して出來た語であるが、此の「ぬ」には時間の意味はなく、單なる強めの趣で、きつとそれに違ひない、なる程さうあつて然るべきだ、といふやうな趣をあらはすのである。

第六段

【注意】 この段も中等教科として適切ならずと認め、全文を削除する事とした。

第七段

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ち去らでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。

【通解】 あだし野の露のもろく消ゆるが如くに、消え去つて了ふ時もなく、鳥部山の烟のはかなく立ち去るが如くに、此の世を立去つて行くといふ事もなく、若し人が常住不斷に此の世に住みおほせるものであるとしたら、どんなにか物の情趣もない事であらう。世は無常であるこそ非常にすばらしいのである。

【文旨】 佛教思想から來た無常觀——といふよりも、作者兼好の趣味を基調とした無常觀で、それはどこ迄も「物のあはれ」から見た「いみじさ」である。「あだし野」「鳥部山」共に葬場のあつた所、その名を聞いただけでも、人はすぐに死といふ事を聯想して心細い感に打たれるだらう。さうした地名を文の縁語に持出して、露と消え、烟と立ち去ればこそよいのだ、というたのが、此の文の修辭の妙である。無常は所詮人生の事實である。それを「物のあはれ」から美しく肯定する所に、我が民族思想の崇高な一面がある。徒らなる無常觀、生存欲否定觀と見ずに、さうした心構を以てこの短文節を味讀して戴きたい。

【語義】 ○あだし野。山城嵯峨野の奥、愛宕山の麓にある野の稱といふ、そこは昔、人を葬つた所である。○鳥部山。京都東山の阿彌陀峯をいうたものだらう、その山の麓を鳥部野というて、そこに火葬場があつたのである。○立ち去らでのみ。いつ迄も立ち去らずに「立ち去る」も「消ゆる」も共に人の死ぬことを烟や露の縁でいうたもの。「のみ」は「ばかり」であるが、これは、只それ一つといふ方の意味でなく、只もう一概に、といふ風に、言葉の意味を強めて使つた例である。○住みはつるならひ。住みおほせるならはし。「はつる」は「果てる」で、その事

をしおほせる意、即ちどこ迄も住むといふ働きを完成する意で、つまり常住不斷永久不變に不老不死だといふ思想を現はしたのである。「ならひ」は「習はし」の意。○いかに。どんなにか。○もののあはれ。ものの趣、しみんぐとした情趣。○定めなきこそ。無常なるこそ。佛教に謂ふ所の無常で、一切萬物みな生滅轉變して常住でないのをいふ。○いみじけれ。面白い、ごくよい、すばらしい、妙味がある。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや。あかすをしと思はば、千年を過すとも、一夜の夢のこゝちこそせめ。住みはてぬ世に、みにくきすがたを待ちえて何かはせむ。命長ければ恥おほし。長くとも四十にたらぬほどにて死なむこそ、めやすかるべけれ。

【通解】 命のあるものを見るに、人くらゐ長生きをするものはない。蜉蝣のやうに朝生れて晩にはもう死んで了ふのもあり、夏の蟬のやうに春秋を知らぬ類もあるのである。ゆつたりとした心持で暮せば、一年を暮す程の間でも、格段にのび／＼としたものだ。飽き足らず惜しいと考へた日には、假に千年を過して見た所で、丸で一夜の夢のやうに短く感ずるに違ひない。どうせ永劫に住みおほせる事のならぬ世の中に於て、おぼれた醜い姿になつて見て、それが何にならう、實につまらぬ事だ。長命をすれば恥をかき事が多い。どんなに長くても、四十に足らぬくらゐで死ぬのこそ、誠に見よい事であらう。

【文旨】 前節を受けて、人は四十足らずで死ぬがよい、あの醜い姿をした老人はつく／＼いやだ、といふ愛好の趣味主觀を遺憾なく發揮してゐる。短命をよいとするのも畢竟は老人の醜さを極度に嫌惡する主觀からである。

【語義】 ○人ばかり。人くらゐ、人ほど。○かげろふの夕を待ち。蜉蝣の朝生れて晩を待つて死ぬ。「かげろふ」は蜉蝣というて、蜻蛉に似た小さい蟲、よくはかないものの例に引かれる。これは淮南子、説林訓の「蜉蝣朝生而暮死」を引いた文句である。「待ち」は「知ら」と對立して同様に打消の「ぬ」に掛る中立法だといふ見地から「かげろふの夕を待たずに死ぬ」の義に解すべきだと主張する學者もあるが、それは同一主語の下に述語が並立した場合に於て認めらるべき文法で、こゝのやうに別個の主語が對立して二文節となつたものに於て、前文節の肯定語が後文節の否定語に掛つて否定になるといふ事は、一般に其の例を見ぬ所である。○夏の蟬。莊子逍遙遊に「蟪蛄不知春秋。此小年也」とあるを引用したのであらう。莊子の原意は、蟪蛄（蟬の一種、ひぐらし）は春生すれば夏死し、夏生すれば秋に死ぬので、完全な一年といふものを知らないといふのであるが、今こゝでは特に「夏の蟬」と書いてゐるので、只一夏だけ生存してゐて、春も秋も知らぬといふやうにも取れる。要するに、ごく短い命だといふ譬喩と見ればそれでよい。○つくづく。ゆつたりと、しみんと。こせ／＼せずに落ちついた氣分でしんみりとの意。○ほどだにも。間だけでも。「だに」「だにも」「も」は感興の助詞は、極度の一つを擧げていふ語で、口語の「さへも」「でさへも」「だけさへも」に當る。この邊の文意は

つくづくと一年を暮せば、その程だにも、こよなうのどけしや
といふ心持と見てよい。○こよなうのどけしや。格段に長閑な事だ。「こよなう」は、特別に、格段に、比較にならぬ程に、といふ意。「のどけし」は、長閑だ、のび／＼してゐる、ゆつたりしてゐるの意。「や」は詠歎詞。○あかす。惜しと思はば。いくら長生をしても飽き足らず、死ぬのを惜しいと思つたら。○住みはてぬ世。住みおほせられぬ世。「え住みはてぬ世」の心持と見てよい。どうせ永久に生きてはゐられぬ世、どの途死なねばならぬ世、といふのだ。○みにくきすがたを待ち得て。醜い姿になる迄生きてゐて。長生して老衰した醜い姿を待ち得て、といふのである。「待ち得」は待つてゐてそれを得る、待つてゐてさうなる、といふ意。○何かはせむ。何としよう。「かはし

は反語、どうするものか、何にもなりはしない、といふのである。○命長ければ恥多し。長生すると恥をかく事が多い。莊子の天地篇に『多男子則多懼、富則多事、壽則多辱、是三者非所以養德也』とあるのを引いた詞。○めやすかるべけれ。見よい事であらう。「めやすし」は、他から見た目の感じがよいといふのである。

そのほど過ぎぬれば、かたちを愧づる心もなく、人にいできじらはむことを思ひ、夕の日に子孫を愛し、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなり行くなむあさましき。

【通解】 その年配即ち四十の坂を通り越すやうになると、もはや自分のなり形を愧ぢる心もなく、人中に出しやばる事ばかり考へ、今にも沈まうとする夕日のやうに、老い傾いた年をして、子孫をかはゆがり、その子孫の榮えて行く先きの先きまでも見る氣でゐて、只もう一途に世の名利を貪る心ばかり深く、物の情趣も分らぬやうになつて行く、それは實に／＼なさげなくいやなものである。

【文旨】 老人の醜さ、圖々しさ、死慾の深さ、さうした様をかなり具體的に、詳細に描寫して、「あさまし」といふ強い言葉で思ひ切り排斥してゐる。この節は一節一文、立てつゞけに文を續けてゐる、そしてその儘々絶えざる所に圖々しい年よりのさまを寫し出して妙味津津たるものがある。老醜嫌惡の強い主觀の如實のあらはれで、そこに吾々の深く考ふべきものが存するのである。

【語義】 ○そのほど。前節を受けて、四十の頃をいふのである。○過ぎぬれば。過ぎて來ると。「ぬれば」の形は二つの意味を持つ、それは(一)「何々すると」(二)「何々したから」である。茲は勿論(一)の方。そして「ぬ」は段段にさうなつて行くといふ心持をあらはすのである。○かたちを愧づる心。自身の姿形の醜いのを恥しいと思ふ心。

○人にいできじらはむこと。出でて人に交はらうとすること、人中に出しやばること。○夕の日に子孫を愛し。残年いくばくもない身で子孫を愛し、「夕の日」は夕陽で、その將に西に沈まんとするを人の老年に喩へたのである。白樂天の詩句に『朝露貪名利、夕陽愛子孫』とあるのをそのまま引用したもの。○さかゆく末を見むまでの命をあらまし。子孫の榮え行く末を見ようまでの自分の命を豫測し、「さかゆく」は榮え行く。「あらまし」は豫測する、豫定する、の意。「願望する」と解く人もあるが、さういふ意味の語ではない。生きたいと願ふでなく、生きる氣で、ちやんと生きるものときめ込んでゐる、といふのである。○世を貪る。世の名利を貪る、世俗の欲をかく。○あさましき。實に情ない、ほんとにいやだ。「あさまし」は、そのひどさにあきれはてる程だ、あまりといへばあまりだ、あまりの事に情ない、あまりの事に何と申さうやうもない、といふやうな心持の語である。

第八段

【注意】 中等教科の題材として不適切と認め、全文を削除する事とした。

第九段

【注意】 本段も亦中等教科の題材として不適切と認め、全文を削除する事とした。

第十段

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、假のやどりとは思へど、興あるものなれ。

【通解】 住ひの具合がしつくりとして、如何にも好ましいやうに出来てゐるのこそ、どうせ假の宿りだとは思ひながらも、誠に面白味のあるものである。

【文旨】 一轉して住居趣味の問題に這入つて來た。この一小節はこの全段の總敘である。住居などは、どうせ假の世の假の宿りに過ぎぬ、とは思ひながらも、やはりしつくりと出来てゐるのほうれしいものだといふのである。

【語義】 ○家居 すまひ、家とか屋とかいふ語は建物を主とした語、家居はその内に住むといふ趣——「すまひ」の意を主とした語と見てよからう。○つきづきしく、あらまほしきこそ しつくりとして、好ましいやうに出来てゐるのこそ。「つきづきし」は、つきがよい、しつくりとよくついでゐる、といふ意。こゝは、住居の具合が何も彼もよく調和してゐて感じがよいといふのである。此の一句を「つきづきしくあらまほし」と續けて、「似合はしく出来てゐたいといふ事は」のやうに解しては「興あるものなれ」と一致せず、又「あらまほし」といふ語の趣から見ても面白くない。こゝは

つきづきしく
あらまほしき
こそ……

といふやうに、二つの形容詞の對立と見、そして「つきづきしく、あらまほしきさまなるこそ」の略と考へるがよい。「あらまほし」は、さうありたい、望ましい、好ましい、といふやうな趣の語。○假のやどり 佛教思想から來た語で、一寸この世に生れて來てゐる間だけの假の宿りだといふ意。○興ある 面白味がある、趣がある。

よき人のどかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみくくと見ゆるぞかし。

【通解】 よい人が、ゆつたりとして靜かに住ひをしてゐる所は、さし込んでゐる月の色も、一入しんみりと見え

るものだ。

【文旨】 よい人の物靜かに住ひをしてゐる所は、さし込んだ月の色までが一入身にしみるやうだ、といふのである。

【語義】 ○よき人 古文では身分のよい人の意にいふのが普通であるが、徒然草でいふ「よき人」は殆ど凡ての場合に、身分がよいばかりでなく、その上に又物の情趣のよく分つた教養のある人を意味するものと見た方がよい。即ち趣味を主とした上で積極的によい人をいふのである。○のどかに 靜かに、ゆつたりと。○住みなしたる所 住ひをしてゐる所。「なし」はわざ／＼さういふ働きをするといふ意で、その働きを強めていふ語。○さし入りたる月の色 そこへさし込んだ月の光。月の色は月の光で、「光」といふのを「色」とした所に、多少語の柔か味があるやうだ。○ひときは 一層、一入。○しんみくと しんみりと。深く心にしみ入るやうだといふ意。

今めかしくきら／＼かならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も、むかし覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

【通解】 當世風にけば／＼しくはないが、植木もことなく時代がついて、殊更に手を入れたといふ風でない庭の草も情味を持つたやうな趣であり、濡縁やすき垣の配置の具合も面白く、一寸した手廻りの道具も、古風でわざとらしく凝つてゐないのこそ、見て誠に奥ゆかしく思はれるものだ。

【文旨】 當世風にけば／＼しいのは却ていけない、それよりも古風に簡素で時代のついた住居が奥ゆかしい、といふのである。「今めかしくきら／＼かならねど」の一句——殊に「ならねど」に即して考へると、それは「よき人のどかに住みなしたる」住ひの様をいうて、「その住ひは今めかしくきら／＼かだといふではないが」といふ文意とも

取れい。所が、すぐその次の「木立ものふりて……やすらかなるこそ心にくしと見ゆれ」はどうしても一般的に批判したやうな筆致である。即ち前の文句をすぐ受けて、そのまゝそれを一般的批評の方面に展開して行つた趣の文と考へてよからう。

【語義】 ○今めかしくきらゝかならねど。當世風にはでしくはないが「今めかし」は當世風。「めかし」は「のやうにある」のやうに見える」といふ意の接尾語。「今めかしく」を中止法と見て、

今めかしく(か)らねど
きらゝかな

といふ文脈と見る説もあるが、大體「今めかし」いものは「きらゝか」と相場がきまつてゐるやうだから、「今めかしく」は「きらゝか」の副詞と見た方が自然だらう。○木立。立ち並んだ木。こゝでは庭の植木をいふ。○ものふりて。何となく時代がついて、「ものふる」は何となく古々しい趣がつくといふ意。年數が経つて自然と深い趣がついたのを賞美していふ趣の語である。○わざとならぬ。わざと手入れをしたり植系附けたりしたのでなく、自然的にさうあるの意。○心あるさまに。情趣あるさままで。「心」といふ語には(一)情趣、(二)情理、といふ二つの場合がある。従つて「心ある」も、(一)情趣のある(又は、情趣をよく解する)、(二)考のある、といふ二つの場合を生ずる。こゝは前者の例。この場合の「心」は「であり、それから又」といふ趣。○簀子。濡れ縁、竹の縁。轉じては、狭い木を少しの隙間をおいて並べた縁の事にもいふ。○透垣。すけて見えるやうに造つた垣。「すいがき」ともいふ。「すいがき」の音便。○たよりをかしく。配置の具合が面白く「たより」は、この場合は「ある具合」即ち配置の意。○うちある。一寸した、何でもない。「うち」はその働きのこく軽く行はれる意の接頭語。「うちある」は凡て事々しからぬ事にいふのであつて「ある」は「在る」(置いてある)と見るよりも「有る」と見る方が自然だらう。○調度。手まはりの諸道具。○むかし覺えて。昔風で、それによつて昔が偲ばれる様での意。○やすらかなるこそ。

「やすらかしは、さらりとしてゐる、わざとらしく凝つてゐないの意。○心にくしと見ゆれ。奥ゆかしく見える、さういふのを見ると奥ゆかしく思はれるの意。

多くのたくみの、心をつくして磨きたて、唐の日本の、めづらしくえならぬ調度ども並べおき、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の烟ともなりなむとぞ、うち見るより思はるゝ。

【通解】 多くの大工が、心を盡くして立派に立派にと磨き立て、支那だの日本だの、珍らしく何ともいふにはれぬ道具類を様々と並べ込んでおき、庭の植込みの草木まで、不自然に色々人工を加へて拵へてあるのは、見た目も苦しく、誠にいやなものだ。こんなにして見た所で、どうしていつまでもながらへ住んでゐる事が出来よう、やがてまたこれも瞬く間に焼けて烟となつてしまひましょうと、一寸見るからにすぐとそんな氣がされる。

【文旨】 人工的な、事々しい住居を見ると不愉快でたまらぬ。一寸見るからに「こんな事をして見て、こゝにいつまで住んでゐられよう、これもまた瞬く間にべら／＼と燃えて了ひましょう」といふやうな氣がされるといふのである。「また時の間の烟ともなりなむ」といふ文句の内には、自然的に、今迄幾度も見た大廈高樓の火事といふものが頭に浮んで、「こいつも亦あのやうな具合にべら／＼と焼けて了はう」といふやうな氣分も働いてゐようし、それから又、いやに金びかの仰山な建物を見る時に自然と起るさうした心の感じもよく寫されてゐると思ふ。

【語義】 ○たくみ。工匠、大工。○唐の日本の。支那だの日本だの。唐製のや日本製のやの意。この場の「の」は並立の意をあらはす。○えならぬ。何ともいふにはれぬ。非常に珍奇な意。○前栽。庭さきの植込み。○心のまゝならず。草木の自然のまゝでなく。色々と人工を加へてあるのをいふ。此の場合の「心」は草木の心である。

○作りなせるは、拵へてあるのは。○見る目も苦しく。見た目も苦しく。目に見た感じもせしこましくの意。○わびし。つらい。それを見てつらく感ずるといふので、結局、いやだ、不愉快だ、うんざりするといふ意味になる。○さてもやはながらへ住むべき。さうした所でそこにながらへ住む事が出来ようや出来はせぬ。やは……べき」は反語の呼應。此の句の意味を更に平たく砕いて言へば、「こんな事をして、いつまで斯うしてゐられるもんか、やがて又べら／＼と焼けても了はうさ」といふのである。○また「は」或は又でなくて「やがて亦」である。○時の間の烟。また／＼と焼けても了はうさ。○ともなりなむ。ともなつて了はう。この場合の「も」は感興的に添つたので、更に分り易くするためには「となりもしなむ」と考へてもよい。「も」の慣用轉位の趣である。○うち見るよりも。一寸見るから「より」は「……とすぐに」の意。「も」は軽く感興的に添つた語。

おほかたは、家居にこそ事さまは推しはからるれ。

【通解】 大體は、住居の具合によつてその家の主人公の様子心意氣は推しはかられるものである。

【文旨】 此の一小節は、前節から後節へのつなぎ目である。前節の後に屬してゐると見るのも妙だし、後節の頭だと見るのも變だ。

【語義】 ○おほかた。大體。何か事を敘する場合、それを大掴みにしていふ趣の語である。○家居に。住居によつて、住居の具合によつて。「に」は「によりて」の意。○事さま。事のさま。こゝではその家に住む主人公の様子心事をいふ。

後徳大寺の大臣の寢殿に、鳶をさせじとて、繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶の居たら

む何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞きはべるに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いづぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや、「烏のむれるて池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひてなむ」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺にも、いかなるゆゑか侍りけむ。

【通解】 後徳大寺の大臣の正殿の屋根に、鳶をとませまいとして、繩を張られてあつたのを、西行が見て、「鳶がとまつたからとて、何も差支へないではないか。此の殿の御心も、まアそんな位の所かナ」というて、その後は參らなかつたと聞いて居りました所が、綾小路の宮のおいで遊ばす小坂殿の棟に、いづぞや繩を引かれてあつたので、彼の後徳大寺殿の例が思ひ出されましたが、それはほんに「烏が群れ集つて池の蛙を取つたので、それを御覽になつて可愛さうに思召してのこと」と或人が語つたので、それなら誠に御殊勝な事だと思はれたのであつた。して見ると、後徳大寺の方にも、どうかいふわけがあつたのかもしれない。

【文旨】 住居に關聯した二つの話を書き添へて、その裏面に、家を大事がる爲めの仕打はいやなものだといふ心持を響かせると同時に、同じ仕打も、その心事次第で、よくも悪くも思はれるといふ事を述べてゐるのである。「徳大寺にもいかなるゆゑか侍りけむ」として、見掛けだけで一概にけなしでも了はれぬといふ軽い反省考慮の氣分を働かした所に文としての味がある。さればといつて西行を悪くいふ心持などは毛頭ない。

【語義】 ○後徳大寺の大臣。左大臣實定。和歌で最名人。後徳大寺はその稱號。こゝの話は、古今著聞集宿執第二十三にも出てゐる。「の」は「が」といふ主語とも考へられるが、こゝの「大臣」は「大殿」といふ原義に近

く「大臣家」といつた趣で、「の」は領格扱ひにした方が自然だらう。○寢殿 正殿即ちおも家。○西行 有名な歌人、西行法師。法名圓位、後に西行と改めたのである。○鶯のふたむ 鶯の止らうのは「たらむ」は「たる」を婉曲に敘した形、連體省略で、下に「は」を省略した形である。○何かは苦しかるべき 何の差支かあらう、少しも差支はない。「何かは……べき」は反語の呼應。「苦し」は差支へる、困る、不都合だの意。○この殿 後徳大寺實定を指した語。○さばかりにこそ その位のものだ。「さばかりにこそありけれ」又は「さばかりにこそはあらめ」の略と見ればよい。この殿の御心もそんなものか、一向つまらぬ、といふのである。○参らざりけると 参らなかつたと。平安朝文法の古正に従へば「けりと」であるが、早くから「けると」と誤つてゐたのである。○聞きはるに 聞いて居りました所が。○綾の小路の宮 山門別院新日吉門跡たる妙法院の俗稱、又は其の門跡たる法親王を申す語、こゝは龜山天皇の皇子性惠法親王をいふ。○おほします おいで遊ばされる、住つておいでになる。○小坂殿 妙法院の一名。○かのためし 彼の例、後徳大寺殿の例。○まことや ほんにまア。丁度口語の「さういへばほんとに」といふやうな趣の所に使ふ一種の感動的接續詞である。○むれゐて 群り居て。○御覽じかなしませ給ひてなむ それを御覽になつて憐れみ遊ばされて斯くなされたのだ。「御覽じかなしむ」は一つの熟詞、「なむ」は二段の係で、下に「斯くはしなさせ給へりける」とでも補つて見ればよい。○人の語りしこそ 或人の語つたのに依つて。「語りしにこそ」の略のやうに考へればよく分る。この「こそ」に對する結びは「おほえしか」の「しか」「きの」已然形である。○さてはいみじくこそ それでは實に立派な事だ。「こそ」の下に「ありけれ」と補つて考へてよい。○おほえしか 思はれた、感じた。○いかなるゆゑか侍りけむ どういふ譯がありましたらうか。但、句としての感じは、どうかいふ譯があつたらうといふ方である。多分何かの譯があつた事でしたらうといふ心持を、こんな具合に疑問的に表現したものと思へばよい。

第十一段

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉にうづもる、篋の雫ならでは、つゆおとなふものなし。関伽棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばとおほえしか。

【通解】 十月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、或山里に人を尋ねて這入つて行つた事がありました、所が遙かな苔の細道を踏み分けて行くと、ずうーと奥の方に、心細くすまひをしてゐる一つの庵があつた。それは實に閑寂なもので、木の葉で埋つてゐるとひの雫の音より外には、何一つ音なふ物音もない。然し水桶棚に菊や紅葉などの折りちらしてゐるのは、それでもやはり住む人があるからであらう。斯うしてでも住めば住めるものだなアと、しみみ感に堪へて見てゐる内に、ふと氣がつくと、向ふの方の庭に、大きな柑子の木の、實で枝もたわむ程になつたのがあつて、その圍りを嚴重に圍つてゐるのが目についたので、その爲めに些か興がさめて、あゝこの木がなかつたらばなアと、つくづく思はれたのであつた。

【文旨】 栗栖野を過ぎて或山里に這入つて行つた時、遙かな苔の細道の奥に一つの庵を見つけた、それは作者が

日頃から憧憬してゐる通りの、實に閑寂を極めた庵であつたので、しみじみと感に打たれて見てゐた、と、一本の大きな柑子の木があつて、嚴重な圍がしてある、それが目についた爲めに、折角の感興がさめて、その木一本ゆゑに離俗閑寂の趣のすつきり破られてゐるのがつくづく惜まれたといふのである。面白い、如何にも活き／＼した筆致である。前段の「家居にこそ事ざまはおしはからるれ」と聯關して、これもその一例を、蓋し假想的に構成したものと見てよからう。

【語義】○神無月 陰曆十月の稱。○栗栖野 山城の醍醐の邊。○山里 山家、山中にある人里。○遙かなる苔の細道をふみわけて 遙かな苔の細道を歩いて行くとその奥に、苔のはえた細い一筋の道が遙かにづうとついでゐる其の奥に、といふのである。○心ほそく住みなしたる庵 心細くすまひをしてゐる庵。世離れて如何にも物さびしく住つてゐるといふのである。○心細くは其の寂しさに共鳴してゐる感じの語である。○庵は粗末な小屋。○寛の雫ならでは 掛樋の雫でなくては、とひの雫の音より外には「寛」は地上に高く架けて水を通す樋。○つゆおとなふものなし 少しも音なふものはない。「つゆ」は下に打消の語を伴つて少しもの意をあらはす。「おとなふ」は音を立てて訪ふの意から、訪問するの義にもいふが、こゝは單に音を立てるの義だらう。樋の雫の外に何一つ音もない——一面からいへば、ちよろ／＼と滴る樋の雫の音もよく聞える程の静かさだといふ氣分である。○關伽棚佛に水を供へる器などを載せておく棚。佛前の棚ではない。○折り散したる 折り散してゐるのは。佛に奉るべき菊や紅葉、或はその残物が、關伽棚の上に無造作に置いてゐるのは、といふ意。○さすがに それでもやはり。こんなに寂しくて人ツ子一人ゐないやうだがそれでもやはり、といふのである。○かくてもあらはれけるよ 斯うしてでも住めば住まれるのだよ。「あらはれ」は「在り得る」の意。「れ」は可能の意味の助動詞。○あはれに見るほどに 感にたへて見てゐる内に「あはれに」は「あはれに覺えて」の略と見てよからう。○枝もたわむになりたるが 枝もたわむほどになつたのがあつて。實で枝もたわむ程になつたといふのである。「なりたる」は實がなつたと見ら

れるが、それよりも、そのやうになつてゐるといふ方に見た方が古文調として自然であらう。○圍ひたりしこそ圍つてあつたのでそれによつて「たりしにこそ」と考へていふ。木の圍を嚴しくかこつたのは、取られぬための用心か、或は木そのものを霜でいたぬやうに圍つたといふのか、何れにしても離俗の閑居にはふさはしからぬ光景に相違ない。○ことさめて 興がさめて。今迄のゆかしさ面白さの感じがさめたといふのである。○この木ならましかばと 若しもこの木がなかつたらどんなによからうになアと「ましかば」は下に「まし」と呼應して、さうでない事を假にさうあると考へた場合の慣用語。この文では、下に「いかによからまし」などいふ語の省かれてゐるものと思へばよい。

第十二 段

おなじ心ならむ人と、しめやかに物がたりして、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まむこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらむと向ひ居たらむは、ひとりある心地やせむ。

【通解】自分と同じ心持を持つたやうな人と、しみじみと話をし、面白い事でも、又つい一寸した世間話でも、少しも隔てなく語り合つて慰まうこそ、實に嬉しく感ずるに相違ないのだが、さて仲々そんな人のあらう筈もないので、少しも向ふの人のいふ事にそむくまいとして對坐してゐるといふやうな場合には、一向につまらなくて、丸で一人ぼつちであるやうな氣がしよう。

【文旨】心友は得がたいといふ歎を委曲な筆致で敘してゐるのである。同じ心の人と隔てなく様々の物語をして

慰め合つたらどんなに嬉しからう、所が仲々世の中に同じ心の人などいふものはない、そこで結局表面的な交際をして、先方の意見意向に少しも背くまいといふやうに、相手に氣兼ねしいし對坐してゐる、といふやうな場合には、何等心の慰む筈もない、それでは人と話をしてゐても、心の中は一向つまらなくて、丸で一人ぼっちであるといふのはなからう、といふのである。

【語義】 ○おなじ心ならむ人。心持の同じであるやうな人。心は趣味につけ考につけ、凡てについての心持をいふのである。ならむは「なる」の婉曲用法。○しめやかに。しんみりと。○をかき事。面白い事も、趣の深い事柄についても。○世のはかなき事。世の中の一寸したつまらぬ事も、つまらぬ一寸した世間話をも。はかなきを「無常」の意に解しては「うらなくいひ慰まむ」といふ文句に合はなくなる。○うらなく。心の隔てなく、心おきなく打とけて。○さる人。そのやうな人。○つゆ違はざらむと。少しも背くまいと思つて。相手のいふ事にそむくまいとしての意。○向ひみたらむは。對坐してゐようのは。相手になつて話をしてゐるのをいふ。○ひとりある心地やせむ。只一人ゐる様な氣もしよう。丸で對坐の興はないといふのである。

互にはいむほどの事をば、げにと聞かひあるものから、いさゝか違ふ所もあらむ人こそ、我は「我はさやは思ふ」など争ひにくみ、「さるからさぞ」ともうち語らばは、つれづれ慰まめと思へど、げには少しかこつたも我とひとしからざらむ人は、大かたのよしなしごとといはむ程こそあらめ、まめやかな心の友には、遙かにへだたる所のありぬべきぞわびしきや。

【通解】 お互に言はう程の事をば、成程なアと理解を持つて聞くだけの友達かひはありながら、而も一方に於て

聊か意見の違ふ點もあるやうな人こそ、おれはどうもさうは思はぬ」などと言ひ争ひ、又「それだからさうなのだ」とも語り合つたならば、徒然無聊の情も慰まうと思ふが、さて又ほんとに少し世をかこつといふやうなしんみりした方面に於ても自分と同様でないやうな人は、只一通りのつまらぬ事を言ふ位の間はそれはよからうけれども、眞實の心の友としては、遙かに距離があるに違ひない、その點が實になさげなく思はれるのである。

【文旨】 大體同じ心持でありながら、而も一方には少し意見の違つた所もあつて、お互に隔てなく議論もする、さうした友人と相語つたらどんなに徒然の思が慰められよう、とはいへ、同じく意見の相違といつても、實はその違ひ方によりけりで、例へば少し世をかこつといふやうなしんみりした方面に於てまで自分と一致を缺いてゐるやうな人は、結局世間一通りの話相手といふに過ぎない、眞の心友としては遙かに距離があつて駄目だ、といふのである。随分こみ入つた書き方であるから、分り易いやうに、全段の文脈を示して見よう。

- I 同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかき事も、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まむこそ、嬉しかるべきに 同心ノ友ト相語ルノ快
- II さる人あるまじければ、つゆ違はざらむと、向ひ居たらむは、ひとりある心地やせむ 表面ヲツクロツテ人ト對坐スルノ不快
- III 互にはいむほどのことをば、げにと聞かひあるものから、聊か違ふ所もあらむ人こそ、「吾はさやは思ふなど争ひにくみ、さるからさぞとも打語らばは、つれづれ慰まめと思へど 互ニ心事ハ了解シテ居ナガラ、又多少意見ヲ異ニシテ、オ互ニ議論シ合フ様ナ友人ト相語ルノ快
- IV げには少しかこつ方も、我と等しからざらむ人は、「大方のよしなし事云はむほどこそあらめ、まめやかな心の友には、遙かに隔たる所のありぬべきぞわびしきや 心ニミシタ方面ニ於テ一致ヲ缺ク友ノ不快

斯ういふ四段仕立ての文で、べきに、思へどの所は、思想的に一轉化する所を助詞でつなげた形式、それから「

の中は挿入句である。

【語義】 ○互にいはむほどの事をば。お互にいはう程の事をば。「ほど」はこゝでは「くらゐ」の意。○げにと聞くかひあるものから。なるほどと聞くだけの甲斐はありながらも。お互に言ふ事を理解して、なるほどと、十分の了解を持つて聞くだけの友人甲斐はありながら、而も一面に於て、といふ意。○いさゝか違ふ所もあらむ人。少し意見の違ふ點もあるやうな人。違ふは意見の相違と見てよい。○さやは思ふ。さう思はうやさうは思はぬ。「やは」は反語。○争ひにくみ。言ひ争ふ。「にくむ」は今いふ程の強い意味でなく、ごく軽く、只お互に言ひ争ひ反駁するといふ迄である。○さるからさぞ。それだからさうなんだ。先方の意見に基いて、それを利用して自説を立て通さうとする時とか、又は、何かの道理を述べ立てて、これ／＼の譯だからこれ／＼なのだといふやうな場合にいふ言葉である。○げには。ほんとに又。○少しかこつたも我とひとしからざらむ人は。少し世をかこつといふやうな點も自分と一致しないやうな人は。自分が世をかこつといふ點に一種言ひ離い感懐を持つてゐると、その大事な點で一致しないやうな人は。自分が世をかこつといふのである。「少し」は謙辭、「かこつ」は「不平をいふ」といふでなく、もつと迫り深い氣分で、世のはかなさ、拙さをしみ／＼かこつといふのである。○大かたのよしなしごといはむほどこそあらめ。普通のつまらぬ事をいふ間はよからうが、「こそあらめ」は「兎も角」といふ趣の一種の慣用形で、色々テリケートな趣に使はれる、こゝでは「こそよくはあらめ」の略と見てよからう。○まめやかな心の友には。まじめな心の友としては、「まめやか」は眞實、忠實、眞面目等の意。「には」は「としては」の意。○遙かにへだたる所のありぬべきぞわびしきや。遠く距離があるに相違ない、其の點が實になさけない。心友としては距離があり過ぎる、そこがなさけないといふのである。

第十三段

ひとり燈火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなう慰むわざなれ。文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなること多かり。

【通解】 ひとり燈火の下に書物を繕いて、昔の世の人を友とすること、實に格段に心の慰むことである。書物では、文選のしみ／＼とした情趣の深い卷々、白氏文集、老子の言、莊子の書などがよい。わが國の學者たちの書いたものも、古へのは、情趣深い事が多くある。

【文旨】 前段に心友難の歎を敘したので、それを受けて、心靜かに書を読んで古人を友とするの快を述べたのである。尙古趣味の現はれであるが、そこに大いに味ふべきものがある。

【語義】 ○文。書物。○ひろげて。開いて、ひもといて。○見ぬ世の人。見ない世の人、昔の人。○こよなう。特別に、格段に。○慰むわざ。心の慰むこと。○文選。支那の古い詩文集。梁の武帝の子、昭明太子の編したもので、周末から六朝までの詩文を集めて三十卷になつてゐる。○あはれなる卷々。情趣の深い卷々。○白氏文集。唐代の詩人白樂天の詩文集。○老子のことは。老子の言。世に所謂老子で、老子經とも、春秋戰國時代の人莊周のとはは次の「篇」に對しただけで別意はない。○南華の篇。莊子の書。世に所謂莊子で、春秋戰國時代の人莊周の著書である。唐の玄宗の天寶元年に莊子を尊んで南華眞人と號し、其の書を眞經といつたので、唐代にはその書を南華經とも南華眞經とも稱してゐたのである。○この國の博士。わが國の學者。博士は官名としてもいふ語だが、こゝは汎く學者、博學の士の義に用ひたのである。○いにしへのは。古の書は。本朝文粹の類を指したものと考へられる。○多かり。多くある。「多くあり」の約。

第十四段

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしの賤山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしきものしよも、臥猪の床といへば、やさしくなりぬ。

【通解】和歌こそ何というてもやはり趣のあるものである。賤しい下民や木こりなどのする事でも、歌によれば面白く、おそろしい猪も、歌言葉として臥猪の床といふと、やさしくなつて了ふ。

【文旨】前段に漢詩文の事を擧げた順序として、今度は和歌の事に及んで、何といつても和歌は面白いものだ、つまりらぬ事、おそろしい事も、それを歌にすると、おもしろく、やさしくなつて了ふ、と述べてゐるのである。

【語義】○なほ。やはり、何というてもやはり。詩がいと何とかいうても、やはり歌はおもしろい、といふ心持と見てよからう。○あやし。いやしい、つまらぬ。あやしのは「あやしき」と同義。○賤山がつ。「賤」は賤しい者。「山がつ」は山で労働する者、即ち木こり、そまびとなどの稱。○しわざ。するわざ、する事。○いひ出づれば。いひ表はせば、歌として表現すれば、歌によれば。○臥猪の床。猪が枯草(古語に「かるも」といふ)を掻き集めて臥床をこしらへる、それをいふ歌語。○やさしくなりぬ。やさしくなつて了ふ、自然とやさしく聞える。「ぬ」はこゝでは完了といふ時の意味でなく、自然にさうなつて了ふといふ趣の一種の強勢詞である。常時完了といふべき用法である。

この頃の歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、言葉の外にあはれにけしき覺ゆるはなし。

【通解】近頃の歌は、一かど面白くよみとへのへてあると見えるのはあるが、古い歌のやうに、どういふものか斯う、言外にしみんとして餘情の感じられるやうなのはなし。

【文旨】前節を受けて、今の歌は、一寸した技巧の面白さ位で、どうも古歌のやうに言外の風情がない、といふのである。

【語義】○一ふしをかしくいひかなへたり。一かど面白くいひとへのへてある。「一ふし」はひとかど、一點、の意で、成程こゝは一寸うまいといふやうに、歌の中にどこかに特に目につくやうな所はある、といふのである。「いひかなへたり」はいひかなはせてあるの意で、題意なり歌の格調なりの上になやんと合ふやうな具合に拵へてある、といふのである。○歌ども。「ども」は複数をあらはす語。口語解としては單に歌としておいてよからう。○いかにぞや。どうしたものか、なんだか。さうあるのは何故かといふ疑の意を疑問といふほど重苦しい心持でなく、どうも納得が行かぬといふやうな氣分で、軽く問投詞的にいふ一種の慣用語である。○けしき覺ゆる。情趣を感ずる、餘情の感じられる。「けしき」は趣ある様子即ち情趣、風情といふほどの意で、それが「言外に」であるから餘情といふ事になるのである。

貫之が、「絲による物ならなく」といへるは、古今集の中のうちたくづとかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えす。その世の歌には、すがたことば、この類のみ多し。この歌にかぎりで、かくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、「ものとはなしに」とぞ書ける。新古今には、「この松さへ峰にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、誠に少しくだけたるすがたにもや見ゆらむ。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にもこ

とさらに感じおほせ下されけるよし、家長が日記には書けり。

【通解】貫之の「絲による物ならなく」といふ歌は、古今集の歌の中の屑だとかいひ傳へてをるが、今日の世の人の詠めさうな風情とは見えぬ。その當時の歌には、歌の姿も詞も、かうした類のが非常に多い。此の歌に限つて特にかう歌屑と言ひ立てられたのも、どういふ譯か分らない。源氏物語には「ものならなく」を「ものとはなしに」と改めて書いてある。(して見ると「ものならなく」といふ詞使ひがいけないのかもしれない)。新古今には「のこる松さへ峰にさびしき」といふ歌を歌屑だといふのであるが、それは如何にも少しくだけて歌體の整はぬ姿に見えもしようか。然しこの歌も、衆議判の時に、相當だといふ旨の判定があつて、後にも殊更におほめの御言葉を賜はつたといふ事が、家長の日記には書いてある。

【文旨】古今集と新古今集とから歌屑といはれる歌の例を引つ張り出して、屑といはれるのでも、昔のはどうして仲々立派なものだ、といふ心持を述べてゐるのである。これは勿論歌論といふ程のものではない。兼好は頼阿、淨辨、慶運と共に當時和歌の四天王と呼ばれた人ではあるが、歌については格別大し意見を持つてゐなかつたらしい。要するに尙古趣味を基調としての自分の好尚を敘したといふ迄である。

【語義】○絲による物ならなく。古今集の羈旅の部に『あづまへまかりける時、道にてよめる。貫之。絲による物ならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな』とある歌をいふ。ならなくには「ならぬに」(naranaku)の延音。より合はせた絲なら分れば細くなるのが當然、今自分が斯うして故郷を別れて来た旅の道は、別段絲によるといふ譯のものではないのに、どうしたものか妙に心細く思はれる事かな、といふ意。○いへるは、いへる歌はの略。○うたくづ。歌の屑、多くの歌の中で最も拙劣なもの。○とかや。とか。斷定的にははずに、軽い疑を含めていふ語。○詠みぬべき。詠めさうな。ぬべきは「べき」を強めていふ語。この場合は可能(出来る)の意を表はし

てゐるものと考へてよい。○こと。事柄。物事の全體の趣を漠然といふ語で、風情といふに當る語。○すがた。ことば。姿や詞。歌の一首としての姿態とその用語。○この類のみ多し。この類が非常に多い。この場合の「のみ」は「いと」といふに近い強め詞。○知り難い。譯がわからない。○ものとはなしに。源氏物語の總角の巻に「物とはなしに」と、貫之が、この世ながらの別をだに、心細き筋に引きかけむをなど云々とあるのをいふ。即ち原歌の「物ならなく」を源氏には「物とはなしに」と改めてゐるから、そこが歌屑といはれた個所なのか、といふ心持で書いてゐるのであらう。○のこる松さへ。新古今集の冬部に「春日社の歌會に落葉といふことをよみて奉りし」といふ詞書があつて、七人の歌が出てゐる、其の最終の祝部成伸の歌に「冬の來て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峰にさびしき」とあるのをいふ。冬が來て、山も禿げて見えすく程に木の葉が散つて、峰に残つてゐる松までが寂しく見える、といふ意。○いふなるは「歌屑といふなるは」の略。○くだけたるすがた。碎けた姿、散漫で整はぬ歌柄。○衆議判。和歌所に歌道の大家たる選者が寄り集つて、歌の善悪を審判すること。歌合の時には判者一人を定めるのだが、これは大勢で相議して判定するので「衆議判」といふのである。○よろしきよし沙汰ありて。相當に詠めてゐるといふ判定があつて、「よろし」は(一)まアよい、かなりだ、相當だ、悪くもないといふやうに、不十分ながらもまアよいといふのが原義で、轉じて、(二)よい、結構だ、の意にも使ふ。「沙汰」は古文では、評定、評判(世の中の取沙汰、噂)、指圖、命令、知らせ等さまざまの意に使ふ。家長日記に「此歌、和歌所にて衆議判なりしに、この歌をよみあげたるを、たび／＼詠せさせ給ひて、よろしくよめるよしの御けしき也」とあつて、それによると、後鳥羽院から相當に詠んである旨の仰せがあつた」といふ事になるが、本文自體の表現では通解のやうに取る外ないであらう。○感じおほせ下されけるよし。感じておほめの言葉を仰せ賜つたといふ事が。後鳥羽院の観感を蒙つた事である。○家長が日記。家長の書いた日記。源家長は、後鳥羽上皇が和歌所を置かれるについで、その開闢(預り役)になつた人。

歌の道のみにしへに變らぬなどいふこともあれど、いさや、今もよみあへるおなじことば、歌枕も、むかしの人のよめるは、更におなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたも清げに、あはれも深く見ゆ。

【通解】 歌の道だけは古へに變らないなどいふ説もあるが、さアどんなものかな、今も世の人の同じやうに詠むその同じ詞や、歌の名所の類でも、昔の人の詠んでゐるのは、決して同じものではない。安らかにすらくとし、てゐて、歌體もさらりと美しく、情趣も深く感じられる。

【文旨】 同じ詞を使つても、昔の人の上品で、すなはだ、どうしても今の人のはいけない、といふのである。

【語義】 ○いふこともあれど。世間ではいひもするが。口語で「いふ事もある」(稀にはさういふ事もある)といふのは少し言葉の感じが違つてゐる。蓋し新古今の西行の歌「末の世もこのなさけのみかはらずと見し夢なくはよそに聞かまし」といふ歌の長い詞書の中に「この道こそ世の末にははらぬものはあれ。なほこの歌よむべきよし」云々とあるのを暗示しての立文かといふ。○いさや。さあどんなものかしらん。いさは必ず下に打消の語を取る。「いさ」(サアと誘ひ立てる詞)とは全く別の語。この文では「いさ……あらず」とずうと下の方と呼應してゐる。この文ではその下に更に「や」といふ感動詞がついて趣を強めてゐるのである。○よみあへる。誰も彼も同じやうに詠むの意。○歌枕。歌によみ込む名所。○やすくすなほにして。安らかにすらくとしてゐて。殊更に技巧を弄した不自然なものではないとの意。○すがたもきよげに。歌の體も上品にさらりとあくぬけがしてゐて美しく。

梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、またあはれなることは多かめれ。昔の人は、いかにいひ捨てた

ることぐさも、皆いみじく聞ゆるにや。

【通解】 梁塵秘抄の謠ひ物の詞こそ、またどうもしみんとした情趣のある事が多いやうである。昔の人はどんなに言ひ捨てた文句でも、皆すばらしく聞えるのであらうか。

【文旨】 梁塵秘抄を引き出して、結局昔の何れも彼もよいと結んだのである。

【語義】 ○梁塵秘抄。神樂、催馬樂の類の謠ひ物を集めた書で、八雲御抄には、後白河院の御作としてある。「梁塵」といふ語は、漢の處公といふ人が、非常に聲がよくて、その人が歌ふと梁上の塵が動いたといふ故事から、謠ひものの事にいふのである。○郢曲。歌謠の類の總稱。支那では、俗曲、はやり歌の義に使つてゐるが、我國では轉じて朗詠や今様の類の謠ひ物の總稱として用いたのである。○昔の人は云々。昔の人はどんなに言ひ捨てた言葉でも立派なものであつたのだらう——咳唾玉をなしたのだらう」といふ意と、「昔の人の言葉は、どんな言ひ捨てた一寸した詞でも今の吾々にはよく聞えるのだらう」といふ意とを、二つごちや／＼にして書いてゐる筆致である。○いひすてたる。いひすてた。少しも巧まずに、言ひはなしにしたの意。○ことぐさ。言葉、文句。言種の意。いづも言ひ慣してゐる言葉の義にもいふが、茲は單に言葉の義と見てよい。○いみじく聞ゆるにや。すばらしく立派に聞えるのであらうか。「にや」は「にやあらむ」の略。

第十五段

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむる心地すれ。そのわたり、こゝかしこ見ありき、田舎びたる所、山里などは、いと目馴れぬことのみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる。「そ

の事かの事、便宜にわするな」など、いひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人も、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。

【通解】 どこにもせよ、しばらく旅泊りをしてゐるのは、實に目のさめるやうな新しい気分になるものである。その邊を、あちらこちら見て歩く、それが田舎びた所や、山里などである場合には、誠に目馴れぬ珍しい事ばかり多い。都の自宅へ幸便をもとめて手紙をやる。その手紙に、「あの事、この事、凡て適宜な折に忘れずちやんとしておけ」などというてやるのは實に面白い。さういふ所に於てこそ、何かにつけてすばらにならずに心遣がされるものだ。持つてゐる手道具まで、よいものはちやんとよく見え、藝能のある人も、器量様子のよい人も、ふだんよりは一層それが引立つてよく見えるものだ。

【文言】 旅泊の気分興趣を實によく寫してゐる。「めさむる心地」とは寫し得て妙、實に旅行の第一印象は目の覺めるやうな清新な気分になる事である。それから、都への手紙、持つてゐる調度、藝能、容貌と、平素なら何でもない事まで、旅先では一々新しい気分が注意を引く。殊に「よろづに心づかひせらるれ」といふ一句は、最もよく趣味的に見た旅泊の味を寫してゐると思ふ。

【語義】 ○いづくにもあれ。どこにもせよ。とこでもよい、別段どこそこがよいときめるには及ばぬ、どこなりとも、といふ意。○旅だちたるこそ。旅泊してゐるのこそ。旅だつは如何にも旅らしいといふ意の語で、その原義のまゝ解けば、「如何にも旅泊らしくしてゐる」となるが、こゝはもつと端的に旅宿りをしてゐる、即ち家を離れて旅泊をしてゐるの義である。他にもかうした用例が見受けられる。「旅に立つてゐる」旅行をしてあちこち歩いてゐる」といふのではない。○めさむる心地。目がさめるやうな心持。気分が變つて新しくなるをいふ。○見ありき。見えてあるき。○ありくは「あるく」に同じ。○みなかびたる。田舎風な、田舎めいた。○目馴れぬこと。見なれぬ事、珍しい事。○たよりもとめて。便を求めて。幸便を求めて手紙を託するのである。○その事かの事便宜にわするな。その事あの事、然るべき折に忘れずに遣れ。家人に、あれも忘れるな、これも忘れるなと色々注意してやるのをいふ。「便宜」はよき折、よき機會、然るべき場合の意。即ちその事をすべき折に當つて忘れず遣れ、といふのである。○心づかひせらるれ。心遣がされる。氣を配つてつゝましくしてゐるやうになるといふ意。○もてる調度。持つてゐる手廻りの道具類。○よきはよく。よいものはよく見える。この句は下文の「常よりはをかしとこそ見ゆれ」に掛る句法で、よいものも平素は見慣れて格別よくも見えないが、田舎などに旅行してゐる場合には、それがきは立つてよく見るといふのである。○能。藝能の意。繪が書ける、歌がうまい、字がうまい、といふ類。○かたちよき人。姿態のよい人、器量様子のよい人。○をかしとこそ見ゆれ。興あるものに見える、特によく見える。

寺社などに、忍びてこもりたるもをかし。

【通解】 寺や社などに、こつそりとおこもりしてゐるのも亦趣がある。

【文言】 旅泊の事を敘した餘説として、一寸寺社におこもりする事を書きそへて面白く文を結んでゐるのである。

【語義】 ○忍びて。忍んで。人に知らさず只一人での意。

第十六段

神樂こそなまめかしく面白けれ。大かた物の音には笛筆箒。常に聞きたきは琵琶和琴。

【通解】 神樂は實に優雅で面白いものだ。大體樂器の音では、笛、筆箒がよい。そしていつも聞きたいのは琵琶、和琴である。

【文旨】 樂器についての好みを述べたまでである。大體の筆箒は枕草子を模倣したものといへよう。

【語義】 ○神樂 神前で奏する音楽。こゝは特に宮中の内侍所で行はれる御神樂を指したものであらう。それは毎年十二月の吉日に行はれた、頗る古雅な、優美な式である。○なまめかしく 優雅で。俗化しないで上品に奥ゆかしいといふ心持である。○物の音 樂器の音の意。○笛 横笛や笙の笛をいふ。○筆箒 もと支那から渡來した樂器で、多くの管竹をつらねて、豎にして吹く一種の笛。○常に聞きたきは いつも聞きたいのは。笛や筆箒などは、主として合奏の場合の面白さであり、琵琶、和琴は一つでも面白いものなので、特に斯ういうたものであらう。○和琴 六絃琴。我國固有の樂器で、東琴、倭琴ともいふ。

第十七段

山寺にかきこもりて、佛につかうまつこそ、つれづれもなく、心の濁もきよまる心地すれ。

【通解】 山里のお寺にお籠りをして、佛様にお仕へ申すのは、誠に無聊の思もなく、心の色々な煩惱もきれいななるやうな心持がするものだ。

【文旨】 山寺におこもりをする楽しさを趣味的にいうてゐるのである。

【語義】 ○かきこもりて 「かき」は接頭語で、格別深い意味はない、強ひて言へば、ずつとといふ口語に近くて幾分その働きを強めていふ気分と思へばよい。○つかうまつる おつかへ申す「つかへまつる」の音便。○つれづれもなく 徒然もなく、屈託もなく。一意専念に佛に仕へてゐるので、無聊に苦しむ事がないといふ意。○心の濁 心の穢。種々様々な煩惱をいふ。○きよまる きれいになる。自然と清められるの意。

第十八段

人はおのれをつまやかにし、おごりを退けて財をもたず、世をむさぼらざらむぞ、いみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。

【通解】 人は自分の生活をつまやかにし、驕奢を退けて財寶を身に持たず、世俗の利慾を貪らぬやうにするのが、實によい事だらう。昔から賢人の富んでゐた例は稀である。

【文旨】 人は儉約寡慾に限る。古來賢人の富めるは稀だ。というて、次節の實例に入るべき總説を爲したのである。

【語義】 ○おのれをつまやかにし 自分の身をつまやかにし。「おごり」の反對で、凡て簡素にし、質素にし、手軽にしてゐるのをいふ。○世を貪らざらむぞ 世の利慾を貪らぬのが。即ち、無闇と慾ばらぬのがの意。○いみじかるべき すばらしいであらう、立派であらう。

もろこしに許由といひつる人は、更に身にしたがへるたくはへもなく、水をも手してさげて飲みけるを見て、なりひさごといふものを、人の得させたりければ、ある時、木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて棄てつ、また手にむすびてぞ、水も飲みける。いかばかり心の中すゞしかりけむ。孫農は冬の月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、しるしとて世にも傳へけめ。これらの人は語りも傳ふべからず。

【通解】 支那に許由という人があつたが、其の人は何一つ身につけた貯へもなく、水を飲むにも手で以てすくつては飲んでゐたのを見て、或人が瓢といふものを與へたので、或時それを木の枝に掛けて置いたところが、それが風に吹かれてひゆい／＼と鳴つたので、喧しいというて棄てて、再びもと通りに水を飲むにも手で拵つて飲んだのであつた。どんなにか其の心中はすが／＼しかつた事であつたらう。又孫農は、冬の寒い頃にも夜具がなく、只藁が一束あつたのを、晩にはそれに寝て、朝になると取かたづけたのであつた。支那の人は、それをえらいと思へばこそ、書物に書き止めて世にも傳へた事であつたらう。こちらの人と來たら、よしやそんな人があつたとした所で、てんで語り傳へもしない事であらう。

【文旨】 前節の總敘を受けて、極端に簡素な生活をした支那の二人の例を擧げて、「これらの人は語りも傳ふべからず」と強く結んだのである。この最後の一句は、さうした簡素生活に對して、寧ろ嘲笑的な態度を取つた當時の人々に對しての餘憤と見てよからう。やゝ極端のやうではあるが、斯うした簡素生活に心から共鳴する態度は、今

の吾々に取つても誠に貴い教訓でなくてはならない。

【語義】 ○もろこし。唐土。廣く支那を指していふ言葉。唐土には場所を示す副詞の形で、文法的に言へば「唐土に許由といひつる（人ありその）人は」とあるべきものを省略した一種の慣用形式である。○許由。支那の帝堯時代の人、堯がその賢を聞いて天下を譲らうとした所が、とんだ事を聞いて耳が穢れたといつて、潁川で耳を洗つたといふ話がある。有名な隱士で、箕山に隠れて居た。○更に。少しも、何一つも「なく」と呼應してゐるのである。○身につしたがへる。身についてゐる。○たくはへ。貯蓄。金銭貨財凡ての貯へを廣く指したのである。○手しで。手を以て、手で。○さげて。さし上げて。すくひ上げての意。○なりひさごと。瓢、ひさごと、ふくべ。ふくべの實をくりぬいて乾したものを即ち普通に所謂瓢箪を二つに割いて、木の杓同様に水を汲むに用ひた器。古語に木の杓をひさごとといひ、それと區別して、ふくべひさごとを「なりひさごと」なつた實の杓の意」というたのである。○人の得させければ。或人が與へたので、「得させ」の「させ」は使役の助動詞で、或人がそれを彼に得させた、即ち與れて遣つたの意。○かしまし。やかましい、うるさい。○棄てつ。棄てて。この場合の「つ」は完全な終止でなく思想上副詞法となつて下につながるのである。○また。復、再び。○むすびて。拵つて。掌をくぼめて水をすくふのをいふ。○いかばかり。どんなに、いかほど。○心の中涼しかりけむ。心中が清々した事であつたらう。水の縁で「涼し」というたので、其の人の心中には何の屈託もなく、さぞ澄み切つて氣持がよかつたらう、といふのである。○孫農。蒙求に『孫農藁席』とあつて、その註に『三輔決錄云、孫農字元公、家貧織席爲業、明詩書爲京兆功曹、冬月無被、有藁一束、暮臥朝收』とある。○冬の月。冬の頃、冬の期節の意。○衾。かけぶとん。方形の夜具をいふ。○ありけるを。あつたのを。文法的にいへば「ありけりそを衾にかへて」の略と考へてよい。○をさめ。取收め、取片づけ。○しるしとて。書き止めて、書物に書いて。○世にも傳へけめ。世の中にも傳へたであらう。○これらの人は。こちらの人は、我國の人は。○語りも傳ふべからず。語り傳へもしなからう。さうい

ふ簡素な生活の貴さが分らず、てんで馬鹿にしてゐるから、よしやさういふ事實があつたにしても、書きとめて後世に傳へる事もしなからうといふのである。「も」の付き處が、古語と口語と違つてゐる事に留意するがよい。

第十九段

をりふしのうつり變るこそ、ものごとにあはれなれ。

【通解】 季節風物の移り變つて行くのは、何事につけても實に情趣のあるものである。

【文旨】 四時春夏秋冬の景を段々に述べて行く總敘として、季節々々の移り變つて行くのは、花につけ月につけるものだといふのである。約言すれば、四季の移り變りに伴ふ凡ての風物人事は皆悉く情趣あるものだといふのである。四季風物に對する敏感さは、吾々に取つても頗る大切な心構である。

【語義】 ○をりふし。季節、四季春夏秋冬に伴ふ風物。○ものごと。物毎に、何事にも。○あはれなれ。しみじみとした情趣がある。

ものあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草萌え出づるころより、やゝ春深くかすみわたりて、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづ

にたゞ心をのみぞなやます。花橋は名にこそおへれ、なほ梅のほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり、戀しう思ひいでらる。山吹のきよげに、藤のおぼつかなき様したる、すべて思ひすて難きことおほし。

【通解】 しみじみとした情趣は秋が一番まさつてゐると、誰も彼も皆いふやうだが、なるほどそれも一應は尤もだが、而し更に一段と心も浮き立つて面白いものは、どうしても春の情景であるやうだ。鳥の聲なども殊の外に春らしくなつてきて、のんびりとして静かな日の光を受けて、垣根の草も芽を出して來る初春の頃から、段々と春も漸く深くなり、その邊一體にずう／＼と深く霞み渡つて、花もやう／＼色めき立つて咲き出さうとする頃――斯うして春將に酣ならんとする折も折、相憎と雨や風がうち續いて、落著いた氣分もなくそゞくさと花が散つて了ふ。さうして花の散つたあとの櫻の梢が青葉になつて行く迄、人は只何かにつけて氣ばかり揉む事である。花橋は昔から懷舊の情を起させるものとして知られて居るが、やはり何といつても梅のほひに因つて、過去の事も又更に今に立ち戻つて新しく感じられ、戀しく思ひ出されるものだ。山吹の如何にもきれい／＼した姿や、藤のぼ／＼として頼りないやうな様子をしてゐるなど、すべて春は思ひ棄て難く無關心に看過しかねる事が多い。

【文旨】 春初から春晚までをさら／＼と描寫して、その間に、秋よりも春、橋よりも梅と、自家の趣味觀を表明してゐる。それも春を主題として、春に花を持たせるといふ程度のごく軽い表明である。春の始めと終りを彼して、花のま盛を書かぬ所にも、作者の趣味が端的に窺はれる。そして、「青葉になりゆく迄よろづに唯心をのみぞなやます」といふ著眼は、殊に自然の風物にあこがれて、心ゆくまゝに春を味はふとする人の心理を活々と描寫したものと云へよう。

【語義】 ○ものあはれは秋こそまされ。物の情趣は秋がいつよりも一番まさつてゐる。和漢の文學に於て、春

秋の優劣といふ事がしばしば問題になつて、その多くは秋を優つたものとしてゐる。それを指して斯ういふのだ。
 ○いふめれど。いふと見えるが、いふやうだが。○それもさるものにて。それもさうだか。なるほどそれも一應尤もではあるが而し、というて、其の下に反對の思想を起して来る一つの慣用語。○今一きは。今一層、今一段と。
 ○心もうきたつ。愉快でく心がフワ／＼と浮き立つやうになる。○もは感興の助詞。○春のけしき。春の情景、春の情調。單なる景色といふよりも「氣色」即ち氣分情調といふ心持の措辭と考へられる。○こそあめれ。あるやうだ。○こそあるめれ。の約。○こそあれ。といふ所を婉曲に言廻はしたのである。○ことの外に。特別に、格別に。
 ○春めきて。春のやうになつて、如何にも春らしくなつて。○のどやかなる日かげに。のんびりとして静かな日の光によつて。○垣根。垣、垣の所。○萌え出づる頃。芽を吹き出す頃から。即ち春の初めの頃からの意。○萌ゆは勢よく芽を出すをいふ。○や。漸く。○春深く。春がふけて。深くは「春」と「霞わたりて」と兩方に掛けてある。○かすみわたりて。ずう／＼と霞が掛つて。○けしきだつ。けしきが立つ、様子があらはれる。こゝでは、花が咲かうとして来る、ぼ／＼と蕾が開きかけるのをいふ。○ほどこそあれ。頃、その頃、ほどに」といふのを強めて咏歎の意を表はしたのである。○折しも。折も折、恰もその折、折しもは強めの助詞で、自然下に「相憎」といふ心持が響くのである。○心あわたくしく。落著いた氣分もなく。花を擬人して、花の心があわたくしくと見ることがよい。○散り過ぎぬ。散り去つて了ふ。「ぬ」はこゝでは「た」と譯してはならぬ、「散り過ぎぬ」といふのを強めた使ひ方である。○青葉になりゆくまで。花の散つた後の櫻の枝が青葉になつて行く迄。即ち晩春に至る迄の意で、「まで」は遙かに上文の「垣根の草萌え出づる頃より」の「より」と思想的に呼應してゐるのである。○よろづに。萬事に、何事につけても。○心をのみぞなやます。心ばかり痛める、氣ばかり揉んでゐる。この「心」は人の心。「のみ」は「なやます」を強めた詞と見てよい。○花橋は名にこそおへれ。花橋は懷舊の情を誘ふものだとはいひ習はされてゐるが、橋の事を、特に花を賞美する所から「花橋」といふのである。名におふ「名にしおふ」は、さうい

ふ名を持つてゐる、その點で人に知られてゐる、その點で評判が高い、といふ意。○なほ。やはり、何といつてもやはり。○梅のほにほにぞ。に」は「によりて」の意。○いにしへの事もたちかへり。古の事も今に立ち戻つて来て、過去の事も更にその感が新になつて。○思ひいでらる。思ひ出される。○らるは自然にさうなるの意。○きよげに。きれい／＼して。げ」は「やうだ」「さうだ」の意の接尾詞。○藤のおほつかなきさましたる。藤の如何にもたよりない様子をしてゐるなど。○おほつかなし」は、しつかりせぬ、たよりない、不安だといふ意。こゝは何だかぼ／＼として如何にもたよりないやうに咲いてゐるといふ感じ——それは實際藤の花を見る時最も端的に我々の感じ得る感じである——をあらはしたものと見てよい。藤の花の全體的の感じだから、殊更に「花房が長く垂れて」などと補つて解かぬ方がよい。○思ひすて難きこと。思ひすてにくいこと、念頭に止めず無關心に看過して了ふ事の出来にくいこと。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに繁りゆくほどこそ、世のあはれも、人の戀しさもまされと、人のおほせられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたぐくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に、夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも、あはれなり。六月祇、またをかし。

【通解】 四月になつて匆々の佛生會の頃、月中の賀茂祭の頃、若葉の枝の見るも涼しさうに繁つて行くその時分こそ、實に世の中のしみ／＼とした情趣も、又人を戀しく思ふ情も、一入まさるものだと、或人が仰せられたが、ほんとにその通りである。五月、端午の節で軒に菖蒲を挿す頃、早苗を取る頃、水鶏のたん／＼と門を叩くやうに

鳴くなど、どうして心細い感を起さずみられよう。六月の頃、見るかげもないやうな粗末な家に、夕顔の花が白く見えて、蚊遣火がくすぶつてゐるのも、しみんとした情趣がある。六月みそかの大祓、これがまた面白い。

【文旨】夏に入つて、春よりも更にさら／＼と輕妙に、而もきりツと引きしめて敘し去つてゐる。まづ「灌佛」「祭」と、初夏の行事の主なるものを出し、二者共に「頃」というて、その前後を讀者の聯想に訴へ、そして、その頃に於て一番すが／＼しく、如何にも夏だといふ感じを強く人に與へる。「若葉」を出して、「涼しげに繁りゆくほど」と言つてゐる。「頃」「頃」「ほど」は言葉の漸層的修辭である。五月の所も、やはり同様の筆法で行つて、六月に入つてぐつと變化を與へてゐる。その用意もよい。それから、「若葉の梢涼しげに繁り行くほどこそ、世のあはれも、人の戀しさもまされ」の一句は、作者の主觀描寫として殊に光つてゐる。「人の仰せられし」とあるが、恐らくそれは他人の言葉ではなく、作者兼好自身の感じであらう。此の作者には、自分の感じを人に託して言はせてゐると思はれる所が所々に散見してゐる。それから夏の氣分を表はすべき材料を多く田園に求めてゐるのも面白い。要するに夏の節は四季を通じて一番よい筆致だといへよう。

【語義】○灌佛 四月八日の佛生會、即ち釋迦の誕生日の法會。「頃」は、その時分の意、従つてその前後を讀者の聯想に訴へて、「頃こそをかきしけれ」といふやうな餘情を含めた筆致と見るべきである。「祭の頃」「あやめふく頃」など凡てそれに準じて考へればよい。○祭 四月の中の酉の日に於ける賀茂祭。昔、都に祭が數多くあつた中に特に賀茂の祭が一番ゆかしいものであつたので、單に「祭」といへば、直ちに賀茂祭を指すといふ習慣になつたのである。○若葉の梢 青葉の枝。梢は木末の義。○世のあはれ 世の中に對するしみんとした情調。○人の戀しさ 何となく人戀しく思ふ情。特に戀人に對しての思慕の念が募るといふやうにも取れるが、それよりもつと一般的に、妙に人戀しく心に一種言ひ難い寂しさを覺えると思つた方がしつくりするやうだ。○人の 或人が。○げにさるものなれ ほんとにその通りだ、如何にも尤も至極だ。○五月 早苗月の略であらうといふ。この言葉

は、「あやめふく頃」だけに掛けて見ずに、こゝで一寸きれて、「心細からぬかは」までの全文に總括的に掛つてゐるものと見るがよい。○あやめふく頃 「あやめ」は菖蒲。今日いふあやめは、昔は「花あやめ」というてゐた。五月五日の節句に、毒氣を退ける意味で、家々の軒に菖蒲を挿す、それを「葺く」というたのである。○早苗とる頃 苗をとる頃。田植の頃をいふ。早苗は稲の苗で、特に苗代から田へ移し植ゑる頃のものをいふ詞。○水鶏のたゞく 水鶏の聲は、丁度人が戸をとん／＼と叩く時の音に似てゐる。それで、鳴くといはず「たゞく」といひ習はしてゐる。○心細からぬかは 心細くならうや、實に心細い。「かは」は反語。しみ／＼心細さの情調を感ずるといふのである。○あやしき家 賤しく見すほらしい家。○蚊遣火ふすぶるも 蚊いぶしがくすぶつてゐるのも。○六月祓 「なごしのはらへ」ともいふ。陰曆六月三十日即ち夏の最終の日に行ふ大祓の神事。○またをかし また面白い、これがまた面白い。宮中の六月祓は特に嚴かな神事であつたが、同時に、國々の鎮守の社でもそれ／＼神々しい儀式が取り行はれた、「をかし」といふ言葉は、寧ろその鎮守の社などの、素朴な神事に對する感じを端的に表したものであらう。

七夕祭るこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になるほど、雁なきて來るころ、萩の下葉色づくほど、早稻田刈りほすなど、とり集めたることは、秋のみぞおほかる。また野分の朝こそをかきしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今更にいはいにもあらず。おほしき事はぬは、腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

【通解】七月七日の夕、棚機のお祭をするのは、實にどうも優雅なものだ。段々夜寒になる時分、雁がないて来る頃、萩の下葉が色づいて来る時分、早稲田の稻を刈り取つてほすなど、何も彼も一つ集つて身にしむ趣は、萩が殊に多い。又あらしの翌朝は實に面白いものだ。こんな様にいひつゞけて見ると、皆源氏物語や枕草子に言ひふるされて了つた事であるが、同じ事をまた事新しく言ふまいといふ譯でもない。胸にたまつてゐる事を言はないのは、腹のふくれるやうな氣のするものだから、筆にまかせて、何でも構はず、とりとめなく書きすさぶのであつて、固より破つて棄てて了ふべきものだから、何を書いた所で人の見よう筈もない。

【文旨】夏の描寫と同筆法の漸層法で、やう／＼夜寒になるほど、雁なきて来るころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈りほすなど」と遣つてゐる。七月から八月へ、八月から九月へと、季節感の顯著なものを段々と擧げたのである。この「ほど」「ころ」「ほど」「など」の趣をいへば、やう／＼夜寒になる頃にはそろ／＼雁もないて来る、それから萩の下葉も色づいて来る、其のうちには又早稲田を刈り乾すやうにもなる、凡てが一つに取集まつた趣は萩が殊に多い」といふやうに言ふ所を、殊更に連続的でなく、漸層的に敘して行つて、「夜寒になる」「雁なきて来る」「萩の下葉色づく」「早稲田刈りほす」といふ秋の景物を中心にして、その中に幾多の餘情を含めて讀者の聯想に訴へようとした修辭法で、その點は全く夏の描寫の筆法と一致してゐる。而しその中心景物は概ね古人の著眼を襲踏したもので、どうも夏程の生彩を放つてゐない。作者もその點に氣がされたものと見えて、長々と辯解の辭を列べてゐる。強ひて言へば、敘景の中に斯うした自己辯明を加へた事によつて、全一段として文の趣に變化の妙を與へたといへなくもなからうが、而しそれは寧ろ最眞目に過ぎた見方だといへよう。

【語義】○七夕。七月七日の宵に、牽牛、織女の二星が、一年に只一度、天の河を渡つて相逢ふ、その夕には鳥鵲が天の河に来て、翼をのべて橋にして織女を渡すといふやうな事が、支那の古い書に見えてゐる、それに基いてこの二星の戀を祝福するといふ、支那の風習を日本に移して、牽牛を彦星、織女を棚機津女と改めて年中行事の一

つとして盛に行つたものである。その棚機津女の名から、「七夕」の字をも「たなばた」と讀み習はしてゐる。又特に女が之を祭つて技藝の上達を乞ふといふ所から、この七夕祭の事を一に「乞巧筵」とも稱してゐる。○なまめかし。優雅だ。七夕祭の時には門ごとに杉の木や竹などを立て、色々の紙をつけてそれに思ふ事を書きつける、又梶の葉に書くといふやうな習はしもあつた。その他色々の女らしい美しい供へ物もある。そしてその祭の目的は天上の二星の戀を祝福するにある。従つてこの祭は、どうしてもうら若い人の戀の思と最も多く結びつけられる。この意味に於て「なまめかし」は形容し得て實に妙である。○夜寒。秋の中頃、だん／＼と夜分には膚寒く覺える頃をいふ。○雁なきて来る頃。雁は春去つて秋や、寒くなる頃来る鳥である。○下葉色づく。下の方の葉から段々と黄いろく色づいて行く。○早稲田。早稲のつくつてある田。「わさだ」は「わせた」に同じ、熟語の時に限つて「わせ」が「わさ」と轉ずる。○刈りほす。稻を刈つてほす。○とり集めたる事は。何も彼も一つに集つた事は、種々様々な情趣が一つに集つた事は。○秋のみぞ多かる。秋が殊に多くある。「のみ」は強めの詞。○野分の朝。野分のあつた翌朝。「野分」は今の颱風、即ち秋の暴風のこと。その過ぎた後は野の草を吹き分けたやうになつてゐるからの稱。これは晩秋よりも二十十日頃に多いから、本文は季節の順序が違ふやうだが、一應季節順に景物を敘し、更に端を改めて野分を説いた趣と考へてよからう。○ことふりにたれど。言ひふるされて了つてゐるが、ふるくさい事になつてゐるが。○今更に。今又新に、今又事新しく。○おほしき事いぬは腹ふくる。いふまいと思ふ譯でもない。「いぬは」の「じ」は自分の否定意思をあらはす語と見るがよい。○おほしき事は胸中に鬱結してゐるといふ意の形容詞と考へる事を言はずにゐるのは腹がふくれることである意。「おほしき」は胸中に鬱結してゐるといふ意の形容詞と考へるべきだらう。「思はれる」「思はるべくある」の意の形容詞もあるが、それはこの用語例にはしつくりしないやうだ。「腹ふくる」は何か腹に滞つて氣持の悪いといふ意。大鏡の序に『おほしきこといぬは、げにぞ腹ふくる。心地しける。かゝればこそ昔の人は、ものいはまほしくなれば、穴を掘りては言ひ入れけめ』とあるのを取つて書い

たのだらう。○あぢきなきすさび。つまらぬ筆ずさみ、たわいもない心慰み。○かいやり棄つべきもの。ひき破つて棄てるべきもの。「かい」は「掻き」の音便で、動詞について、幾分その働きを強めていふ場合の接頭語。「やり」は「破り」である。○人の見るべきにもあらず。人が見よう筈もない。この草紙は、全く徒然の隨筆で、やがて破り棄てるべきものだから、何を書いた所で見られる筈はない、人に氣兼ねの必要はないから、思ふ事を何でも構はず書くのだといふのである。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止りて、霜いと白うおける朝。遣水より煙のたつこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、またあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒く澄める、二十日あまりの空こそ、心ほそきものなれ。御佛名荷前の使たつなどぞ、あはれにやむごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとり重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儂より四方拜につゞくこそおもしろけれ。

【通解】 さて冬枯の情景こそ、とんと秋に劣るまい。庭の小流れの水際の草に紅葉が散り止まつてゐて、霜の大層白くおりてゐる朝、その庭の小流れから煙の立つのは實に面白い。年がすつかり暮に迫つて、誰も彼も皆迎春の用意に忙しくそくさとしてゐる頃こそ、特にしみじみと感深いものがある。無興な物として見る人も無い師走の月の、如何にも寒々と澄んでゐる、二十日過ぎの空こそ、實に心細いものだ。御佛名の式だの荷前の勅使の立つのなど、情趣深くも又尊い事だ。いろいろの公事が頻々とあつて、それを春の御用意に取り重ねて、一どきに忙しく催し行

はれるさまは、實にどうもすばらしいものだ。追儂からすぐに四方拜へつゞくのが殊に面白い。

【文旨】 自己辯解から又筆端を改めて情景描寫をやつてゐる。「汀の草に」云々の描寫も面白いし、殊に「年の暮れはてて」から以下の觀察が活きてゐる。中にも「公事どもしげく」云々の一句は實によく年末の氣分が出てゐる。朝廷の事は一寸縁遠くて想像しにくいのが、假にこれをそのまま吾々民間の年末に引き當てて考へて見たら、「春のいそぎにとり重ねて」の一句の味がしみじみ味はれよう。

【語義】 ○冬枯 冬、草木の葉の枯れ落ちて寂しくなつてゐるさまをいふ語。○をさく とんと、殆ど。「とんと」といふ口語の趣と最もよく合致してゐる。○汀 水際。下文へ響いて、遣水の水際をいうたものと考へられる。○紅葉の云々 紅葉した木の葉が散つてそこに止つてゐて、その邊に霜の白くおりた朝の意。○遣水 細い流を庭に堰き入れて流したものを。○煙の立つ 空氣が冷いので、水蒸氣が白く煙のやうに立ちのぼるをいふ。○年の暮れはてて 年がもうすつかり暮れて、ぐつと年末におしませまつて。○急ぎあへる お互にせかしくしてゐる、皆忙はしさうに色々迎春の用意などを遣つてゐる。○またなく 他に類なく、此の上なく。○すさまじき物 無興な物。「すさまじ」は、時違ひ、場所違ひ等、凡て不似合で興のないのをいふ語。月は秋がよい、春のおぼろ夜がよい、夏の涼しげなのも悪くない、而し冬は月を見るにふさはしい時節ではない、冬の月は眺めるべく餘りに時節違ひで興がないといふのであらう。枕草子の一本に「すさまじきもの、師走の月、老女の化粧」とある。○寒く、寒さうに。○御佛名 十二月十九日から三日間（もとは十二月十五日から十七日まで）宮中で行はれた佛事。佛名會というて、三世の諸佛の名號を稱念して、六根の罪障を滅するといふ意味の法會である。○荷前の使 朝廷で、十二月の吉日を選んで、諸國から奉る貢の荷の初穂を、十陵八墓に奉られるその使者。その十陵八墓とは、近陵（天皇より等親の親近な山陵）近墓（天皇より等親の親近な者の墓）をいふので、時代に依つて多少違つてゐる。○あはれにやむごとなき あはれにも又尊い。「にはその上に更にの意。○公事どもしげく 朝廷の行事が色々澤山に

あつて。○春のいそぎ。春の用意、春の仕度。いそいで支度をする意から、凡て用意、仕度、準備の意に「いそぎ」といふ。○とり重ねて。暮には暮自らの様々の行事がある、その上に、様々な初春の準備もしなければならぬ、即ち、年末の行事を春の用意の上に取り重ねて催し行ふのである。○いみじきや。すばらしいものだ。やはは味歎の詞。○追儺。十二月晦日の夜に、宮中で年中の疫鬼を拂ふ爲に行はれる式。民間に所謂鬼やらひ。今も民間に行はれてゐる節分の豆まき——鬼の豆はこの名残であらう。○四方拜。正月元日の早朝、天子自ら天地四方を拜し、年災を拂ひ、五穀の豊穰、寶祚の長久を祈り給ふ儀式。「追儺」が晦日の夜で、「四方拜」が元日の早朝だから、すうーツと「つゞく」事になるのである。

晦日の夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たゞき走りありきて、何事に
 かあらむ、ことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、暁がたより、さすがに音なくなりぬる
 こそ、年のなごりも心ぼそけれ。亡き人のくる夜とて魂まつるわざは、このごろ都にはなきを、
 東の方にはなほすることにてありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に
 變りたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やか
 にうれしげなるこそ、またあはれなれ。

【通解】 晦日の夜、ひどく暗い中に、人々が手に手に松をともし、夜中過ぎまで、人の門を叩いて走つてあるき、何事であるのか、仰山たらしくわめき立てて、足も地につかぬ程にあたふたと走り廻つてゐるのが、夜明方からそれでもさすがにしんとして静かになつて了ふ、その静けさにこそ、暮れ行く年の名残も亦、如何にも心細

くしんみりと感じられる。死んだ人の来る夜だといつて魂祭りをすることは、此の頃では都にはないのに、鎌倉の方では今も猶やる事であつたのは、實に感慨深い事であつた。斯うしていよいよ明けて行く元日の空の様子は、別段昨日に變つたとは見えないが、何だか打つて變つて物珍らしく清新なやうな心持がする。往來の様子は、すうーツと松を立て續けて、如何にも花やかに嬉しさうであるが、それがまた實にしんみんと感深いものがある。

【文旨】 晦日の一夜に描寫の委曲を盡し、一轉して花々しく元旦の様を敘して全一段を結んでゐる。大晦日の眞暗い中に——陰曆での晦日はやみに極つてゐる——たい松をともした人々が、あちらこちら走りあるいて、何だかしらぬがわめき立ててかけずり廻る。それを超然と眺めてゐた筆者の面影が眼前にちらつくやうな筆致である。實に活々とした實景描寫、實感描寫である。殊に「暁がたよりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ」というた一句は如何にもよく筆者の主觀を描寫した名文句である。さすがに暁方にはさうした人々のさわぎも静まつて了つて、しんとして了ふ、その静けさの内には暮れて行く。世の俗塵に没頭してゐる人々に取つては、掛取りに忙しい、借金取が恐ろしい、暮の越せる越せぬの喜び苦しみ、端的な年の名残りの意味である。所が、さうした塵世の外に超然として、靜かに人生を内觀し、靜かに人世の趣を味ふ者に取つては、さうした世人のさわぎの静まつて了つた後の静けさ、そこにこそしんみんと暮れ行く年の名残が感得される筈である。兼好が「心細し」といふのは、多くの場合普通の人の「心細し」といふのは少し違つて、「心細さの興趣」である。しんみりとして妙に心細く思ふ、そこに兼好は異常の興趣を感じたと見るべきである。十一段の「心細く住みなしたる庵」などもその適例、前節の「水鶏のたゞくなど心細からぬかは」もそれである。「暁がたよりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ」を原文の表現のまま味へばどうしても上述する通りである。即ち

「年のなごりも
 心細けれ」

といふ関係である。しんと静かになつた、その静けさにこそ、年の最後も言ひしれぬ心細さの情味があるのであつて、若し宵のさうくしさのまゝに年が逝つて了ふとすれば、筆者は年の名残に些の心細さも感じないに違ひないのである。従つてこの文句に「この静けさの中にこそ年は暮れて行くのだと思ふと、そこにその去り行く年の残り惜しさが感じられて誠に心細い」といふ風に思想を補つて解釋するのは、すなほに原文を味ふ所以ではないと思ふ。筆者は斯うしてしみじみと年末の情景を敘して、さて一轉して「かくて明けゆく空のけしき」と、如何にも生きかへつたやうに筆端を改めて、美しくさらさらと元旦のさまを敘して一段を結んでゐるのである。

【語義】 ○つごもり 月のみそか。こゝは大みそかである。「つごもり」は「月隠」の略で、主として月の末日の稱であるが、時にはほんやりと月の末の義に使ふ事もある。○いたう ひどく、甚しく。いたく「の音便。○松ども 松明どもを。どもは複数の接尾語で、あつちにもこつちにも松明をともして歩いてゐるといふ心持である。○ことごとしく 仰山に。○のしりりて 大聲にわめきたてて。○足を空にまどぶが 足も地につかぬ程に大いそぎでそこら中をまごくと走りまはるのが。がは體言に接して主語を爲す助詞、即ち「まどぶのが」である。「まどぶけれども」ではない。○さすがに さうはいつても、何というてもやはり。○なごり いや／＼の別れ。○亡き人のくる夜 死んだ人の魂が歸つて来る夜。もとは七月十四日と十二月晦日と年に二回魂祭をしたものだが、兼好の頃には既に七月一回だけになつてゐたのである。○あづま 東國の事であるが、この當時は特に鎌倉を指しているた例が多い。鎌倉に幕府があつて京と對立してゐたからである。○なほすることにてありしこそあはれなりしか 今尚ほする事であつたのがしみじみと心に感じた。「ありし」しか「共に過去「き」の變化である。思ふにこれは嘗て鎌倉方面へ行つた時見た事か、又は人から聞いた事を想起して、その當時の感じを新に喚び起して書いてゐるものであらう。○ひきかへ 打つて變つて、昨日とは丸つきり變つて了つて。○めづらしき 見た目の感じの新しいのをいふ。即ち珍らしいといふ方の心持。○大略 都の大通り。○松たてわたして 門松をつうツと立てつゝけて。

○花やかに。美しく、陽氣に。

第二十段

某とかやいひし世すて人の、「この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空のなごりのみぞ惜しき」といひしこそ、まことにさも覺えぬべけれ。

【通解】 何某とかいうた遁世者が、「この世に何等心を引かれる羈絆束縛も持つてゐない身に、只移り變つて行く自然の風物の名残だけが惜まれる」というたのは、成程如何にもさう感じさうな事である。

【文旨】 前段に四季の趣を繰述した餘情として書き添へたものだらう。この世に何の束縛もない世捨人の身にも、さすがに散る花を惜み、傾く月をかこつ思だけは禁じ難い、といふのである。「某」といふのは例の筆法で、自分の感想を人に託していつてゐるものと見てよからう。

【語義】 ○世捨人 世を捨てた人、遁世者、僧。○ほだし 羈絆、束縛、足手まとひ、心を引かれるもの。○もたらぬ 持つてゐない。「持つてゐない」の約。○空のなごり 季節の別れ。「空」は廣く自然界の風物現象をいふ。即ち雪月花四時折々の空の景色にあこがれて、それと別れるのがつらい、といふのである。○さも覺えぬべけれ さうも思はれよう、さう思ふのも尤もである。「ぬべし」は推測を強めていふ慣用形。

第二十一段

よろづの事は、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものはあらじ」と

ひしに、又ひとり、「露こそあはれなれ」と争ひしこそをかしけれ。折にふれば何かはあはれならざらむ。

【通解】 煩はしい世の中の凡ての事は、月を見ることによつて眞によく慰められるものだ。或人が「月くらゐ面白くものはあるまい」というた所が、又一人が「いや露が一番しみくとした趣が深い」と争つたのは實に面白い。月といはず、露といはず、總じて折にふれ、ば、何だつて皆しみくとした面白味の味はれぬものはないのだ。

【文旨】 前段から更に一步を進めて、自然の風物から感得するしみくとした心の感興を述べてゐる。「折にふれば何かはあはれならざらむ」の一句が、此の全一段の中心であつて、それは、何かの場合に當ると、どんなものでもしみくとした趣が味はれる、といふ意——例へば、嬉しさに満ちて自然の風物に接する時、悲しさに沈んで月花を眺める時、そこにその自然の風物を通して、それ／＼特異な感興が胸に傳つて来る、結局は花そのもの、月そのものよりも、それを見る人の純眞な主観が、花や月と感通した時に於て、我々は眞の「あはれ」を感得するといふのである。それが「折にふれば何かはあはれならざらむ」の一句に含まれてゐるほんとの内容と見てよからう。

【語義】 ○よろづの事 凡ての事、どんな事でも。悲喜哀樂其の他煩はしい世の中の一切の事をいふ。○月見るにこそ 月を見る事によつて。「に」は「によりて」。○慰むものなれ 慰められるものだ、心の鬱が晴れるものだ。○月ばかり 月くらゐ、月ほど。○争ひしこそをかしけれ 争つたのは實に面白い。前にそんな言葉争ひを聞いた事があつて、今それを思出しておもしろく如何にも風流な事に思ふといふのであらう。○何かはあはれならざらむ何があはれでなからう、凡て皆あはれだ。「かは」は反語。

月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわ

かずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲にとゞまることしばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も、「山澤にあそびて魚鳥を見れば心樂ぶ」といへり。人遠く水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心なくさむことはあらじ。

【通解】 月花はいふ迄もないが、あの風が又殊に人に何ともいへぬ感懐を與へるものやうだ。それから又岩に碎けて清く流れる水の情景は、いつといふ時の差別なしに、誠にいゝものである。「沅水、湘水の水は、日夜の分ちなく東へ」と流れ去つて行つて、深い憂愁に沈んでゐる者の爲に暫く止つてもくれない」と詠じた詩を見た事があつたが、實に感興の禁じ難いものがあつた。嵇康も「山や澤邊に遊んで、魚や鳥を見ると心が樂しむ」といふてゐる。人里遠く、水や草の清い所に逍遙してゐる位、心の慰むことはあるまい。

【文旨】 前節に「折にふれば何かはあはれならざらむ」というたのを受けて、「月花はさらなり」といひ、更に「風」を出し「水」を出して、最後に古人の詞を出して共鳴してゐる。短い一段として、割合に多くの材料を使ひながら、それが凡て「あはれ」といふ純感に統一されて、少しも雜駁になつてゐない。きびくとしたよい文である。

【語義】 ○さらなり いふも更なり、いふ迄もない、勿論のこと。○風のみこそ 風が殊に。「風だけがではない。○人に心はつくめれ 人に心をつけるやうだ。人の心に一種特別の感懐を與へるものだといふ意。○時をもわかず別段いつといふ時の差別なく、四時いつでも。○めでたけれ よい、結構だ。○沅湘日夜云々 三體詩にある戴叔倫の湘南即事、「盧橋花開楓葉衰、出門何處望京師、沅湘日夜東流去、不爲愁人住少時。」「沅・湘」は共に川の名、「愁人」は遠く京師を思つて憂愁に沈んでゐる人の意で、作者（戴叔倫）自身を指したのである。○いへる詩というてある詩、詠じてある詩。單純に「いふ詩」の意に見てもよからう。○見侍りしこそ 以前に見た事がありま

したが。○嵇康。晋代の人、所謂竹林の七賢の一人。○山澤。山や水のほとり。文選、嵇康與山濤絶交書に「遊山澤觀魚鳥心甚樂之」。○人遠く。人げ遠く、人里から遠く隔れた。○水草きよき所。水や草のきれいな所。俗塵を離れて、水も清く、草も濁りに染まず清くはえてゐる閑寂の地の意。「水草」を水中の草として連濁にミツグサと讀んではしつくりしない。○さまよひありきたる。さまよつて歩いてゐる、逍遙してゐる。

第二十二段

何事も、古き世のみぞ慕はしき。今様はむげに卑しくこそなり行くめれ。かの木の道のたくみの作れるうつくしきうつはものも、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

【通解】何事も、只古い世が慕はしい。當世は丸つきりもう野卑になつて行くやうである。あの指物師の作った見事な器物も、古代の細工振こそ實に面白く見える。

【文旨】例の尙古趣味から、何でも彼でも昔のはよい、今は卑しいといふのである。

【語義】○古き世のみぞ。只古い世が「のみぞ」は強めの詞。○今様。當世、當節。「古き世」に對して今の世をいふ。○むげに。只もう一途に、むやみに。○かの。あの。作者の意中に、ぼんやり指してゐる迄である。○木の道のたくみ。木工、指物師の類をいふ。「たくみ」は大工の稱で、それに「木の道の」と附けたのは、大工よりも精巧な木工、即ち指物師の類をいうたものと考へられる。○うつくしき。見事な、立派な。こゝは「きれいな」といふよりも寧ろ「いつくし」と同じく莊麗とか莊嚴とかいふ方の感じのやうだ。蓋し「うるはし」と同用した用語例であらう。○うつはもの。器、器物。○姿。様子即ち細工振り。

文のことばなどぞ、昔の反故どもはいみじき。たゞいふ詞も、口惜しうこそなりもて行くなれ。いにしへは、「車もたげよ」火かゝげよ」とこそいひしを、今様の人は、「もてあげよ」かきあげよ」といふ。主殿寮の「人数たて」といふべきを、「たちあかししろくせよ」といひ、最勝講の御聽聞所なるをば、「御講の廬」とこそいふべきを、「講廬」といふ、口をしとぞ、古き人の仰せられし。

【通解】手紙の文言など、昔の反故は何れもすばらしいものだ。ふだん口にいふ詞も、段々となさけなくなつて行くのである。古は「車もたげよ」「火かゝげよ」というたものなのに、當世の人は、「もてあげよ」「かきあげよ」といふ。又主殿寮の「人数たて」といふべきのを「たちあかししろくせよ」といひ、最勝講の御聽聞所である所のことばをば、「御講の廬」といふべきであるのに、それを「講廬」といふ、なさけない事だと、古老の人が申されたのであつた。

【文旨】前節を受けて、言葉の段々と碎けて行くのを歎いてゐるのだ。原文にいふ所は、我々には頗る耳遠い事で殆ど何の情味も感じられぬが、然し言葉遣が段々に崩れて行くといふ事實についてはやはり考ふべき點が無くない。勿論こゝにいふのは筆者の尙古趣味で、吾々は一概に古い言葉遣を固執すべきではないが、さればというてむやみと新しい言葉を使ひ、一時の流行語を喜ぶ如きは、決して國語を尊重する所以ではないのである。なほ「いにしへは」から「口をし」までの全體を「古き人の仰せられし」言葉と見てよい。

【語義】○文。手紙、消息文。廣く文章の事にもいふ語だが、こゝは「たゞいふ詞」(日常の會話語)の對照上、

手紙と見るのが順當である。○反故。ほご、書き散らした古い紙。特に「反故」というたのは、反故に限つてよいといふのでなく、反故でも立派だとの心持を以て書いたものだらう。○ども。複數の接尾語。こゝでは「何れも」と譯して置いた。○たいいふ詞。ふだんいふ詞、字に書かずに直接口でいふ詞。○口惜しう。なさげなく。○なりもて行く。段々なつて行く。「もて」は深い意味はないが、強ひて言へば口語の「段々」といふに當る。○車もたげよ。「車」は牛車、「もたげよ」は「持ちあげよ」の約。○火かゝげよ。火をかきあげよ、火をかきあげて明るくせよの意。○主殿寮。宮内省に屬し、宮中の供御、輿輦、殿庭洒掃、燈燭、庭燎等の事を掌つた役所の名。○人數たて。夜の行幸に松明をとり、節會に庭燎を焚くやうな場合に、その用意を命ずる言葉だらう。「人數たて」と濁つてはいけない。○たちあかし。たいまつのこと。立明の意で、たてあかしともいふ。○しろくせよ。あかるくせよの意。○最勝講。禁中で五月の吉日に、東大寺、興福寺、延暦寺、園城寺西ヶの大衆を召して最勝王經を講せしめ、御聽聞なされる法會。○御聽聞所云々。天皇の御聽聞なされる所。「なるをば」は「なる所をば」の略。○御講の廬。「廬」はいほり。即ち最勝講の論議をお聴きになる所の意。○講廬といふ。「御」の字を略していふのがいけないといふのである。

第二十三段

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかすめでたきものなれ。

【通解】何事も衰微してゐる末世とはいへども、やはり宮中の神々しい有様は、世俗に染まず實に結構なものである。

【文旨】宮中の凡ての事の神々しさ、情味の深さをいふのである。兼好の尙古趣味から、特に宮中の事をめでたく感じたのである。

【語義】○衰へたる末の世。尙古思想佛教思想から何でも末世はいけないとする。「衰へたる」は人情道義風俗生活何も彼も衰微してゐるの意。○九重。禁中。宮城の門が九重であるからの稱。○神さびたる。神々しく古雅で如何にも崇高に感じられるといふのである。○世づかす。世俗にしまないで、世俗を離れて。

露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし、あやしの所にもありぬべき小菰、小板敷、高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。

【通解】露臺、朝餉、何殿、何門などは、宮中に限るものだから、それはすばらしく聞えるのが當然であらう、が、随分下民の住家にもあるに相違ない筈の小菰、小板敷、高遣戸なども、宮中のものといふと、實に立派に聞える。

【文旨】宮中に限つてあるものが立派に聞えるのは當然だが、さうでなくて、どんな下々の家にもあるやうな物まで、それが宮中のものとなると非常に立派に聞える、といふのである。

【語義】○露臺。宮中にある屋根のないうた、舞の折などに使ふ所。○朝餉。清涼殿にあつて、天子の御朝食を召上る所。「朝餉の間」の略。○何殿何門。紫宸殿、清涼殿、朱雀門、應天門といふやうに、下に殿や門のつく言葉を概括していうた詞。○いみじとも聞ゆべし。すばらしいものだ、大したものだと聞えもしよう。これ等は宮中に限つたものだから、その言葉を一寸聞いただけでも立派だと思ふのは當然だの意。思想はこゝで完全に切れないで、反戻的に下文に響いてゐる。○あやしの所。賤しい所、下民の住家。○ありぬべき。ある筈の。「ある」を婉曲

にして「あるべき」とし、それを強めて「ありぬべき」とした言ひ廻し。○小部 ひとみの小さいもの。部は貴人の邸宅や神社佛閣などにある、上半部を格子にした戸で、日おひの用に供したもの。○小板敷 小さい板を並べた板の間。○高遣戸 せいの高い遣戸。遣戸は今日普通の戸障子などの如く、横に引いてあけたてする戸。

陣に「夜のまうけせよ」といふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、「かいともしとうよ」などいふ、まためでたし。上卿の陣にて事行へるさまはさらなり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこに眠り居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなり」とぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。

【通解】陣で「夜のまうけせよ」といふのは實にすてきた。天子様の御寢所の御あかしを召すのをば、「かいともしとうよ」などいふ、それが亦いかにもよい。上卿が陣の座で事を執り行ひ色々指圖をしてゐる有様は勿論のこと、諸官司の下役人どもの、得意然としてもなれて振舞つてゐるのも面白い。さうした連中が、公事などの執行はれる折、あんなにもひどく寒い夜が夜ぢゆう、そここゝに眠つてゐるのが實に面白い。内侍所の御鈴の音は、誠に結構で優雅なものだ」と、徳大寺太政大臣は仰せられたのであつた。

【文旨】宮中の言葉遣ひや役人たちの状態の一端を描寫したまでであるが、「さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこに眠り居たるこそをかしけれ」の一句の如き、如何にも面白い描寫振りである。

【語義】○陣に夜のまうけせよ。陣には「陣に於ては」の意で、下の「夜の御殿のをば」に對する句法。「陣」は役所といふ意の語で、禁裏で役人が出仕して役所に列坐する事をいふ。「夜のまうけせよ」は、夜の設け即ち燈火

の用意をせよとの意。○夜の御殿のをば 天皇の御寢所の燈火を用意せよといふ事をば、「のをば」は、「の燈をば」の略。「夜の御殿」は清涼殿にあつて天子の御寢所。○かいともしとうよ おあかりを早くつけよ。「かいともし」は「搔燈」の音便で、夜の御殿にとす油火の御燈の稱。「とうよ」は「疾くよ」の音便、とくせよの意。○上卿の上卿が、「上卿」は公事の時、大臣、大納言等の、陣で總奉行をする者の稱。即ち公事の長官。○さらなり いふ迄もない、勿論のこと。○諸司の下人 諸官省の下々の者。○したり顔に 如何にも得意らしい顔附をして、得意然として。○なれたるもをかし 宮中の事になれてゐるのも面白い、物馴れて振舞つてゐるのも面白い。○さばかりそれほど、あんなに。宮中の公事は特に冬の季節に行はれるものが多かつたので、筆者は意中にさうした冬の公事の場合を描いて書いてゐるものと考へられる。○よもすがら 終夜、夜が夜ぢゆう。○居たる「居てある」といふ意の現在完了形で、口語の「て居る」と一致する。○内侍所の御鈴の音 内侍所の御神樂の鈴の音。「内侍所」は宮中の温明殿にあつて、神鏡の安置してある所。「賢所」ともいふ。内侍所の御神樂は冬の夜に行はれる公事の中でも殊に神さびたものである。其の御神樂の折に鳴らす内侍所の御鈴の音が誠に優雅なものだと云はれた徳大寺太政大臣の言葉を聯想して、序手に書き添へたといふわけである。○優なる 優雅な。こせつかずに、如何にもゆつたりとして上品なさまにいふ語。○徳大寺の太政大臣 藤原公孝公だらうといふ。公孝公の聽したのは兼好の二十三位の時であつたやうだ。徹書記物語といふ本に、兼好は久我か徳大寺の諸大夫であつたと書いてある。果して兼好が徳大寺に事へてゐたとすれば、公孝公の斯うした言葉を直接耳にした事も想像されるわけである。

第二十四段

齋宮の野宮におはします有様こそ、やさしくおもしろき事のかぎりとは覺えしか。「經」「佛」など

「思みて、「なかご」染紙」などいふなるもをかし。

【通解】 齋宮が野の宮においてになる有様は、實に無上にやさしく面白いと思はれた事だ。「經」や「佛」などを忌んで、「中子」染紙」などいふ事になつてゐるのも面白い。

【文旨】 故實の上から、又單なる趣味の上から、齋宮の野宮の事を一寸書いたといふ迄である。

【語義】 ○齋宮。伊勢太神宮に奉仕する皇女の稱。天皇の御即位毎に、未婚の内親王若しくは女王を卜定して、奉仕の任に當らしめられたもので、天皇崩御又は讓位によつて職を解くのを例としてゐた。なほ同じく賀茂の明神に奉仕する内親王女王を齋院といふ。漢風にはどちらをも「齋王」と申してゐた。本文の「齋宮」が「齋王」となつてゐる本もある。○野宮。齋王卜定後、京の北郊有栖川邊に假宮を作り一年間齋戒してお過しになる、その假宮の稱。○やさし。優雅の意。○かぎり。絶頂、一番……あること。○覺えしか。しかは「き」の終止形で、「こそ」に對する結び。○なかご。佛の忌詞。○染紙。經の忌詞。經は黄紙、朱軸等、色に染めた紙に書くからの稱。凡て佛教上のことを忌んだのである。

すべて神の社こそ、棄てがたく、なまめかしき物なれや。ものふりたる森のけしきもたゞならぬに、玉垣しわたして、神に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮。

【通解】 凡て神社は、まことに棄て難い趣があつて、實に優雅なものである。どことなく時代のついた森のけしきも神々しく尋常でないのに、そこへ又ずうとと玉垣を取り廻はして、神前の神にゆふが掛けてあるなど、實に

すばらしい感じがするものだ。宮々の中でも殊に趣のあるのは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮等である。

【文旨】 神社のさまを如何にも面白く簡潔に描寫してゐる。そして「なまめかし」といふ詞が殊に面白く使はれてゐる。「殊にをかしきは」といつて社名を並べた筆致は、全く枕草子の模倣であるが、それが借物のやうにならぬ所に、やはり筆者の修辭の手腕を認むべきだらう。

【語義】 ○棄てがたく。感興を引いて見過し難い意。○なまめかし。優雅だ。やはり語の原義から来て、如何にも俗化せぬ上品さ奥ゆかしさがあるとの意でいうてゐるのである。○なれや。であるよ。や」は咏歎詞。○ものふりたる。どことなく時代のついた、何となく古色を帯びて神々しい。○けしき。氣色、氣分、けはひ。○たゞならぬに。尋常でないその上に、世の常でなく神々しいのに更に又。○玉垣。神社の周圍に周らした垣。玉は美稱。○しわたして。ずうとと作つてあつて。即ちぐるりと玉垣が周らしてあつての意。○木綿。古は栲の纖維から製した布の稱、後世は麻布で、それを裂いて神にかけたもの。○いみじからぬかは。すばらしく感じなからうや。か」は反語。○伊勢。伊勢の大神宮。○賀茂。京の上賀茂、下賀茂の兩社。○春日。奈良の春日神社。○平野。山城葛野郡平野神社。○住吉。攝津住吉の住吉神社。○三輪。大和三輪山の大神神社。○貴船。山城愛宕郡鞍馬村の貴船神社。「貴布禰」とも書く。○大原野。山城國乙訓郡大原野村にある。○松尾。山城國葛野郡松尾村にある。○梅宮。山城國葛野郡梅津村にある。

第二十五段

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂び悲びゆきかひて、花やかなりしあた

りも、人すまぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李物はねば、誰と共に昔をかたらむ。まして見ぬ古の、やんごとなかりけむ跡のみぞ、いとほかなき。

【通解】 飛鳥川の淵と瀬とが常に變つて定めないやうに、無常轉變して誠に定めない此の世の事であるから、時は移り、事は去り、悲喜交々行き違つて、花やかに榮えてゐた貴族の邸宅の邊も、いつか人の住まぬ野となり、そのまゝ残つてゐる住家は、住む人が變つて了つてゐる。桃や李は昔に變らず咲いてゐても、それは物をいはないのであるから、もとより共に昔を語るわけには行かず、さればといつて外にもあないのだから、誰と昔を語らうすべもない。直接自分の知つてゐる所ですらすらの通り、まして見た事もない遠い昔の、高貴を極めたといふ舊址といふものは、只もうはかなく無常の感に堪へない。

【文旨】 古歌や古詩を背景に引用して、此の世のはかなく、住居の頼むに足らぬことを趣味的に高調してゐるのである。「變らぬ住家は人あらたまりぬ」の一句、殊にその「ぬ」の語が、一種の軽い哀調を帯びて、非常によく利いてゐる。

【語義】 ○飛鳥川の淵瀬「常ならぬ」の序として慣用的に使はれる言葉。「飛鳥川」は大和高市郡にある川で、その川は流れが絶えず變つて、淵と瀬とが變轉常ならぬといふ事である。それで、古今集雜の部、讀人しらすの歌に『世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬となる』とある。「淵」は水の上で深い處、「瀬」は淺くて早く流れる處。○世にあれば「世であるから」。「し」は意味を強めるための助詞。○時移り事去り「日月が段々と押し移つて行き、凡ての事は段々と變轉して行き、事去り」は、世の中の凡ての事は段々變つて行く、と見てよからう。○樂び悲びゆきかひて「樂みと悲みとが互に行きかはつて」。「び」は「み」に通ずる。「ゆきかふ」は行き違ふ、行きかはりになる意。即ち、楽しんでゐる内に悲しむべき事が起つて來る、得意になつて楽しんでゐたも

のが悲境に陥つて悲しむ事になるといふ思想。○花やかなりしあたり「華麗な邸宅があつて立派に榮えてゐた所」。○野ら「野」は接尾語。○變らぬ住家「昔のまゝで變らずに建つてゐる住家」。○人あらたまりぬ「住む人——其の家のあるじが變つて了つてゐる。この「ぬ」は強めの趣と現在完了とを兼ねた形。○桃李物はねば「桃や李は物をいはないから。その桃李は舊跡に残つて居て、今も變らず花を開く所の桃や李を指してゐるのだ。○誰と共に昔を語らむ「誰と共に昔を語らう、共に昔を語るべき人としては一人もない。○まして見ぬ古の「況や遠い昔の。自分が一生を通じて親しく見聞した所すら實に上述の如し、まして見ぬ古の」といふのである。○やんごとなかりけむ跡のみぞほかなき「高貴であつたといふ跡を見ると實に果敢なく只々もう無常の感に打たれる。やんごとなし」は尊い、高貴な「けむ」は過去の推測で、「やんごとなかりし」といふ所を婉曲に言ひ廻したのである。「のみ」は只々もうといふ強めの詞。

京極殿、法成寺など見るこそ、志とどまり、事變じにける様はあはれなれ。御堂殿の造り磨かせ給ひて、莊園おほく寄せられ、我が御族のみ、みかどの御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならむ世にも、かばかりあせ果てむとおぼしてむや。大門金堂など近くまでありしかど、正和のころ南門は焼けぬ。金堂は、その後たふれ伏したるまゝにて、取りたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとして残りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂などもいまだ侍るめり。これ亦いつまでかあらむ。かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろづに見ざらむ世まで思ひおきてむ

こそ、はかなかるべけれ。

【通解】京極殿や法成寺などを見ると、その願の志は徒に存して、事は變つて了つたさまが、しみん／＼あはれに思はれる。道長公が立派に御作り遊ばされて、寺領の莊園を澤山に寄進せられ、この造寺の功德によつて、我が御一族のみが、天子の御後見、天下の固め、即ち攝政關白として、前途永遠に立つべきものと御考へ置きなされた其の當時、いつどのやうな世にならうとも、斯うまで荒れ果てようとは、決して御思ひ遊ばされなかつた事であらう。大門や金堂はつい近頃まであつたが、正和の頃、南門は焼けて了つた。金堂は其の後倒れ伏したまゝで、再建をするといふ企もない。無量壽院だけが、盛んだつた昔の形として残つてゐる。そして一丈六尺の佛が九體、誠に尊く竝んでおいでになる。行成大納言の書いた額や、兼行の書いた屏が、今も變らず鮮かに見えてゐるのが、殊に感慨無量である。法華堂なども今だに御座いませう。しかし是とても亦いつまでであらう、やがて頽廢するにきまつてゐる。こゝは兎に角これだけでも残つてゐるのだが、これ程のものさへ残つてゐない所は、自然稀に礎だけ残つてゐるものもあるが、それがどういふものにあつた跡であるのやら、はつきりと知つてゐる人もない。斯んな譯だから、何事によらず、自分の死んだ後々の世の事まで考へて色々やつておくといふ事は、實にはかなくつまらぬ事であらう。

【文旨】前節を受けて、その最も顯著な一例として、その昔榮華を極めた道長の法成寺を引張り出して、詳細にその頽廢のさまを敘して、そして全段の結として、だから死後の事など考へて色々やつて置くのはつまらぬ事だと斷じたのである。

【語義】○京極殿。道長が入道する前に生まれた御殿。○法成寺。道長が入道後生まれた寺。○志。こゝに「事變じ」にける。願志徒らに存して事は變つて了つた。立派な寺などを建てて、我が子孫の末永く榮えるやうにと願はれ

た其の志は徒に世に留まつてゐて、それに伴つた事業の方は其の面影もないとの意。○あはれなれ。しみん／＼あはれだ、誠に痛はしい、感慨の禁じ難いものがある。○御堂殿。道長。出家して阿彌陀堂を建て、そこに居たので、世に「御堂關白」と呼んだ。此の堂は一に無量壽院といふ。後に七堂伽藍を増建して法成寺といつたのである。○造り。磨かせ給ひて。きら／＼と立派にお作りになつて。○莊園。おほく寄せられ。寺領として田地を澤山に寄進せられ。「莊園」は「しうやあん」とも「さうあん」ともいふ。元、朝廷から皇子諸臣に賜はつた土地の稱。後には自分で開墾した私有地をもうてゐる。こゝは寺領地の義。○御族。御一族。藤原氏の一族をいふ。○みかどの御うしろみ。天子の御後見。○世のかため。天下の固め、世の守護者。攝政關白として天下の政治を主宰するのをいふ。○行末。までと。行く末長くさうして立つて行くべきものと。○おほしおきし時。御考へ置きなされた其の當時、心の中にきちんときめて置かれたその當時。○いかならむ世にも。いつどんな世にならうとも。○かばかり。かほど、これ程迄に。○あせ果てむ。衰へて了はう。あす(下二段)は、色がさめる、淺くなる、といふ意で、こゝはそれから轉じて衰へ荒れはてる意としたのである。○おほしてむや。思つて居られたらうや、決して思はれてはゐなかつたらう。「てむ」は文法上の本義は未來完了であるが、茲は過去の推量として用ひたのである。「や」は反語。○大門。原惣門。○金堂。本堂。○正和の頃。花園天皇の御代の年號。○南門。大門をいふ。○たふれ伏したるまゝ云々。原文を文字通りに解釋すると、地面にたふれてゐるまゝで、それを起しもしない、といふ事になる。而し事實は、一旦つぶれてそれきりもう再建もしない、といふ事かもしれない。○無量壽院。阿彌陀堂。無量壽は阿彌陀の譯語。○そのかたとて。宏壯を極めた法成寺の形として。○丈六の佛。高さ一丈六尺の佛。こゝは無量壽院に安置してゐる九體の阿彌陀佛の像の高さが何れも丈六だといふ意。○尊くて。尊くして、又は、尊く拜まれて、といふ程の心持で「て」の字を使つたのだらう。○行成大納言。權大納言藤原行成。書の名人で、小野道風、藤原佐理と相並んで三蹟と稱せられてゐる。○額。無量壽院と書いた額。○兼行。大和守藤原兼行。やはり書の名人。○扉。阿彌陀

堂の扉。○あざやかに。鮮明に。○法華堂。法華三昧（一心に法華經を讀誦修行すること）を行ふ堂。○かばかりの名残だになき所。これ位のものでさへも残つてゐない所。法成寺などは、それでもまだ斯うして幾らか昔を偲ぶべき名残が残つてゐるが、これだけの名残すら残つてゐない所は、といふのである。○おのづから。自然の意だが、その中に「稀に」の意を含んだ用語例も尠くない。こゝもその一例。○礎ばかり。土臺石だけ。○さだかに。しつかりと、確かに。○見ざらむ世。自分の見なからう世、死後の世。○思ひおきてむこそ。思つて色々と取圖らつておかうのは。「おきてむ」は掟てむの意で、定める、圖る、指圖する等の義。

第二十六段

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に馴れにし年月をおもへば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になり行くならひこそ、亡き人の別れよりもまさりて悲しきものなれ。されば、白き絲の染まむ事をかなしび、道の巷のわかれむ事を歎く人もありけむかし。堀川院の百首の歌の中に、

昔見し妹が垣根はあれにけり、茅花まじりのすみれのみして。さびしきけしき、さること侍りけむ。

【通解】 風が吹けば花は散る、その花よりも更にはかなくて、風も待たないで色が褪めて了ふ人の心の花——さうしたはかない人の心に深く馴れ親んだ其の昔の年月を考へて見ると、感深く身にしみて聞いた言葉は、今も一つと

して忘れはしないもの、さてその人は自分と全く没交渉な別の世界の人になつて行く、さうした世の習はしこそ、死別にも増して悲しいものである。されば、白き絲のやがて色々の色に染まるべき事を悲み、道の巷の分れ行く事を歎いた人もあつた事だらう。堀川院の百首の歌の中に、

昔見し……昔馴染みを重ねた人の家の所をふと通り掛つて見れば、丸で見違へる程に垣根もすつかり荒れ果てて了つたなア、只つばなにまじつて淋しくすみれの花が咲いてゐるだけでサ。——さてはあの人ももうこの家には住んでゐなからう、今はどこにどうしてゐる事やら。

といふのがある。暮春廢屋の寂しい光景、なるほどそんな事實もありましたらう。

【文旨】 別れ／＼になつて、只思出にのみ生きる戀、さうした戀の哀調を如何にも面白く描寫してゐる。「風も吹きあへずうつろふ人の心の花」——美しい、そしてはかない、戀する人の心を寫して寸分のすきもない。古歌を巧みに活かした、實にいゝ句だ。「あはれと聞きし」と、感傷的に其の昔の戀に低徊して、さて「我が世の外になり行く」——全く別々の世界を歩む人になつて了ふ、それは「亡き人の別れよりもまさりて悲し」いものだと結んでゐる。次に練絲岐路といふ有名な支那の故事を引いた、これも、その本が同じでありながら末は別々になる其の悲しさ、といふ原義をしつくり活かして使つてゐるが、少し小理窟めいたやうにも響く。而し、更に文末に「昔見し」といふ、昔の歌には珍らしいほどすなほな情調本位の歌を引いて、而もごく軽く「さびしきけしき、さること侍りけむ」と結んだために、全體として如何にもさらりとした、些の厭味もない文になつてゐる。うまい文だ。そして單に男女の間ばかりでなく、人生そのものに對する深い感傷さへも自然と感ぜられるやうな筆致である。

【語義】 ○風も吹きあへず。風も吹きおほせず、風も吹くか吹かぬ内に。更に進めていへば、風の吹くのも待たずである。「あへず」は、しおほせず、果てずの意。○うつろふ人の心の花。褪めて了ふ人の心の花。「うつろふ」は、花については、色があせる、又は散るの義にいふ語。「心の花」は、はかなく變りやすい心といふのが譬喩の表

面であるが、こゝでは、それに戀人の花のやうな美しい心といふ氣分も含ませて、戀人の美しい而しながらはかなくたよらない心、といふやうな心持で言うたものと思ふ。以上の二句は、古今集、紀貫之『櫻花とく散りぬともおもほえず、人の心ぞ風も吹きあへぬ』同、小野小町『色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける』といふ二つの歌から取つたのだ。○馴れにし。馴れ親んだ。にしといふ過去完了の助動詞がよく利いてゐる。○あはれと聞きし言の葉ごとに。いかにも深い情の籠つたやうにしみるゝと感深く聞いた戀人の言葉の凡て。○忘れぬものから。忘れはせぬものの、忘れないけれども。換言すれば、一言一句今もよく覚えてゐるが、である。○ものから。もの、けれども、然し、といふ反戻の語。○我が世の外にたり行く。自分の世の中の外のものになつて行く、自分と没交渉になつて行く、路傍の人になつて行く。○ならひこそ。習はしこそ。○亡き人の別。死んだ人の別、死別。○白き絲云々。淮南子に『墨子見練絲而泣之、爲其可以黃可以黒とあるのをいふ。○道の巷云々。ちまた』は道股の義で、道の分れる所。淮南子に『楊子見塗路而哭之、爲其可以南可以北』とあるのをいふ。二句の本義は、その本同じくして末の異なるを悲しむといふ事で、漢文の方では、専ら人の心の善にも悪にも染み易い事の喩に使ふのであるが、こゝでは、深く相親しんで同じ道を歩いてゐたものが、遂には別れ別れになつて了ふといふ譬喩として見たら文意にしつくり合つた引きことにならう。○堀川院の百首。堀川院の康和年中に行はれた歌合はせて、權大納言藤原公實の勸進の歌集。こゝに引いた歌は、その公實の詠である。○昔見し昔なじみを重ねた。見る」といふ語は、平安朝このかた、男女が深く親しい仲になるといふ意味に使はれてゐる。○妹。男から女を親しんで呼ぶ語。従つて妻の義にもいひ、戀人の義にもいふ。こゝは戀人。○茅花まじりのすみれのみして。つばなにまじつてすみれが咲いてゐるといふだけで。○さること侍りけむ。そのやうな事もありましたらう。即ち、なるほどこれは實感實景で、拵へ事ではなからうといふのである。

第二十七段

御國讓の節會おこなはれて、劍、璽、内侍所わたし奉らるゝほどこそ、かぎりなう心ぼそけれ。
 新院のおりぬさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。
 殿もりのとものみやつこよそにして、はらはぬ庭に花ぞちりしく。
 今の世のとしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞ寂しげなる。かゝるをりにぞ人の心もあらはれぬべき。

【通解】 御讓位の節會が行はれて、劍璽や御鏡を新帝の方へ渡御おさせ申上げる其の程の事は、實に此の上なく心細い事である。新院が御位を御退き遊ばされた其の春、およみになつたとか承りました、その御製
 殿もりの……主殿寮の下司までが、皆天皇の方へばかり行き、こちらは外にして、掃き清めもせぬ庭に、花が一面に散つてゐる事だなア。
 新帝御代始めの御儀式で兎角御用の多いのに紛れて、上皇の御所へは参る人もゐない事か、如何にも物寂しく御製の上に拜せられる、斯ういふ折にはどうしても人の心がすつかりあらはれるに違ひない。

【文旨】 兼好の當時は、所謂兩統迭立の行はれてゐた時で、御心ならぬ讓位が執り行はれたのである。そして官人は皆新しい天子様の方へばかり赴いて、御位を下られた方や、御位に縁のない皇族方は、實に寂しくみじめな境涯にあらせられたものである。その邊の事は増鏡などにもよく見えてゐる。兼好はその世態人情を慨して、而も諷諭の筆で、それをふうわりと描寫してゐるのである。かゝる折にぞ人の心もあらはれぬべきの一句が、力つよく、

而も穩かにその感慨の情を示してゐる。

【語義】○御國讓の節會 御讓位の儀式、天皇が御位をお譲りになる際の儀式。「節會」は朝廷で群臣に宴を賜はる御儀式をいふ。○劍璽内侍所 三種の神器。「璽」は八坂瓊曲玉。「内侍所」はもと温明殿の別名、神鏡を奉齋して、女官の内侍が此の殿に奉侍する所からさういふ。それから轉じて神鏡を申すのである。○渡し奉らるゝほど 御渡し申すそのほど。劍璽渡御の儀式のあるのをいふ。「渡し」は手渡しの意でなく、神輿の御渡りといふ場合の渡りを他動詞にしたものと見るがよい。三種の神器の中、劍璽は玉體の御守護として清凉殿内の夜の御殿に安置し、行幸には必ず御同道、讓位に際しては新帝の御方に渡御あらせられる、所謂劍璽渡御である。が、御鏡は常に温明殿に奉安し、御讓位の際も渡御の儀はなく、新帝より踐祚を御報告申す定めであるが、鎌倉時代兩統迭立により、御代毎に皇居が違ふために、自然内侍所も渡御あらせられたのである。○新院 新に上皇におなり遊ばされたお方、こゝは花園上皇である。「新院」といふのは前からの上皇を順次本院、中院など申すに對していふ語。○おりみさせ給ひての春 御位をおゆづりになつた其の第一の春。「させ」は敬相。○とのもりのとものみやつこ 主殿寮の下部。「とものみやつこ」は「伴の御奴」で、主殿寮の下部の、禁庭の掃除などを司る者の稱。伴といふのは、もと伴氏の者が此の役に就く定めであつたからの稱。○よそにして 外にして。こちらへは寄りつきませずの意。○はらはぬ掃除しない。○花ぞちりしく 花が一面に散る。○今の世のことしげき 當代の方の御用多さ。「今の世」はこゝでは新帝の御代の意。「今の世のことしげき」と切らずに、「今の世のことしげき」として「ことしげき」(多用、多忙)を一つの成語と見るがよい。御代始めの御儀式など色々執行はれて忙しいのをいふ。○院 上皇の御所。○寂しげなる 寂しさうである。御製の玉に如何にも寂しげな趣がまざくと伺はれるといふ意。○かゝる折 かういふやうな際。○人の心もあらはれぬべき ほんとに人の心があらはれるべき事だ。ふだんはさうでもないが、斯ういふ時には功利的な人間の本心が露骨に現はれるに違ひないといふのである。

第二十八段

諒闇の年ばかり、あはれなる事はあらし。倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、蘆の御簾をかけて、布の帽額あらくしく、御調度どもおろそかに、みな人の装束、太刀、平緒まで、ことやうなるぞ、ゆゝしき。

【通解】 天子様が喪にこもつて御いでのなる年ほど、しみじみと感ぜられる事はあるまい。喪中の假御所の有様など、板敷を低く下げ、蘆の御簾をかけて、それに掛けた布の帽額も粗末で、様々の御道具類もごく御疎略であり、奉仕する人々の装束、太刀、平緒に至る迄、いづれも常に變つて異様の装であるのが、實にどうも大した事だ。

【文旨】 前段から更に進めて、天子喪中の哀調を寫したのである。

【語義】 ○諒闇 天子が父母の喪に籠られる間、一ケ年の期間をいふ。○倚廬 諒闇の御忌の間の假御所。○板敷 ゆか板。○蘆の御簾 普通は竹を細く裂いたもので簾を作るのであるが、それを特に蘆で作るのである。○布の帽額 「帽額」は御簾の上の方に横長に引く幕のやうな飾りの布、それは常には錦や金欄で作るのだが、諒闇中は鈍色の細布で作る、之を「布の帽額」といふ。○あらくしく 粗末で。○おろそかに 疎略で。○みな人 皆の人。その事に關する凡ての人といふのが原義で、こゝで言へば朝廷奉仕の人々は凡ての意。○装束 服装。これも諒闇の時は鈍色である。○太刀 黒漆作り銀金具といふ例になつてゐた。○平緒 束帯の時、腰から袴の上に垂れるもの。これは常には花鳥などの模様があるが、諒闇中は無文鈍色である。○ことやう 異様、常と有様の違つてゐること。○ゆゝしき 常と變つて思はず目を見張るやうだといふ感じを斯く表現したものと考へられる。この語の

第一義は「不吉だ、忌はしい」といふ意で、それがこゝによく當るやうにも考へられるか、その用語例は割合に古く、それに本書中の他の用例が凡てそのすばらしさを嘆賞する趣だから、こゝも紋上のやうに味解して置くがよからう。

第二十九段

静かにおもへば、よろづ過ぎにしかたの戀しさのみぞ、せむ方なき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたため、残しおかじとおもふ反故などやりすつる中に、なき人の、手ならひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくてかはらず久しき、いとかなし。

【通解】 静かに考へて見ると、何事によらず過ぎし昔の戀しさばかりは、如何とも止め難いものだ。人が寢しまつて後、長い夜の慰みに、興に乗じて、何といふ事もない道具を、それからそれへと取りかたづけ、残して置くまいと思ふ反故などを破り棄てる中に、今は亡き人の、生前何か書き散らしたり、繪などを書き興じたものを見つけたのは、たゞもうそれを書いた其の當時の心持がせられる。今現に生きてゐる人の手紙でも、それが久しくなつて、どうした折、いつの年の事であつたらうかと思ふのは、しみ／＼感深いものである。年來手馴れた道具なども、無心にして久しい事何の變りもなく残つてゐるのが、誠に愛憐の情を起さしめる。

【文旨】 過去の戀しさを如何にも面白く書いてゐる。人が寢しづまつた後、手文庫の中などを段々片付けて行く、あゝこんなものがなどと破つたりする、興は湧いて夜のふけるのも知らぬ、其の中に「亡き人の手ならひ、繪かきすさびたる」を見出す、あゝさう／＼あの時こんな事を言ひ／＼書いたなどと、其の當時のさまが眼前に髣髴して来る、今生きてゐる人の手紙でも、久しい以前のはやはり懐舊のあはれが禁じ難い、と書いて行つて、文末に「手なれし具足なども、心もなくてかはらず久しき、いとかなし」と結んでゐる。これについて昔の註書に、「道具の主はうせゆけども、うつは物は心なくして跡にのこる也」としたのがある。それによると、「手なれし」は「故人が手馴れた」といふ事で、直前の句を隔てて「たゞその折の心地すれ」に續く文脈になる。なる程「このごろある人の文だに」の「だに」に即して「それ程だもの、まして故人のもの感慨深いのは當然だ」といふ氣持を働かせて考へれば、さう考へる事もあながち無理ではないが、然し原文の表現をすなほに味へば、それは聊か立入り過ぎるやうだ。手なれし具足なども」は上の「何となき具足とりしたため」に應じて、單に「年來使ひ馴れた道具」といふ風に、原文のあるがまゝに味解するのが自然だと思ふ。

【語義】 ○静かにおもへば。静かに考へると。静かな落著いた氣分と思ふといふのである。○よろづ過ぎにしかたの戀しさのみぞ。何事につけても過ぎ去つた昔の事の戀しさだけは。○せむ方なき。しやうがない、止めんとしても止められぬ。○人しづまりて後。人の寢静まつて了つた後。○長き夜のすさび。長き夜の心なぐさみ。すさびは「すさぶ」を名詞に言ひ据ゑた詞で、その働きがどこ迄も進んで行く状態である。こゝの趣を言へば、夜は長い、人は寢静まつて、心はすんで行く、そこで、一つこれでも片付けるかナと、その邊の文庫にでも手をつける、するとそれに興が湧いて夜のふけるも知らずに、どれといふ事なく、片付けて行くやうになる、さういふ氣分をいうたものである。○何となき具足。何といふ事ない道具。これ／＼と定めてでなく、その邊の道具をどれといふ事なしに、といふ意。○とりしたため。とり片付け。道具そのものを片付けるでなく、其の中のごた／＼したのを片

付けるのである。○残しおかじとおもふ反故。残しておくまいと思ふ反故。こんなものは残さぬ方がよいと思ふその反故、といふ意。○やり棄つる。破り棄てる。○手ならひ。字を書きちらし。必ずしも所謂習字に限つた言葉でなく、只歌などを書きちらすのにいふ詞。「手習ひ」字を習ふこと」と名詞にもいふが、こゝは動詞の例である。○繪かきすさびたる。興に乗つて繪を書いたのを。「すさびたる」は連體省略で、下に「を」の「を」が省かれてゐる。○たゞその折の心地すれ。たゞもうその當時の心持がする。それを見ると、只もうそれを書いた其の當時の心持になつて了ふ、といふ意。○このごろある人。今現に生きてゐる人。「ある人」は在る人。「或人」ではない。○文だに手紙でも「だに」の中に必ずしも故人と限らず今現に生きてゐる人でもといふ意が含まれてゐる。○あはれなるぞかし。感慨が深いものであるよ。○手馴れし。自分が久しく持馴れた。○心もなく。無心で。道具類には固より心はない、それをいうたもの。○かはらず久しき。長くかはらずにあるのが。○いとかなし。誠にいとほしい、可憐の思がする。

第三十段

人のなきあとはかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく、せばき所に、あまたあひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたしし。日數のはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日は、いと情なう、互にいふ事もなく、我かしこげに、物ひきしたゝめ、ちりぢりに行きあかれぬ。もとの住家にかへりてぞ、更に悲しきことは多かるべき。

【通解】 人の死んだあとくらゐいたましいものはない。七七四十九日の間、山里の寺などに移つて、不便な、狭

苦しい所に、多人數寄り合つてゐて、後々の追福の事を色々とし合つてゐる、それは如何にも氣ぜはしい。従つて日數のどん／＼と早くたつのが、たとへやうもない。慮とおしまひの日は、何の情味もなく、お互にろく／＼口もきかないで、われがちに、色々な物を片付けて、ちり／＼に行き分れて了ふ。さて元の自分の住居に歸つてからこそ、今更のやうに悲しい事が多いであらう。

【文旨】 「人のなきあとはかり悲しきはなし」といふ一句が、全段の總敘で、これだけで一節と見るもよい。この一段中には、色々人の死後の哀れさが敘してあるが、一番新しい、一番面白い、一番敏感な觀察の伺はれるのは、「中陰のほど」云々といふ此の一節の描寫である。兼好の當時は、人の死後四十九日間、近親の者などが山寺に籠つて法事をする習慣があつて、その間の情景を敘したのであるが、これを今日の葬儀のごたく／＼した状態に引きあてて考へてもよく分る。不便な狭い所に／＼と寄合つて、色々法事をやる、其の間は、色々とする事があつて、妙に氣が落着かぬ、従つてしんみりと一日を過すやうな事もなくて、月日は只そ／＼とたつて行く。それを「心あわたしし」といひ、「日數のはやく過ぐる程のものにも似ぬ」というたのは實にうまい。それから最終の日の様が實に眼前に浮ぶやうに活き／＼と描寫されてゐる。狭い不便な山寺の四十九日——それは随分つらいものに違ひない。で、いよ／＼今日で年明けとなると、そら！といふもので、皆荷物を引く／＼とて散り散りに引上げて了ふ。何の哀調も情味もない。それを「互にいふ事もなく、我かしこげに」とは實に寫し得て神に入つてゐる。そして又最後の一句「もとの住家にかへりてぞ更に悲しきことは多かるべき」が、實に畫龍點睛の妙あるものだ。本來から言へば、わざ／＼法事をしに山寺に引籠る、その間こそ故人を偲ぶ哀情も切であるべきだが、事實はさうでない、さうした「あわたししい」四十九日を過して「我かしこげに」引上げた人も、自分の家に歸つて落着いて見ると、今更ながら故人を偲ぶ涙が湧く、知らず識らず涙がこぼれる、眞の悲哀、眞の哀情はそこにある、それを斯うさらさらと述べて、巧に此の一節を結んだ所は、實に千古の名文だと思ふ。

【語義】 ○なきあ。とばかり。死んだ跡ほど。○悲しき。いたましい、なさない。文末の「悲しき」は自分の悲哀の主観であるが、文初の「悲しき」は人の死後のいたましき、なさない、みじめさをいうたものと考へられる。
 ○中陰。死後七七四十九日の間。佛説によれば、どんな人でも四十九日迄にはどこかへ生れかはる。それでよい佛果を得て極樂浄土に往けるやうに、特にその間追福を營むのである。○ほど。その間。○山里などにうつろひて山里などに移つて。法事を營む爲めに、近親の者が山寺に籠るのをいふ。「うつろひ」は移りの延音。○便あしく。便のわるい、不便な。○せばき。狭き。○あまたあひ居て。多人數一緒に居て。「あひ居て」は、集つて共に居て。○後のわざども。追福即ち死者の冥福を祈る法事を色々。○營みあへる。皆でし合ふ。連體假止で、單純に文法的にいへば下に「は」を補ふべきもの。○ものにも似ぬ。比すべきものがない、たとふるに物なし。○はての日最終の日。○いと情なう。誠に情味なく。お互にさつさと引上げる方に専らで何の情調もなくといふ意。○互にいふ事もなく。お互に物も言はずに、ろくに挨拶もせず。これもさつさと引上げる爲めに荷物などを片付ける時の状を如實に描寫したもの。○我かしこげに。銘々勝手々々に、われ勝ちに。○物ひきしたため。物を取片付け、寺へ持つて行つた衣類調度等を取りかたづけて。○行きあかれぬ。行き別れて了ふ。「あかる」(下二段)は、分れ離れるの意。○更に。新に、あらためて、今更のやうに。

「しかじかの事は、あなかしこ、あとのため忌むことぞ」などいへるこそ、かばかりの中なかに何かはと、人の心はなほうたておほゆれ。

【通解】 「これ／＼の事は、まあ御氣をつけた、後々の者の爲めに忌む事だ」などと言うてゐるのは、これほど果敢ない中に何の事だと、今更ながら人の心がなさないと思はれる。

【文旨】 この一文節をすぐ前に續けて、引上げの混雜の際に誰かと思はず不吉がましい事をいふと、長老立つ人などが縁起でもないと思つて立てをする事を敍したものとし、従つて「かばかりの中に」を「これ程の悲哀の折に」と解する説もあるが、私は前の文節とは獨立して、世の一般の習はしを述べたものと考へる。よく世の中で、人の死んだ時、やれ友引に葬式を出すとか、何とかかとか、忌み憚つて色々な事をいふ。そんな事をいうた所で、現在斯うして人が死んでゐる、誰も必ず死ぬにきまつてゐる、斯うした果敢ない世の中に何の事だと、人の心はつまらぬものと兼て承知してはゐながら、そんな言葉を聞くにつけて、つくづく人の心が厭になる、といふ風に取りたいと思ふのである。

【語義】 ○しかじかの事。これ／＼の事、斯く／＼の事。○あなかしこ。あゝ畏れつゝしむべしの意。挿入の言葉で、

しかじかの事は「あなかしこ」あとのため忌むことぞと呼應したものと考へてよい。○あとのため。後に残る者の爲め。○かばかりの中に。これほどの中に、これほど果敢ない中に。○何かはと。何だ下らぬ。何もそんな下らぬ事をいふには當らぬといふ意。○なほ。分つてはゐるがやはり。人の心はこんなものと兼て承知してゐながらもやはりなほの意。○うたておほゆれ。いやに思ふ、なさないと思はれる。

年月経ても、つゆ忘るゝにはあらねど、去る者は日々に疎うとしいへる事なれば、さはいへど、そのきはばかりは覺えぬにや、よしなし事こといひて、うちも笑ひぬ。

【通解】 年月がたつても、少しも忘れるのではないが、而し諺にも去る者は日々に疎うとしいうてある通りの次第

だから、さうはいふものゝ、その死んだ間際ほどは感じないのであらう、たわいもない事をいうて、つい笑つたりする様にもなる。

【文旨】 死んだ人に對する哀惜の情の段々と薄らいで行く様を、うまく描寫してゐる。

【語義】 ○つゆ 少しも、些かも。下に打消しの語を伴つて使はれる語。○去るものは日々に疎し。遠ざかつて行く者は日にまし疎々しくなる。文選の古詩に『去者日已疏、來者日已親』○さはいへど。さうは言つても、何といつても。前に「つゆ忘るゝにはあらねど」とあるのを受けて、忘れぬとはいうてもやはり、といふのである。○そのきはばかりは。その際ほどは。死んだその際程にはの意。○にや。だらう、だらうか。「にやあらむ」の略。○よしなし事。つまらぬ事、たわいもない事。じやうだん口をきくのをいふ。○うちも笑ひぬ。つい笑つたりもする、一寸笑つたりするやうにもなる。「うち」は軽い働きを表はす接頭語。「も」は感興の語。「ぬ」は婉曲にその働きを強めた趣の語で、強ひて言へば「やうにもなる」に當る。

骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。

【通解】 亡き骸は薄氣味悪く寂しい山の中に葬つて、命日といふやうな然るべき日にばかり詣でては見ると、程なく石塔に苔がはえ、落葉で埋つて、夕の嵐や夜の月だけが、せめて訪ねて來るよるべだといふ有様である。

【文旨】 死んだ人が段々と忘れられて行く過程を敘して、墳墓の荒れ古びて行くさまを面白く述べてゐる。

【語義】 ○骸。亡き骸、死骸。○けうとき。氣味の悪い、さびしい。人里から離れてゐて人もめつたに來ぬやうな墓地をいふ。○をさめて。納めて、葬つて。○さるべき日。然るべき日、即ち命日などの日。○詣でつゝ。詣で

ては、詣で詣でして。○卒都婆。梵語 Stupa (スツーパー) で、卒塔婆とも書き、略して「塔」「塔婆」などいふ。もと佛舍利を安置する所の稱であるが、後には廣く死骸を埋めて其の上に標識を立てたもの、即ち今日普通に所謂塔婆又は石塔の稱である。○苔むし。苔がはえ。「むす」は生える意の動詞。○木の葉ふり埋みて。木の葉が落ちて一杯に其の邊を埋めて。○夕の嵐夜の月のみぞこととふよすがなりける。「よすが」は便り、手だての義で、轉じてよるべ、縁者の義にもいふ。即ち誰一人訪ね問ふ縁者もない、強ひて訪ね問ふよるべといへば夕の嵐夜の月位のものだといふのである。「夕の嵐」「夜の月」は、言葉を変化して相對せしめただけで、「晩方の風」「夜中の月」といふやうに限定した譯ではない。「こととふ」は物をいふ、物をいひかけるといふのが原義で、それから訪問する意にもなる。

思ひ出でてしのぶ人あらむほどこそあらめ、そも又ほどなくうせて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらむ人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪にくだかれ、ふるき墳は勦かれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき。

【通解】 思ひ出して偲ぶ人の世に在る間はまだしもであるが、その人も亦程なく死んで了つて、傳へ聞きに聞く位の末々の子孫たちになつては、感慨も何も持ちはせぬ。それで自然跡を弔ふことも絶えて了ふと、もういつの世の誰の墓やら名さへも分らず、それでも墓邊に生ずる年々の春の草ばかりは、物のあはれを解する人はしみじみ感深い思ひをして目を止めもしようが、しまひには墓畔にあつて嵐に吹かれて寂しい音を立ててゐた松も、千年の樹齡を待つ迄もなく摧かれて薪となり、古い墳は鋤きかへされて田となつて了ふ。斯くてその跡形さへも無くなつて

予ふのは實にいたましい事だ。

【文旨】 前節から更に進めて、墳墓も益々荒れはてて、誰の墓やら名も知れぬ無縁塚となり、遂には鋤きかへされて田圃になつて了ふといふ事を述べてゐる。この節は凡て白氏文集や文選古詩の文句を引用したもので、思想にも表現にも格別の獨創はないが、その文句をうまく活用して遺憾なく國文情調と調和させた所に、凡手の及ばぬうまさはあると思ふ。

【語義】 ○しのぶ 思ひ慕ふ、じつと心の中に思ひ慕ふ。○あらむ 在らう。あるを婉曲にいうたので、此の世にながらへ在るの意。○ほどこそあらめ 内はまだしも、内は兎も角も「ほどこそあらめど」と反戻的に下に續く句法。嚴密にいへば、下の「あはれと思ふ」を受けて、「ほどこそあはれと思ふわざもあらめど」となるのである。○そも又 その人も亦。○うせて 死んで。○聞き傳ふるばかりの末々 聞き傳へに其の人の事を聞く位の末々の子孫。○あはれと思ふ 思ひはせぬ。何の感慨も持たぬといふのである。「やは」は反語。○さるは それは、さうなると。○跡とふわざ 死者の跡を弔ふこと。法事供養をして死者のあとを弔ふをいふ。○絶えぬれば 絶えて了ふと。絶えて了ふ、さうなると、と間を切つて見るとよく分る。○いづれの人と いつ死んだという人、どこの誰、斯ういふ思想を引きくるめた語。○年々の春の草 年々春になると墓畔に茂る草。此の邊の前後は、白氏文集の『古墳何代人、不知姓與名、化爲路傍土、年々春草生』といふ詩の句を取つて書いたのだ。○心ある人 情のある人、物のあはれを解した人。○あはれと見るべきを しみる心を動かして見入るべきだが、こゝの「を」は「見るべしざるを」といふので、あはれと見よう、が、さうした塚の跡もやがてはなくなつて了つて、といふのである。○はては しまひには、おしまひのはてには。○嵐にむせびし松 嵐に吹かれて悲しい音を立ててゐた松。「むせぶ」は泣き聲を立てる意。墓畔の松だから、その音までが泣き咽ぶやうだといふのである。○千年を待たで 千年も壽を保つべき松がそれに達せずして。○新にくだかれ 新として摧かれ、摧かれて新とな

第三十一段

り。この邊は、文選の古詩に『古墓爲田、松柏摧爲薪』といふ句を取つたもの。○鋤かれて 鋤きかへされて、鋤で掘りかへされて。○田となりぬ 田になつて了ふ。こゝの「ぬ」は一般敘述を強めた趣である。○その形だに なくなりぬるぞ 墓があつた所だといふ其の形跡さへもないやうになつて了ふのが。

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと何ともいはずりし返事に、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがくしからむ人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。かへすがへすも口惜しき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

【通解】 雪が降つて如何にも面白い趣を呈した朝の事、或人の所へ言うて遣る用事があつて、手紙をやるのに、其の中に雪の事は何とも書き添へなかつた所が、その返事に、「この雪景色はどうだと、一言なりとも仰せにならぬ程の、そんな無風流なお方の仰せになる事を、何で聞き入れられませうや。ほんとにほんとになさけない御心であらなされる」と言うてよこしたのは、實に面白かつた。今はもう故人になつた人なので、これ程の事も忘れられない。

【文旨】 情趣の上の自分の失敗談、それに亡き人——その人は女らしく思はれる筆致である——を思慕するといふ情味をからませて、面白く書いてゐる。「ひがくしからむ人」かへすがへすも口惜しき御心」といふ風に極端に

誇張した言葉を使つたその返事の文句に實に言ひ難い味がある。これが道徳上處世上の不都合をなせる言葉ならそれは何の趣もないのだが、雪の日に雪の事は言はず只用事だけ言うて遣つた、其の事を無風流として咎める詞である所に、無限の味ひが湧いて来る。この邊の消息は、文を作る者の大いに翫味すべき所だと思ふ。

【語義】○雪のおもしろう降りたりし朝。前夜雪が大さう降つて、如何にも雪景色の面白かつた其の朝といふのであらう。「現在面白く雪が降つてゐる朝」といふのではあるまい。○人のがり。人の許へ。○いふべき事ありていうて遣らねばならぬ事があつて、申入れるべき用件があつて。○文をやる。○手紙をやる。○手紙をやるというて、手紙を送るのに。○雪のこと何ともいはず返事に。雪の事を何とも言うて遣らなかつた返事に。兼好の方からは用件だけ認めて、雪の事は一言も書き添へずに遣つた所が、それに對する先方の返事といふのである。○この雪いかい見る。この雪を何と見る。どうだよい雪景色ではないか、面白い歌でも出来たか、といふやうな心持を含めた語と見てよからう。○一筆のたまはせぬほどの。一言おほせにならぬ位な。せめて一言位おつしやつてもよささうなもの、而るにそれを一筆おつしやつて下されなといふ意。○ひがくしからむ。ひがんでゐるやうな。こゝでは特に、風流氣のない、物の情趣を解せぬ、といふ意に使つたのである。○聞き入るべきかは。聞き入れられようや、承諾が出来るもんですか。かはは反語。○かへすがへすも。實にくどうも。○口惜しき御心。残念な御料簡、なげかはいしい御心、なさない御心。○かばかりの事。こればかりの事、こんな一寸した事。

第三十二段

九月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明るるまで月見ありくこと侍りしに、おぼし出づる所ありて、案内せさせて入りたまひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ句しめやかにう

ち薫りて、忍びたるけはひ、いとものあはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、なほことさまの優に覺えて、物のかくれより、しばし見居たるに、妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけ籠らましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは、如何でか知らむ。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。その人程なくうせにけりと聞き侍りし。

【通解】九月二十日の頃、或お方におさそはれ申上げて、夜の明ける迄月を見てその邊をあるいた事がありました。その方が中途でお思出しになつた所があつて、案内をさせて其の家にお這入りなされた。自分は外に立つてゐて見るに、荒れた庭には露が一杯におりてゐる、そこへ又、いかにも幽かなわざと用意したらしくもない薫物の匂がしんみりとかをつて来る——といふ風で、世を忍んで住つてゐる様が、誠にしみじみと情趣深い。其のお方は、やゝしばらくして出でおいでなされたが、自分は猶も一體の情景がいかにも優雅に思はれて、物蔭から、暫く見て居た所が、其の家の主人は、お客の出た跡の妻戸を今少しよけいに推し明けて、月を見てゐる様子である。これが若しお客を見送るなり、そのまゝすぐと掛金を掛けて内に這入らうものなら、如何になさけなく思はれるだらう。人の出たあとまで斯うして見てゐる人があるとは、素より知らう筈はない。斯ういふ事は、俄かにやらうとして出来る事ではなく、只ふだんの心掛によるべき事である。聞けば其の主人は、その後程なく亡くなつて了つたといふ事でありました。

【文旨】月の一夜の思出——如何にも情趣に富んだ主人の態度に感服した思出の記録で、而もその主人は今已なき人であるといふ點に於て全く前段と同工異曲である。全文の趣は兼好が貴人のお伴をして實見した所といふのであるが、これも例の筆法で、自分自身がした事か、乃至は空想的に描き出した物語であらう。全文の筆致から見

この主人は女と考へられる。

【語義】 ○ながつき 陰曆九月。○ある人 或貴人。全文敬語を使つてゐる上から、これは貴人と見るべきである。○さそはれ奉りて 誘はれ申して、そのお伴をして。○おほし出づる所 途中でふと思出した所。通り掛りで訪問すべき家を思ひ出されたといふのである。○案内せさせて 伴の者に案内をさせて、取次ぎを求めて。○あれたる庭の露しげきに 荒れた庭には露が一杯におりてゐるその上に。この「に」はそれに加へて又の思想。○わざとならぬ句 わざと用意してたき立てたといふ風でない香の匂。○忍びたるけはひ 世を忍んで住んでゐる様子、世から隠れて静かに住つてゐるその様。○ものあはれなり 如何にもしみじみした情趣がある。○よきほどにて よい程で、やゝしばらくして。長くも短くもなく——どちらかといへば、やゝ長くたつてといふ方に近い氣分だらう。○なほ なほも、それでもなほ。貴人は出られたが自分にはなほといふ意。○ことさまの 事の様か、その邊一體の趣が。○優に覺えて 優雅に思はれて。「優に」といふのは、上品に、ゆつたりして、こせついたわざとらしい趣のないのをいふ副詞。○物のかくれ 物蔭、何かの蔭。○妻戸 兩方へ開く戸、ひらき戸。部屋の間、廊下などの行きづまつた所にあつて、出入の口になる戸。○今少し もう少し、貴人が出た時よりも今少し餘計に。○やがて そのまゝすぐに。貴人の歸るのを見送つてそのまゝすぐにの意。○かけ籠らましかば 若し掛金を掛けて内に這入らうものなら。○口惜しからまし 残念だらう、なげなからう。其の主人の無風流が歎はしからうの意。「ましかば……まし」は事實に反する事を假設していふ助動詞の慣用呼應。○朝夕の心づかひ 平素の心掛。斯ういふ趣味風情の事は、平素の心遣如何による事で、急場にさし當つて仲々さううまく行くものではないとの意。

第三十三段

今の内裏つくりいだされて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の

日近くなりけるに、玄輝門院御らんじて、「閑院殿の櫛形の穴は、圓く、縁もなくぞありし」と仰せられける、いみじかりけり。これは葉の入りて、木にて縁をしたりければ、あやまりにて、直されにけり。

【通解】 今の内裏が御竣工になつて、故實家の人々に見せられた所が、どこも申分はないといふ事で、既にそこへ遷幸の日も近くなつた所が、玄輝門院が御覽になつて、閑院殿の櫛形の穴は、圓くて、縁もなく出来てゐたと仰せられたのは、如何にもすばらしい事であつた。この内裏の櫛形の穴は、入角になつてゐて、木で縁を取つてあつたので、そこが間違つてゐた譯で、造り直されたのであつた。

【文旨】 古典趣味に映した内裏造營についての一事實を敘したといふまでである。

【語義】 ○今の内裏 現在の御所。花園帝の御代に新に造營された、冷泉宮小路の内裏をいふ。○有職の人々 故實に通じた人々。○難なし 非難すべき所なし、故實上少しも文句なし。○遷幸 新殿へ御うつりになる事。○玄輝門院 伏見天皇の母后、左大臣藤原實雄の女。「何々門院」といふのは、凡てその方が佛門に歸せられて後の稱。○閑院殿 高倉から後深草まで皇居となつた里内裏で、後の皇居の模範となつたもの。○櫛形の穴 清凉殿鬼ノ間の東南隅から殿上の北の窓に掛け、柱を挟んで半月形にあげた窓。○縁 穴の周囲の縁。○仰せられける 仰せられたのは、仰せになつたがそれは。連體假止で、文法的には「仰せられけるは」の略。○いみじかりけり 感服の至りだ、恐入つたものだ、すばらしい事だ。よく故實を辨へて居られた事を歎美した詞。○葉 圓周の一部分を剝つて、内側へ花瓣のやうに入り込ませた所をいふ。これを「いりがく」又は「いりずみ」ともいふ。

第三十四段

甲香は、ほらがひの様なるが、小さくて、口のほどの細長にして出でたる貝の蓋なり。武蔵の國金澤といふ浦にありしを、所の者はへなたりと申し侍るとぞいひし。

【通解】 甲香は、法螺貝の様なるもので、もつと小さくて、口の所が細長くて前へ突き出てゐる貝の蓋である。武蔵の國金澤といふ海邊にあつたのを、聞いて見たら、「土地の者はそれをへなたりと申します」と答へたのであつた。

【文旨】 一般に世人は甲香即ち貝のへただけを取扱つてゐたのを、兼好が金澤でその貝の全體を見附けて、所の者はへなたりといふと聞いて、古典趣味の上から一寸發見報告といふ心持で記録したのである。

【語義】 ○甲香 粉末にして煉香の中に和して用ひるもので、甲は貝の意だらう。○やうなるが 様な物の、様なものであつて、なるがは「であるが」でなく、「である物の」の義と見る方が古文の趣に叶ふだらう。○口のほどの細長にして出でたる 口の所が細長で前へ出てゐる。簡單に言へば、口の所が細長く出てゐる、である。○所の者 金澤の住民。

第三十五段

手のわるき人の、憚らず文かきちらすはよし。見ぐるしとて人に書かするはうるさし。

【通解】 手のわるい人が、遠慮せずにどん／＼と手紙を書くのは結構。見苦しいからというて人に代筆させるの

は厭味だ。

【文旨】 一寸した事だが、氣取らず自然に、といふ筆者の趣味觀がよく出てゐる。「よし」「うるさし」の語の對立が殊によく活きてゐる。

【語義】 ○手 手跡、筆跡。○憚らず 遠慮せず、字の下手な事など少しも構はずどし／＼と。○かきちらす 構はず／＼書く。○うるさし 煩はしく厭味しい。殊更らしくて厭味だといふ意。

第三十六段

久しくおとづれぬ頃、いかばかり恨むらむと、我がおこたり思ひ知られて、言葉なき心地するに、女のかたより、「仕丁やある、一人」などいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心さましたる人ぞよきと、人の申し侍りし、さもあるべきことなり。

【通解】 女の許を、長いこと訪ねずにゐる時分のこと、先方ではどんなに恨んでゐるだらうと、自分の無沙汰が誠にすまないやうに思はれて、何と言譯の言葉もないやうな氣がしてゐる所へ、女の方から、「下部の手のあいたのがおありでしたら、一人お貸し下さい」などと言うてよこしたのは、實に得難く嬉しく思はれる。さういふ氣立を持つた女がいゝと、或人が申した事でありましたが、如何にも尤も千萬の事である。

【文旨】 女の心遣ひ——いやにひねくれて、こちらの無沙汰を恨んだりなどせず、そんな事は殆ど念頭にないやうにしてゐる心遣ひ、それを最もよいとしたのである。ずう／＼と自分の實驗談のやうに書いて來て、文末に至つて「さる心さましたる人ぞよきと、人の申し侍りし」と軽く人の話に取なした所に妙味があるが、勿論これは自分自身

の経験又は假想を人の言葉に託したもので、作者の好んで使ふ例の筆法である。

【語義】 ○久しくおとづれぬ頃。長い間訪ねて行かない時分。おとづれは訪問、たより等の意。手紙などで、安否を問ふにもいふが、こゝは自身訪ねて行くといふ意の方。○いかばかり。どれ程、どの位、どんなに。○我がおこたり思ひ知られて。自分の怠慢が自分に認識せられて。どうもすつかり御無沙汰をしてつて悪かつたと思はれての意。○言葉なき。言譯の言葉がない、何とも言つて遣りやうがない。○仕丁やある一人。召使がおりますかあらば一人貸して下さい。仕丁は召使、しもべやあるは「ありや」といふ疑問辭。そちらに召使の手のあいたのがおありでしたら、少し頼みたい用事があるから、一人貸して下さい、といふのである。○いひおこせたる。いうてよこした。手紙か何かで其の事を言うてよこしたのだ。○ありがたく。得難い、珍らしい。女のさうした態度が世にも珍らしく得難いものに思はれてといふ意。○さる心さま。さういふ氣立て。さういふ物恨みをせぬ氣立てをいふ。○申し侍りし。申しましたが。○さもあるべきことなり。さうあるべき事だ、如何にも尤もな事だ。

第三十七段

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくるへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげに／＼しく、よき人かななどぞ覺ゆる。うとき人の、うちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

【通解】 朝夕何の隔てもなく親しみ馴れた人が、何かひよつとした時、自分に氣兼をして、妙に改まつた様な様子に見えるのは、何も今更そんなに他人行儀をしなくてもよからうといふ人もあるに違ひないが、然しそれはやはり成程かうあるべきだ、いゝ人だなアと思はれるものだ。又餘り親しくない人が、偶々打解けた事を言うたのも、やはりよい人よと、其の人を深く思ひしたふ様になるべき事である。

【文旨】 一寸した人情の機微を穿つて、表現しにくい所を巧に表現してゐる。兼好はどこ迄も、圖々しい態度、わざとらしい態度を厭つてゐる。打解けた仲にもどこかにつまじさがあり、疎々しい仲にも親しみを持つ、それが兼好の趣味の理想であり、吾々の心構へでもあるべき筈。それも趣味主觀の上の事で、親しき仲にも禮儀ありなといふ教訓では勿論ない。馴れたる人「うとき人」それは男でも女でもよいが、立文主觀からすれば、やはり女を假想したものと見るべきであらう。

【語義】 ○朝夕。ふだん、平素の意で、今もいふ朝夕と同意。○へだてなく馴れたる人。心の隔てなく馴れ親しんでゐる人。深く打解けた仲をいふ。○ともある時。ひよつとした時、どうかいふ場合に。○心おき。氣掛ねをし、遠慮をし。○ひきつくるへるさま。改まつた風の様子。容を正し行儀はつて振舞ふのをいふ。○今更かくやは。今更そんなにするには及ばぬ。やはは反語。斯ういふ打解けた間柄に於て、何も今更そんなに他人行儀をしなくてもよいとの意。○ありぬべけれど。あるに違ひないが。○なほ。やはり。○げに／＼しく。如何にも然かあるべく、それが成程と首肯せられるやうに。即ち

なほ げに／＼しく とぞ覺ゆる
よき人かな

といふ文脈。げに／＼しき人」といふ筋ではない。又「げに／＼しく」を「よき」の副詞と見て「ほんとうに」と譯すといふ説もあるが、この語の一般用義に従つて、如何にも尤もと首肯せられると解するがよい。○よき人。上品な、教養のある、物の情趣の分つた人。○うとき人。あまり親しくない人。○またよしと思ひつきぬべし。これも亦よいと其の人の事が深く心に印象されて慕はしく思ふやうになるだらう。思ひつくは、突込んで言へば其の

人に惚れ込むといふやうな趣の詞である。

第三十八段

名利につかはれて、静かなる暇なく、一生をくるしむるこそ愚かなれ。たからおほければ身を
守るにまどし。害を買ひ、煩を招くなかだちなり。身の後には金をして北斗を支ふとも、人のた
めにぞ煩はるべき。愚かなる人の目を喜ばしむるたのしび、又あぢきなし。大きな車、肥え
たる馬、金玉のかざりも、心あらむ人は、うたて愚かなりとぞ見るべき。金は山に棄て、玉は
淵に投ぐべし。利に惑ふはすぐれて愚かなる人なり。

【通解】 名聞利益の爲めに驅使せられて、只せかくとしておちついた暇もなく、一生を苦しみ／＼過すのは、
實に愚かな事だ。財寶が多いと我が身を守る上に於ては貧しい——財寶の爲めに心を苦しめて、従つて身の守りと
いふ點に於て缺陷が出来る。即ち財の多いといふ事は、害を買ひ、煩を招く媒介である。よしや我が身の死後に天
まで届く程の黄金を積み重ねて遣した所で、只々人から厄介がられるに違ひない。それから又、愚かな人の目を喜
ばせてあつと言はせるやうな楽しみも、又誠につまらないものだ。大きな車、肥えた馬、金玉の飾も、心あるところ
の人は、いやはやどうも馬鹿々々しいと思ふに違ひない。金は山に棄て、玉は淵に投ずるがよい。利欲に迷ふのは
此の上もなく愚かな人である。

【文旨】 本段は利益、名譽、知能、凡そ世の人の憧憬的となつてゐる所のものを擧げて、それが皆つまらぬも
のだと斷じたのである。「名利につかはれて、静かなる暇なく、一生をくるしむこそ愚かなれ」が全段の總敘で、そ
れにつづいた此の一節に於ては、専ら利益とか富み豪奢とかいふ事の愚かさを痛言してゐるのである。

【語義】 ○名利につかはれて。名聞利益に驅使されて。浮世の名譽利益に心が奪はれて、只その爲めにのみ離離
としてゐる、といふのである。○だから。財寶、財産。○身を守るにまどし。我身を守る上に於て貧しい。「まどし」
は貧し。財が多いとそれに心を苦しめてばかりゐる結果として、身を正しく守つて行く方が御留守になる、どうし
てもうまく行かぬといふのである。○害を買ひ煩を招くなかだち。危害を招き面倒を起す媒介物。財寶が多いと自
然人から危害を蒙り、色々な面倒が起つて來るといふ意。○身の後。死後。○金をして北斗を支ふ。金で北斗を支
へる、天に届く程黄金を積み上げる。「は以ての意。北斗」は北斗星。白氏文集に「身後堆金柱北斗、不如
生前一樽酒」。○人のためにぞ煩はるべき。人にもちあつかはれに違ひない、必ず人から厄介視されるであらう。
「人」は端的にいへば財貨を遺された子孫であるが、必ずしもそれと限定して解く必要はない。○目を喜ばしむるた
のしび。目を喜ばせる楽しみ、華美なもの杯を見て愚人があつと喜ぶその楽しみ。○あぢきなし。つまらぬ、何の面白
味もない。○心あらむ人。考のある人、物の情理の分つた人。「心ある人」の婉曲敘法。○うたて。あゝいやだ、あ
まり情ないといふ強い嫌惡主觀の副詞。○金は山に棄て云々。金玉の貴むべからざるをいふ。莊子の天地篇に「藏
金於山、藏珠於淵」とあり、それから出て、文選の東都賦に「捐金於山、沉珠於淵」とある。それを引用して
書いたのだ。○すぐれて。勝れて、特に一番。

うづもれぬ名をながき世に残さむこそ、あらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、す
ぐれたる人とやはいふべき。愚かに拙き人も、家に生れ、時にあへば、高き位にのぼり、おごり
を極むるもあり。いみじかりし賢人聖人、みづから卑しき位にをり、時に遇はずして止みぬる、

またおほし。ひとへに高きつかさ位をのぞむも、次におろかなり。

【通解】 不朽の名を永く後世に残すといふ事は、願はしい事に相違ない。さればといつて、位が高く身分の尊いのを、どうしてすぐれた立派な人だといひきれよう。愚かなつまらない人でも、名門の家に生れ、時世に遭へば、高い位に登り、奢りを極めるものもある。之に反して、卓絶してゐた賢人聖人が、自ら甘じて卑しい位に居り、時に遭はないで不遇のまゝ一生を終へたのも、亦澤山にある。されば一途に高位高官を望むのも、利を求めぬのに次いで愚である。

【文旨】 高位高官を望むの愚を切言したのである。文初に「うづもれぬ名をながき世に残さむこそあらまほしかるべけれ」の一句を置いたのは、前節に「名利につかはれ」と書き出して、まづ利を望むの愚を強調し、さて名を求むるの愚に説き及ぼうとする楔子としたのである。この楔子の詞として不朽の名を永く後世に残す事を「あらまほしかるべけれ」と肯定しながら、いきなり思想を飛躍させて、世人が名譽の對象として憧れる所の高位高官を望むの愚に説き及んだのは、眞意が名を求むるの愚を強調するに存してゐて、而も一應は世人の感情を肯定し、さて遂にそれを打破しようといふ抑揚の筆法を用ひようがためである。

【語義】 ○うづもれぬ名 埋らない名、不朽の美名。身は土中に埋められても、美名は永く世の中に残るといふ意。○ながき世を「世にながく」といふ副詞を形容詞の形で表現したのである。○あらまほしかるべけれ 願はしい事であらう、成程願はしい事に違ひない。○やんごとなきをしも 尊いのをばしは強勢の助詞。○やはいふべき いへようやいはれない。「やは」は反語。○愚かに拙き人 愚かで劣つた人。「に」は重なる意の助詞、愚かで且つ拙き人。「拙き」は劣つた、よくない、つまらぬ。○家に生れ 家柄の家に生れ。「家」は門閥、名門の意。○時にあへば 時世に遭へば、時運に遭逢すれば、うまく運が向いて来れば。○いみじかりし すばらしくすぐれて居た。

○みづから卑しき位にをり 自分からひくい位に甘んじて居り。○止みぬる 終つた、そのまゝ一生を終へた。文法的にいへば「ぬるも」の略。○ひとへに 一途に、一心に。○次に その次に、利を求めぬについて。

智恵と心とこそ、世にすぐたる譽も残さまほしきを、つらく思へば、譽を愛するは人の聞きを喜ぶなり。譽むる人、そしる人、共に世にとゞまらず、傳へ聞かむ人、また速かに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られむことを願はむ。譽はまた毀のもとなり。身の後の名残りて更に益なし。これを願ふも、次に愚かなり。たゞし強ひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはず、智恵いでは偽あり、才能は煩惱の増長せるなり。

【通解】 智恵と心とこそは、高く一世にすぐれてゐるといふ名譽を後世に残したい事であるが、よく考へて見ると、譽を愛するのは世間の評判を喜ぶのである。譽める人も、毀る人も、共に此の世に止まつてゐず、それを聞き傳へる人も、また皆速かに此の世を去るであらう。されば、誰に對して恥ぢ、誰に對して知られん事を願はうや。元來譽は毀のもとである。死後に名が残つた所で一方向につまらない。之を願ふのも、次に愚である。但し、あながち智を求め賢を願ふ人の爲めに言ふならば、智恵が出て来ると、其の結果として自然偽が生ずる、才智藝能は様々な欲望や惱みの段々と積り積つて出来たものである。

【文旨】 名譽といふ中にも特に智徳の人にすぐれた名譽は、永く後世に残したいものだが、更に熟考すると、それもつまらぬ。要するにそれは世間的の評判を喜ぶに過ぎない。譽める人も毀る人も結局皆死んで了ふ。はかない人世にはかない名を残してそれが何になる。それに又一方からいへば、譽められるといふ一面には必ず毀られる事

がある。どうしても名を残さうとするのは愚の至りだ。而も強ひて智能を得たがる人の爲めにいへば、元來智や能は尊いものでも何でもない、智惠の發達する結果として様々な偽が生じて来る、才能は畢竟煩惱の發達したものに過ぎぬ、といふのである。

【語義】 ○世にすぐれたる。一世に卓絶した。世には「非常に」と解しても通ずるが、世の中に「一世に」と見た方が自然だらう。○つらく。よくく。○人の聞き。人の評判、世の噂。○とどまらず。去る。此の世に止まらぬ、此の世を去る。何れも死ぬの意。○誰をか恥ぢ。誰に對して恥ぢよう。誰に對して我が身を恥ぢるか、さういふ相手は無い筈だ。○知られむ。自分の値打を知られよう。○譽はまた毀のもと。譽められるのは毀られる本。即ち一方で譽められると、其の反面には必ず毀られる事が伴つてゐる。○身の後の名。死後の名聲。○更に。一向、少しも「なし」に呼應する副詞。○たゞし。上を承けて下を起す接續の言葉。こゝで一寸お断りしておくが「いふ心持で使つた言葉と見てよからう。○強ひて智をもとめ賢を願ふ人のためにいはば。世にはどこ迄も智を求め、賢くなりたいと願つてゐる人がある、さういふ人の爲めに一言するならば、の意。○智惠いでは偽あり。老子に『大道廢有仁義、智惠出有大偽』とあるのを取つた言葉。太古醇樸の世には、人皆自然の生活を營んで、人工的な虚偽など少しもなかつた、然るに段々と智惠が生じて来るにつれて、人生に偽といふものが起つて来たといふのである。○煩惱。佛語で、人間のあらゆる欲情、願望、苦慮などをいふ語。○増長せるなり。増し長じて出来たものだ。色々な欲望煩惱が積もり積もつて出来たものが才能だとの意。おごり増長する」といふ意ではない。

傳へて聞き、學びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、

誰か傳へむ。これ徳をかくし、愚を守るにはあらず、もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。まよひの心をもちて名利の要をもとむるに、かくのごとし。萬事はみな非なり。いふにたらず、願ふにたらず。

【通解】 人から傳へられて聞き知り、學んで知るのは、ほんとの智ではない。どんなものを智といはうか、煮詰めて見ると、世に智といふものは無いのである。可といひ不可といふものも、畢竟は只一つのもので、二者の間に區別はない。どんなものを指して善といふのであるか、由來善などといふものは無いのである。眞人は智もなく、徳もなく、事功もなく、名聲も無い。誰がこれを知り、誰がそれを後世に言ひ傳へよう。これはわざ／＼徳を隠し、愚を守つてゐるのではない、もと／＼賢愚得失といふやうな境地に居らず、そんな境地を超越してゐるからである。迷ひの心を以て浮世の名聞利益に對する要望を求めると、それは皆この通りである。萬事は皆非だ、實體の存するものではない。論ずるに足らず、願ふに足りない。

【文旨】 いや／＼老壯の絶對論に及んでゐる。智愚善惡は相對觀に即していふ事に過ぎない。相對を超越した絶對觀に立てば、智もなく、愚もなく、善もない、惡もない。この思想は佛教に於ても一致する。『色即是空、空即是色』といふのがそれである。色は差別相對、空は無差別絶對である。兼好の人世觀が、斯うした考の上に立つたものであり、彼の趣味觀が最も多く斯ういふ思想と共鳴してゐた事は明かである。そして吾々は斯うした絶對觀の中から、紛々たる世俗の私利私慾を超越して、眞に正しい生き方を生くべき心構へを見出さなければならぬ。文末に「まよひの心をもちて名利の要を求むるにかくのごとし」といふ一句があつて、一寸混線してゐる觀があるが、これは此の一節だけでなく、前からの全一段を總括して、迷の心で名利を求めると、その得る所は結局斯うした譯の

ものだといふのである。更にそれを詳悉すれば、利が何になる、その爲めに害も蒙れば面倒も起る。名が何になる、譽める人毀る人皆共に死んで了ふ、それに又譽の反面には毀がある。其の他官位も智能も要するに世間的の煩惱に過ぎぬ。結局空なものだ。で、眞人はさうした人爲から超越して靜かに無關心に絶對境地に立つてゐるのだといふのである。

【語義】 ○傳へて聞き學びて知る。人から教へられて聞き知り、學んで始めて知る、即ち人爲的な後天的な經驗的な智をいふ。○まことの智にあらず。ほんとの意味に於ての智ではない、人が假に智と稱するに過ぎぬ。○いかなるをか智といふべき。どんなのをば智といはうか、智といふものは無い筈である。

一傳へて聞き學びて知るはまことの智にあらず 一いかなるをか智といふべき
一不可は一條なり 一いかなるをか善といふ

斯ういふ對立で、結局の思想は、智もなく善もない、世間で智とか善とかといふのは、それは人爲的な、現象的な、迷の心から言ふ言葉に過ぎないといふのである。○不可は一條なり。善も不善も畢竟一筋で區別はない。「一條」はひとすぢ。○まことの人。眞人、至人、ほんとに悟り切つて絶對境地に立つてゐる人。○誰か知り誰か傳へむ。世に知る人もなく、語り傳へる人もない。世間でえらいとか徳が高いとかいうて評判され、名の後世に傳はるのは、斯ういふ見地からいへば、まだ眞人ではない、まして自ら希求するが如きは愚者の迷だといふ心持で見ればよく分らう。○徳をかくし愚を守るにはあらず。わざ／＼徳をかくして表はさぬやうにし、馬鹿になつてゐるといふのではない、さうした小細工は眞人のする事ではない。○賢愚得失のさかひに居らざればなり。賢とか愚とか善いとか善くないとかいふ、さうした相對差別の世間現象に没頭してはゐらない、さういふ相對の境地を超越してゐるからだ。「さかひ」は處、場所。○名利の要を求むるに。名利の要望をもとめると。「に」は何々すると其の結果の意に使つた例。「の要」の二字は衍文即ち餘分の言葉が紛れ込んだものと見る説もあるが、「要」を「要望」「求め」の義と見れば

このまゝでも通ずる。○萬事は皆非なり。世の中の事は凡て皆非だ。「非なり」は眞のものではない、實體の存するものでなく、一時的な、現象的な、假りのものだの意。

第三十九段

ある人、法然上人に、「念佛の時睡におかされて、行を怠り侍ること、いかゞしてこのさはりをやめむ」と申しければ、「目の覺めたらむほど念佛したまへ」と答へられける、いとたふとかりけり。また「往生は一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といはれけり。これもたふとし。また「疑ひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これ亦たふとし。

【通解】 或人が、法然上人に、「念佛してゐる時、しきりと睡氣がさして来て、行を怠ることがありますが、どうして此の障碍をなほしたものでありませうか」と申したら、「目のさめてゐるその間念佛なさい」と答へられたが、いかにも尊い事である。又「極樂往生は、きつと出来ると思へばきつと出来、どうだか分らぬと思へば分らぬものである」といはれたのであつた。これも尊い。又「疑ひながらも念佛をすれば極樂往生が出来るとも云はれた。これも亦尊い言葉である。」

【文旨】 これは法然上人の大悟徹底した言葉を録したもので、その法に囚れず何のこだはりもない所に心から共鳴してゐるのである。

【語義】 ○法然上人。美作國稻岡の人、源空といひ、淨土專念宗を唱へた僧。「上人」は高德の僧を呼ぶ敬稱。

○念佛。南無阿彌陀の六字の名號を稱へて念じ祈ること。即ち、稱名念佛。○行。佛道の修行。こゝでは念佛の行。○このさはり。この障碍。念佛修行の邪魔を爲す所の睡氣。○やめ。直し、除き。○目のさめたらむほど。目がさめてゐる間。たらむは「たる」の婉曲敘法。○たふとし。尊い、有難い言葉だ。○往生。往生淨土、極樂往生。死後に阿彌陀の王城たる極樂淨土へ往つて所謂九品蓮臺の上に化生すること。○一定。きまつてゐること。きつと往生が出来るかと極つてゐるの意。○不定。きまつてゐないこと。往生が出来るか出来ぬか不確實だの意。○疑ひながらも。果して極樂往生が出来るかどうかと心の内に疑ひながらも。

第四十段

因幡の國に、何の入道とかやいふもの女、かたちよしと聞きて、人數多いひわたりけれども、この女、たゞ粟をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、かゝる異様のもの、人に見ゆべきにあらずとて、親ゆるさざりけり。

【通解】 因幡の國にゐた、何がし入道とかいふ者の女が、器量がよいと聞いて、大勢の人々がしきりと求婚をしたが、この女は、たゞ粟ばかりたべて、少しも穀類をたべなかつたので、こんな人並でない者は、人に嫁ぎなどすべきものではないというて、親入道がそれを許さなかつた。

【文旨】 異聞を録したといふ迄である。兼好は斯ういふ異聞にも一種の興味を持つてゐたものと見えて、所々に斯うした記事が散見してゐる。

【語義】 ○因幡の國に。斯ういふ「に」は、先づ大きく地點を示すに使ふ一の慣用語で、「にゐた……者」といふ

心持に見ればよい。○何の入道。なにがしの入道。「入道」は佛道に入つた人。佛道に入つて頭は剃つても寺へは入らずにそのまま家に居る人をもいふ、こゝもその一例であらう。○かたち。器量、容貌。○いひわたりけれども。色々といひ寄つたが。どうか自分の妻にくれと根氣よく求婚を申入れたの意。○米のたぐひ。米の類、米麥の穀類。○異様。普通と變つた。○人に見ゆ。人に嫁ぐ、人の妻になる。「見ゆ」は見られるの義、古文調では「ミユ」といはぬ。

第四十一段

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雑人たちへだてて見えざりしかば、おのゝおりて、埒の際によりたれど、ことに人おほく立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなる樗の木に、法師の登りて、木の股にひゐて物見るあり。取りつきながら、いたう眠りて、おちぬべき時に、目を覺すこと度々なり。これを見る人、嘲りあさみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて、安き心ありて眠るらんよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、「吾等が生死の到來たゞ今にもやあらむ。これを忘れて、物見て目を暮す、愚かなることは、尙まさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。尤も愚かに候ふ」といひて、みな後を見かへりて、「こゝへいらせ給へ」とて、所をさりて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひよらざらむなれども、をりからの思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。

【通解】五月五日、賀茂の競馬を見物いたしたが、車の前に見物の群衆が大勢立ち隔てて見えなかつたので、何れも車から降りて、柵のきはに寄つて行つたが、そこには殊に人が大勢込み合つて、内へ分けて入りやうもない。さうした折に、向ひの側の柵の木に登つて、木の股にどツかと腰をおろして見物する一人の僧があつた。枝につかまつたまゝ、ひどく眠つて、木から落ちさうになると目を覺す、さういふ事を幾度となくやつてゐる。それを見る見物人が嘲りあきれて、「實にどうも馬鹿なやつだ。あんなあぶない枝の上で、よくまア安心して眠られたものだなア」といふ。それを聞いて、ふと自分の心に浮んだまゝに、「吾々に死期の到來することは、今すぐであらうも知れぬ。それを忘れて、斯うして見物をして日を暮す、その愚かさは、この僧にもましてゐるものを」と云つた所が、自分の前にゐた人々が、「なる程ほんとにさ様で御座います。實にどうも愚かな事で御座います」といふて、皆後ろを見返つて、「こゝへ御這入りなさいませ」といふて、場所をあげて、私をそこへ入れてくれたのであつた。この位の道理は、誰だつて思ひつかぬことはなからうけれど、かうした折にさうした言葉を聞いたので、如何にも思ひ掛けぬ道理を聞いたやうに思つて、胸に當つたのであらうか。人は無情の木石ではないのだから、さうした何かの場合に物に感ずることがないではない。

【文旨】 悟道の教訓などと立入つて見るべき筋ではない。競馬で實見した所の坊主の仕打ち——木の股に腰を掛けてこくりこくりとやつてゐて、落ちさうになつては目をさます、それは如何にも呑氣さうで、兼好の趣味に合つたのだらう。所がそれを見て人々は嘲笑してゐる。で、兼好はふと胸に浮ぶがまゝに、一寸説教じみた事をいうて見た。所が、それが人々に感動を與へて、さアどうぞと中へ呼び入れてくれたといふに過ぎない。一寸した自讃の程度である。

【語義】 ○賀茂のくらべ馬。賀茂神社内で行はれる競馬。○車。兼好が連れの人たちと乗つてゐた車。斯ういふ際に、貴人たちは車を止めて躰越しに見物するを例としたのである。○雜人。身分の賤しい人々。見物の群衆をい

ふ。○埒。馬場の周囲の柵。○柵。柵の木の。五月の初に黄ばんだ簇生花が咲く。○つゝ。腰をおろしてゐて。安坐してゐるさまをいふ。○いたう。ひどく。○あさみて。あきれはてての意。○世のしれもの。ひどい馬鹿者。『世のしれもの』は痴人、愚人、無分別者。○安き心ありて眠るらむよ。安心して眠ると見えるよ。但、全體の語調としては、よくまア安心して眠れたものだなア、といふ調子。○いふにつけて、いたのによつて。○生死の到來。死の來ること。『生死』の『生』は添はつただけで意味はない。○たゞ今にもやあらむ。今眼前すぐの事であるかもしれない。○尙まさりたるものを。一層まさつてゐるものを。あの僧の愚よりも更に一層の愚だといふ意。『ものを』は下に「いかで之を嘲りあさむべき」といふやうな心持を含めたものと見ればよい。○さこそ候ひけれ。その通りで御座います。如何にも貴説の通りだの意。○尤も愚かに候ふ。實に愚です。兼好の言葉に感じて、人々が自分自らを愚かだといふたのである。○所をさりて。場所を明けて、自分の居る所をどいて。○こゝへいらせ給へ。兼好の言葉に感心して、ひどくえらい人だと思つて、人々が鄭重に招き入れたのである。○かほのことわり。これ位の道理。○誰かと思ひよらざらむなれども。誰か思ひ寄らなからう、誰でも思ひつくべき事ではあるが。○をりからの思ひがけぬ心ちして。折が折だけにその言葉が思ひ掛けぬ氣がして。○胸にあたりけるにや。胸に當つたのであらうか。胸にあたる』は成程と心に思ひあたる意。○人木石にあらねば。人は非情のものでないから。宋書吳喜傳に『人非木石何能不感』○時にとりて。場合に應じて。何か然るべき機會に於ての意。

第四十二段

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病あり

て、年のやうくたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、煩はしくなりて、目眉額など腫れまどひて、うち覆ひければ、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、たゞ恐しく鬼の顔になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻になりなどして、後は坊のうちの人も見えず、籠り居て、年久しくありて、なほ煩はしくなりて死にけり。かゝる病もある事にこそ。

【通解】唐橋の中將といふ人の子に、行雅僧都というて、教理の方の師匠をする僧があつた。其の人は上氣する病氣があつて、段々と年を取るにつれて、鼻の中がふさがつて、呼吸も困難になつたので、色々と療治をしたが、重くなるばかりで、目や眉や額なども一ぱいに腫れ上つて、覆ひかぶさつたので、物も見えなくなり、丸で二の舞の面のやうであつたが、たゞもう恐しく鬼のやうな顔附になつて、目は頭のでつべんの方につき、額の邊が鼻になつたりするといふ有様で、後には僧坊内の人にもあはず、一室に籠つて居て、長いことさうしてゐたが、益々病氣がひどくなつて、たうとう死んでしまつた。こんな不思議な病氣もあるのであるわい。

【文旨】珍らしい病氣についての奇聞を録したといふ迄である。
 【語義】○唐橋中將 參議中將唐橋雅清。○僧都 僧官の名。僧正の次で、律師の上。○教相 眞言宗では教相事相の二部を分ち、教相の方は教理を専攻し、事相の方は行法を修する。○人の師匠たる僧、人に教へる僧。○氣のあがるのぼせる、上氣する。○年のやうくたくるほどに 段々と年を取るにつれて。「たく」は更ける、高くなるの意。○ふたがりて 塞つて。○息も出でがたかりければ 息もつき難かつたから、呼吸も難澁になつたから。○つづくろひ 療治する、手當を加へる。○煩はしくなりて 病氣がひどくなつて。○腫れまどひ

て。むやみと腫れ上つて、そこいら中が滅茶々に腫れて。○うち覆ひ 目の上に覆ひかぶさり。○物も見えず 何も見えない。○二の舞 舞樂で、安摩といふ滑稽な舞の次に之に答へて舞ふ舞。舞人二人、一人は男で笑面をつけ、一人は女で腫面をつける。こゝは女の腫面の事だらう。○恐しく鬼の顔になりて 鬼のやうな恐しい顔になつて。文法的には「恐しく」は「なり」に係る副詞。○頂 頭の頂上。○額のほど 額の邊。鼻が釣り上つて額の邊に行つて了つたといふ意。○坊 僧坊、僧の居る所。○見え 見え。あはず、顔を合はせず。○なほ 一層、益々。

第四十三段

春の暮つ方、のどやかに艶なる空に、賤しからぬ家の、奥ふかく、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子、皆下して、さびしげなるに、東にむきて妻戸のよきほどに開きたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくゝのどやかなる様にて、机の上に書をくりひろげて見居たり。いかなる人なりけむ、たづね聞かまほし。

【通解】晩春の頃、如何にも静かにのんびりとして優雅な光景の中に、賤しからぬ一軒の家があつて、づうつと奥ふかく、植込もこんもりと時代がついて、庭に散つてゐる落花の風情が、如何にも見過し難いので、ずつと中へ這入つて見ると、南向きの方の格子はすつかり下して寂しげに森閑としてゐるが、東に面して妻戸が程よく開いてゐる、そこに掛つた御簾の破目から見ると、容姿清げな二十ばかりの男が、うちくつろいでゐるが、而もどこか奥ゆかしくゆつたりと落著いた様子をして、机の上に書をくり擴げて見て居た。ゆかしい人だ、一體どういふ人だ

つたか、今でも誰かに尋ね聞きたく思ふ。

【文旨】 春らしい情景をさら／＼と描寫した面白いスケッチである。文法的、論理的にはかなり不備だといへるが、次から次へとその春らしい情景を讀者の眼前に展開して行つて、さて「いかなる人なりけむ」と如何にも讀者の凡てが起しさうな疑問を以てさらりと文を結んだ所が面白い。

【語義】 ○暮つ方 暮の頃。○のどやかに艶なる空に のんびりとして静かなその上又花やかな雰囲気の中に。「空」はあたり一體の趣をいふ。○賤しからぬ家の 賤しくない家の、相當な家の、上品な家の。○木立ものふりて庭に立ち並んだ木も時代がついて。○見過しがたきを そのまよそに見て通り過ぎるのがをしいので。○さし入りて ずつと中へ這入つて。○さびしげなるに 如何にも森閑として寂しさうであるが「に」は而るにといふ軽い反戻の趣。○よきほどに よい程に、かなりの廣さに。○御簾のやぶれ 御簾の破れたその隙間。上品ではあるが豪奢な生活でない、如何にも淋しげなわび住ひといふ趣が、この一句の上にもよく見えてゐる。○かたち清げなる容貌のきれいな。○うちとけたれど 打くつろいではあるが。下に「さればといつてしどけない風ではなくて」の意の省略が感じられる。○心にくゝ 奥ゆかしく、上品に。○書をくりひろげて 書物をくりひろげて。「くり」は紙をめぐるのをいふ。

第四十四段

あやし竹の編戸のうちより、いと若き男の、月かげに色合さだかならねど、つややかなる狩衣に、濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、遙かなる田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべ

き人もあらじと思ふに、行かむかた知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹きやみて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。

【通解】 粗末な竹の編戸の内から、ごく若い男が、月明りで、色合はつきりせぬが、何でも美しくつやのいゝ狩衣に、濃い紫の指貫をはいて、如何にも由ありげな様で、小さくかはいゝ童子を一人つれて、づう／＼と長く續いた田の中の細道を、稻葉の露にぬれながら分けて行く、そのほど、笛を何ともいへぬいゝ音に吹き興じてゐる、こんな所に、斯ういふいゝ音の趣を聞き分ける人もあるまいと思ふにつけて、其の男の行く先が知りたくなつて、見送り／＼やつて行くと、その人は笛を吹き止んで、山のきは所の惣門のある邸の内に這入つて行つた。

【文旨】 蓋し想像的な描寫であらうが、全一段として、如何にも面白く、秋の夜の山里の情調を寫してゐる。この一節は全段の書き出しで、あつさりといきなり「あやしの竹の編戸のうちより」と筆を起したのは、前段と同様、その情景の核心を擲んで、その場のシーンを眼前に髣髴たらしめようとする、例の巧みな修辭法である。つまり月のよい秋の一夜、山里の邊をどこともなくそゞろあるきして、斯うした何ともいへぬ情調を味つたといふのである。

【語義】 ○あやしの 粗末な、はかなげな。○編戸 あんだ戸、家のまはりにめぐらした垣の戸である。○うちより 内から。この「より」に對する「出で」は省略されてゐる。○月影に 月明りで。「に」は「にて」の意。○色合さだかならねど 色氣はつきりせぬが。「さだか」は、はつきり。○つややかなる つやのいゝ、美しくてりのある。○狩衣 もとは遊獵服の稱であるが、平安朝の中期後一般に貴人の常服となつたもの。○こき 濃い紫の。此の時代、男の服装に「濃き」「薄き」といふのは紫色の事である。○指貫 裾に括り紐があつて、之を足にくゝりつける袴。奴袴とも書く。正確にいへば「さしぬきのはかま」である。○ゆゑづきたるさま 由ありげな様子。打

見る所、何でも只の人ではない、都の然るべき由緒ある人に違ひないと思はれるやうな様子の人だといふのである。
 ○さ。や。かなる。小さい、小さくかはい。○具して。つれて、供につれて。○稻葉の露にそぼちつ。稻葉の露にぬれながら。稻が實のつて田中の路に垂れかぶさるやうになつてゐる、その露に著物を濡し、やつて行くといふ意。○分け行くほど。押分けて行くその間、分け行く道すがら。○えならず。何ともいへず、非常に好い音に。○吹きすさびたる。吹き興じてゐる。○あはれと聞き知るべき人。しみじみとその趣を聞き分けるべき人、月下の笛の音の妙なる趣を聞き分けるだけの人。○行かむかた知らまほしく。その人の行く先が知りたくて、「行かむ」は「行く」の婉曲技法。○惣門。正門、外構の第一の門。こゝは寺のさまといふ説もあるが、貴人の邸と見る方が自然だらう。貴人の邸には總門、四足門、中門といふ三門があつたものである。

榻にたてたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しかじかの宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや」といふ。

【通解】 その惣門の中に、臺に轆を載せた車が見える、それも都で見るとは珍らしく、目を引かれるやうな氣がして、下部に聞くと、何々の宮様がこの頃こゝに御出で遊ばしまして、御法會などおありなされるのでせうかといふ。

【文旨】 箱を吹く男の事は、そのまゝにして、今度はその人の這入つて行つた邸の情景描寫に轉ずる。いきなり「榻にたてたる車」と急轉して、而もそれが極めて自然に讀者をその情景に導いて行く。さうした車などは都では日目に映ずる事で何の珍らしげもないが、それすら斯うした場所では非常に珍らしい。都よりは目とまる心地の一句がさうした心理を簡潔に描寫し得てゐる。そして下人の言葉の中に、何々の宮様の法會を引出して來て、更に次

の轉化に入るべき素地を爲してゐる。

【語義】 ○榻。牛車の牛をはづした時に車の轆を載せておく臺。只置くと車が傾くからである。○たてたる。据ゑた、もたせた。榻に轆を載せて車がもたせてあるのをいふ。○目とまる心地。それに目とまるやうな心地。○下人。下部。その車のそばに控へてゐた下部だらう。○しかじかの宮。斯ういふ宮様。先方では名前をいうたのを、特にそれをあらはさずに書いた趣である。○おはします頃にて。おいでになる頃で、御滞在中で。此の頃こゝにおいでになつての意。○佛事。法會。説教法會などあつたのだらう。○さぶらふにや。おありなされるのでせうか。「にや」は「にやあらむ」の略で、軽い疑意を持つた推測の語である。

御堂の方に法師ども参りたり。夜寒の風にさそはれくる空薫物の匂も、身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の、追風用意など、人目なき山里ともいはず、心づかひしたり。

【通解】 御堂の方に法師たちが來てゐる。夜寒の風につれて、どこからともなく匂つて來る薫物の匂も身にしみるやうな氣がする。母屋の方から御堂の廊下へ通ふ女房の、衣の追風の心遣ひ——通るあとによい匂がするやうにと衣に香をたきこめた心掛けなど、斯うした見る人もない山里にも拘らず、よく心づかひをしてゐる。

【文旨】 更に一步、目をその邸の内部に移して見た所を敘してゐる。それも自分の動きは少しも書かずに、いきなり「御堂の方に」と轉じた所が面白い。「法師ども参りたり」の一句で、今法會が取り行はれる所だといふ趣を明かにした筆致も簡潔の妙を得て居る。それから空薫物といひ、女房の追風用意といひ、共にえもいはぬ物の匂に恍惚とした趣がその情景とよく調和する。

【語義】 ○御堂。佛殿。寢殿の外に御堂が設けてあつて、廊で寢堂と續いてゐる趣である。貴人の邸に御堂を設

ける事は珍しい事ではなかつた。○参りたり。参つてゐる。たりは「て居る」である、今来たといふではない。
 ○夜寒の風。秋の夜のうそ寒い風。夜寒は、秋の中頃、日中は暖かいが夜分はひやりとして寒さが身にしみるやうになるその頃の稱。○空薫物。どこからともなく匂つて来る香。○寢殿。正殿、母屋。○御堂の廊。御堂へ通じた廊下。○かよふ。通る、往つたり來たりする。○女房。女官。こゝは貴族の家の侍女。○追風用意。「追風」は人の行きすぎるあとの風。「用意」はその追風に特によい香の立つやうに心をつかつて著物に香をたきしめてゐるその心用ひをいふ。○人目なき。見る人もない。○山里ともいはず。山里だともいはず、山里であるにも拘はず。○心づかひしたり。心づかひをしてゐる、氣を使つてゐる。

心のまゝにしげれる秋の野らは、置きあまる露にうづもれて、蟲の音かごとがましく、遺水の音のどやかなり。都の空よりは、雲のゆききも早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。

【通解】 思ふがまゝに草の生ひ茂つた秋の野——とも見られる庭は、置き餘る程一杯におりてゐる露に埋つて、蟲の聲は泣くが如く訴ふるが如く、庭に引いてある小流れの水は如何にも閑寂な趣である。都の空よりは雲の往來も早いやうな氣がして、月が晴れたり曇つたりとんと定めがない。

【文旨】 更に目を轉じて、あたりを見まはし空を眺める。それも自分の動きを言はずに、いきなり「心のまゝにしげれる秋の野ら」と出た所が面白い。廣々とした、自然のまゝの庭の趣が眼前に浮ぶやうである。

【語義】 ○心のまゝに。思ふがまゝに。刈りもせず、踏みあらす人もなくて、草が心のまゝに、である。○秋の野ら。荒れた庭のさまをいふ。古今集秋上、遍昭の欲に「里は荒れて人はふりにし宿なれや、庭もまがきも秋の野らなる」○置きあまる露にうづもれて。置き場所もない程一杯におりた露に埋つて。○かごとがまし。かこちこと

をいふやうだ、何だか歎き怨んでゐるやうに聞える。○遣水。川水を堰き入れて、庭の面に流し遣つてある水。○定めがたし。定め難い、定めがない、忽ちの内に色々と變化する。

第四十五段

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に大きな榎のありければ、人、「榎の僧正」とぞいひける。この名しかるべからずとて、かの木を切られければ、「きりくひの僧正」といひけり。いよく腹立ちて、きりくひを掘りすてたりければ、その跡大きな堀にてありければ、「堀池の僧正」とぞいひける。

【通解】 從二位藤原公世の兄で、良覺僧正と申した人は、ごく怒りッぽい人であつた。坊のそばに大きな榎の木があつたので、人が「榎の僧正」といふ渾名をつけた。僧正は之を聞いて、こんな名は甚だ宜しくないというて、彼の榎の大木を切つて了はれた。所がその根が残つてゐたので、今度は「きりくひの僧正」というた。益々立腹してその切株を掘りすてたら、その跡が大きな堀になつたので、又今度は「堀池の僧正」というたのであつた。

【文旨】 渾名の面白い一例である。けり」といふ助動詞一法で、ぼつり／＼と文を切つて簡潔に話の筋を運んだ筆致が非常に面白い。傳説をそのまま筆録した趣で、續群書類從所載の仁和寺諸師年譜にはこの通りの渾名の話が西院大僧正信證の事として載つてゐる。

【語義】 ○公世の二位。從二位侍從藤原公世。○せうと。兄。兄人の音便。○良覺僧正。叡山の大僧正であつた人。○聞えしは。申した人は。「聞ゆ」は言ふの敬語。○腹あしき。おこりッぽい、やたらと腹を立てる。古文に「腹

あしきといふのは、腹のわるい、心よくなじの意ではない。その方は「腹黒し」といふ。○坊。僧房、僧の住む家。○しかるべからず。宜しからず、不都合なり。○きりくひ。切株。くひは杭。木を切つたあとに残つてゐる根をいふ。

第四十六段

柳原の邊に、強盜法印と號する僧ありけり。度々強盜にあひたる故に、この名をつけにけるとぞ。

【通解】 柳原の邊に、強盜法印と渾名された僧があつた。度々強盜にあつたので、世間でこの名をつけたのだといふ話だ。

【文旨】 これも渾名の面白い一例、而も前例と逆で、名と實と極端に相反したほゝあましい一例である。

【語義】 ○柳原。昔、京都の室町邊をいうた稱。○法印。最高の僧位。

第四十七段

ある人清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめく」といひもて行きたれば、「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、いらへもせず、なほいひ止まざりけるを、度々とはれて、うち腹だちて、「や、はなひたる時、かく呪はねば死ぬるなりと申せば、養君の、比叡の山に兒にておはしますが、たゞ今もやはなひ給はむと思へば、か

く申すぞかし」といひけり。ありがたき志なりけむかし。

【通解】 或人が清水へ參詣した所が、偶と道づれになつた、一人の年取つた尼があつて、道々「くさめく」といひく歩いて行くので、「尼さん、何をそなたにおつしやるのですか」と尋ねたけれど、それには返事もせず、なほも「くさめく」と言ひ止まなかつた。所が餘り度々「何ですか何ですか」と問はれて、少し腹を立てて、「えい、まあ、くしやみの出た時、斯うまじなひをしないと死ぬものだ」と申すので、私のおそだて申した若様の、比叡山に稚兒でおいでなされる方が、今もくしやみをなさうかと氣に掛るので、斯様に申すのですよ」と言つたのであつた。世にも珍らしい殊勝な志であつたといふべきであらう。

【文旨】 これも異聞を録し、特にその話の中の尼の殊勝な志を録したといふわけである。

【語義】 ○清水。京都の清水寺。有名な清水の觀音である。○行きつれたりけるが。道づれになつたのが。あとになり先になり同じやうに歩いてゐたのがで、「が」は上の「尼」と同格、即ち行きつれた所の尼がといふ主格。○くさめ。まじなひの言葉。拾芥抄にくしやみをした時のまじなひには「休息萬命急々如律令」といふとある。このクックマンミヤウをはやく唱へるのが「クサメ」といふやうになつたものだらう。○いひもて行き。いひく歩いて行き。○尼御前。尼さん。「御前」は女の稱呼に添へて呼ぶ敬語。○いらへ。答、返答。○うち腹だちて。一寸腹を立てて。「うち」は軽い働きをあらはす接頭語。○や。感動詞。呼び掛ける時驚いた時などに發する聲だが、こゝは少しづつ氣味で發した聲と見るべきである。○はなひたる。くしやみをする。鼻がかわくといふ義。○かく呪はねば。このやうに「くさめく」と呪はないと。○養君。自分が乳母になつて養育した若君。○兒。寺で召使ふ幼い童。○たゞ今もや。今も……かもしれぬ。「や」は疑問推測の語。○ありがたき。珍らしい、殊勝な。○志。主人思ひの志をいふ。

第四十八段

光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御をいだされて食はせられけり。さて食ひ散らしたる衝重を、御簾の中へさし入れて、まかり出でにけり。女房、「あなきたな。誰に取れとてか」など申しあはれければ、「有職のふるまひ、やんごとなき事なり」と、かへすがへす感ぜさせ給ひけるとぞ。

【通解】 光親卿が、上皇の最勝講の奉行を勤めて居つたのを、上皇の御前へ召されて、御膳部を出されて、食はせられた事があつた。さて卿は、食ひ散らした御三方を、そのまゝ御簾の中へさし入れて、退出して了つた。これを見て女官たちが、「あなきたない。一體誰に取れといふのでせう」と口々に申しあはれた所が、ひとり上皇は「故實に明るい人のする事は、誠にどうも大したものだ」と、繰返し繰返し御感賞遊ばされたといふ事である。

【文言】 兼好の故實趣味から面白い一例として書いてあるのだらう。その中に光親卿の時に取つての態度と、それを感賞し給うた上皇の御眼識とに敬服した心持を含んである事は言ふ迄もない。

【語義】 ○光親卿 權中納言藤原光親。後鳥羽上皇の寵遇を受けた人。○院 上皇。こゝは後鳥羽上皇だらう。○最勝講 宮中で毎年五月に五日間、最勝王經を講ぜられる法會の稱であるが、こゝは仙洞最勝講の事で臨時の御儀であらう。○奉行 その事務一切の指圖をする役。○さぶらひけるを 侍して居つたのを。○供御 天皇の上皇の御膳部。こゝは上皇の御膳部を賜はつたのである。○さて、そして、それを頂戴して。○食ひ散らしたる あれこれと少しづつ食べたの意。折り散らす、書き散らすなどの類例から見ても、無造作にさつさと食べたの意とする説

もあるが、「あなきたな」といふ女房の言葉から見ても、これは今日いふのと同じく、一寸食べて跡に食ひ残した趣と考へられる。○衝重 食物を載せる臺。方形の折敷(角盆のやうなもの)に臺を重ねたもの。白木の三方の類と思へばよい。○まかり出で 退出。○女房 院の御前に侍してある女官達。○取れとてか 下に「かゝるわざはし給ひけむ」とでも補つて見ればよく分る。「取れ」は「やる」の意で、つまりは「たべよ」といふ意。○有職のふるまひ 故實を心得てある者のする事。「有職」とだけで有職家の意に使つた例はいくらもある。○やんごとなき 尊い、立派な。斯うした振舞を何で「やんごとなき」とひどく褒められたか明かでないが、蓋し奉行といふ大切な役目があるので、取り急いで膳部を載せて、そのまゝ退出したが、時に取つての處置として如何にも其の當を得てゐる、といふのであらうか。

第四十九段

老きたりてはじめて道を行ぜむと待つことなけれ。ふるき頃、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ち此の世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれる事は知らるなれ。あやまりといふは他の事にあらず、速かにすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことを急ぎて、過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひあらむや。

【通解】 年を取つて後始めて佛道を行はうと待つてゐてはならぬ。古い暮は多くは少年で死んだ人である。思ひがけなく病氣になつて、忽ち此の世を去らうとする時にこそ、始めて自分の過去の過つてゐた事が知られるのである。過ちといふのは外の事ではない、速かに爲すべき事をゆつくりと棄ておき、棄ておいてもよい事を急いでや

つて、さうして今迄過して来た事が悔いられるのである。その時になつて後悔したとて何の甲斐があらう。
【文旨】 世は無常迅速なものだ、墓の主の多くは少年の人である、忽ち此の世の去らんとする時、いくら後悔しても追付かぬ、宜しく若い内に佛道の修行に思を致すがよい、といふのが此の一文の主旨である。

【語義】 ○道を行ぜむと。道を行はうと、佛道を修行しよう。○はからざるに。思ひもかけず、思ひ掛けなく。さういふ事は思つてもゐないのの意。○速かにすべき事。はやく爲すべき事。生死の一大事因縁を明かにして佛の道に精進する事をいふ。○ゆるくすべきこと。緩漫に、あとまはしにしてよい事。世間の俗事である。○その時臨終の時。

人はたゞ無常の身にせまりぬる事を、心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらば、などかこの世の濁もうすく、佛道を勤むる心もまめやかならざらむ。昔ありける聖は、人のきたりて自他の要事をいふとき、答へていはく、「今、火急の事ありて、既に朝夕にせまれり」とて、耳をふたぎ念佛して、終に往生を遂げたりと、禪林の十因にはべり。心戒といひける聖は、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、静かについひける事だになく、常はうづくまりてのみぞありける。

【通解】 人はたゞ無常が身に近く押し寄せて来てゐる事を、しつかりと心に掛けて、一寸の間も忘れてはならぬのである。さうしたらば、どうして浮世の利欲煩惱に迷ふ事も薄く、佛道を勤める心も忠實にならない事があらう。昔或聖人がゐたが、その聖人は、人が来てお互の大切な要件を話す時、答へて曰ふやう、「今、非常に急な用事があ

つて、もう朝夕に迫つてゐる」と曰うて、耳をふさいで念佛をして、終に極樂往生を遂げたと、禪林十因といふ書にあります。又、心戒というた聖人は、餘りにこの世の中のはかなくかりそめなものである事を考へて、靜に尻を据ゑて坐つてゐるといふ事さへなく、いつも蹲つてばかりゐたのであつた。

【文旨】 人は無常を觀じて専心佛道を行はなくてはならぬといつて、さうした聖僧の二つの例を掲げてゐるのである。

【語義】 ○無常。佛語で、一切萬物の生滅變轉して常住でないのをいふ。○ひしと。しつかりと。○つかのま。一寸の間、ほんのしばらくの間。○この世の濁。浮世の利欲に迷つて心の汚れてゐること。所謂煩惱である。○まめやかな。忠實、眞面目。○昔ありける。昔在つた、昔此の世にゐた。○聖。行僧。又一般に僧の敬稱にもいふ。○自他。おのれと他人と、こちらと先方と、相互の。○火急の事。ひどく急な事。こゝでは往生の一大事の意。○ふたぎで。塞いで。○往生。極樂往生。○禪林の十因。永觀律師の著した往生十因といふ書。禪林は律師の居た東山の永觀堂を一に禪林堂といふたからの稱。○心戒。平宗盛の子で、平家の滅後僧となつた人。○かりそめ。はかない、一時的な。○ついひける。尻をおろして安坐してゐるのをいふ。○常は。常に。「は」は「に」を強めた趣と考へられる。○うづくまりて。しゃがんで、中腰になつて。

第五十段

應長の頃、伊勢の國より、女の鬼になりたるをゐて上りたりといふ事ありて、その頃二十日ばかり、日ごとに京白川の人、鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺に参りたりし、今日は院へまゐるべし。たゞ今はそこ〜に」などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、虚言といふ

人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひやまず。

【通解】 應長の頃、伊勢の國から、女の鬼になつたのを連れて上京したといふ事があつて、其の頃二十日はかり、毎日々々京白川の人々は、鬼見に行くといつて無闇とそちこち出歩いてゐた。「昨日は西園寺へ参つたのであつた。今日はきつと上皇の御所へ参るだらう。今はどこそこに居る」など口々にいうてゐる。そのくせ正しく見たといふ人もなく、うそだといふ人もない。上も下もたゞ鬼の話で持ちきりである。

【文旨】 これも異聞を録した一例であるが、その不思議な出来事自體に興味を感じて筆録したと見るよりも、それにつけて都の人々が大さわぎをしたその馬鹿々々しい實狀を如實に描寫したと見るべきであらう。此の一節はこれこれの事があつたと、先づその大體を報告的に書いて次の情景描寫に入るべき素地をなしてゐるのである。

【語義】 ○應長。花園天皇の御代の年號。○女の鬼になりたるを。女が鬼に化したのを。嫉妬か何かで角が生えたともいふのだらう。○みて。率ゐて、引きつれて。○上りたり。都へ上つた、都へ上つて來てゐる。○京白川の人。京から白川邊へ掛けての人々。○出でまどふ。まご／＼と出歩いてゐる。○西園寺。洛北衣笠に藤原公經の營んだ第で、當時はこゝに入道前太政大臣實兼がゐた。○参りたりし。上つた。鬼が参上した、即ち鬼をお目に掛けに参つたといふのである。「し」は省略終止で、「しよ」といふやうに、幾分言外に餘情を含めた趣の語。○院。伏見上皇の御所。○そこ／＼に。どこそこに。○まさしく。随かに。○上下。高貴の人も下賤の人も。

その頃、東山より、安居院の邊へまかり侍りしに、四條よりかみさまの人、みな北をさして走る。一條室町に鬼ありと、のゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更

に通り得べうもあらず、たちこみたり。はやく跡なき事にあらざめりとて、人をやりて見するに、大方あへるものなし。暮るゝまでかく立ちさわぎて、はては鬨諍おこりて、あさましき事どもありけり。その頃おしなべて、二日三日人のわづらふこと侍りしをぞ、かの鬼の虚言は、このしるしを示すなりけりと、いふ人も侍りし。

【通解】 其の頃、自分は、東山から安居院の邊へ参りましたが、四條から上の方の人が、皆北を指して走つてゆく。そして一條室町に鬼が居るといふてさわいである。今出川の邊から眺めると、院の御棧敷の邊は、まるで通れさうもなく、人が立ちこんでゐる。これではもう全然作り事といふ事はないらしいと思つて、人をやつて見せた所が、一向に鬼に逢つた者はない。日の暮れる迄斯うして立ちさわいで、しまひには喧嘩が起つて、いやもう飛んでもない事が色々あつた。その頃一帶に、二三日世間の人のわづらふ事があつたが、それにつけて、あの鬼の流言は、この病氣の前兆を示すのだつたナ、といふ人も御座いました。

【文旨】 この節に入つて、世間の人の大さわぎから、結局それがたための話だつたといふ迄を詳悉してゐる。それがうそだといふにつけても、「大方あへるものなし」だけで片付けて、それからいきなり「かの鬼の虚言は」と他人の口を通して言はせた所が簡潔の妙を得てゐる。勿論その人の言葉を信ずるといふでもなく、それに深い寓意があるといふでもない。只耳にした所をそのまま筆録したといふ迄である。

【語義】 ○東山。洛東一帶の丘陵の總稱。○安居院。山城の愛宕郡にあつて、叡山の東坊竹林院の里坊であつた所。○まかり。行き、参り。○四條より上さまの人。四條の通りから上(北)の方の人。○一條室町。一條の室町。一條は大通り、室町はその小名。○のゝしりあへり。皆々言ひさわいでゐる。○今出川。一條東の洞院邊を北から

南へ流れる川。○見やれば。望むと、眺めると。○院の御棧敷。昔、一條大路に、上皇が賀茂祭を御見物なさる爲めの棧敷があつた、それをいふ。○得べう「得べく」の音便。○はやく。もとから、もとく。○跡なき事。あとかたもない事、でたらの作り事。○あらざめり。ないと見える、ないやうだ。○大方。丸で、ちつとも。大方は大體の意であるが、下が打消になると意味がもつとずつと強くなる。○闌諍。喧嘩、なぐり合ひの喧嘩。○あさきしき事ども。何ともいはずやうなき事が色々。怪我人などの出たのをいふ。○わづらふ。病氣する。○侍りしをぞ。「ぞ」は下文の「侍りし」の「し」に對する係詞。こゝの文趣を詳悉すれば、「二三日人々の煩ふ事があつた、それを指して、あの鬼のうそ話は、この前兆を示したものですネ」といふ人もあつた」といふのであらう。○しるし。前兆、兆候。

第五十一段

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられむとて、大井の土民におほせて、水車を作らせられけり。多くのあしをたまひて、數日にいとなみ出して、かけたりにけるに、おほかためぐらざりければ、とかく直しけれども、つひに廻らで、徒に立てりけり。さて宇治の里人を召して、こしらへさせければ、やすらかに結ひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水を汲み入るゝ事めでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やんごとなきものなり。

【通解】 龜山離宮の御池に、大井川の水をお引きにならうとして、大井の土地の者に仰せ付けて、水車を作らせられたのであつた。澤山の錢を下されて、數日掛りで骨を折つて拵へ上げて掛けた所が、さつぱり廻らないで、只

空しくぼつ立つてゐた。そこで今度は、水車の名所として知られた宇治の里の者を召して、拵へさせたら、何の苦もなく易々と作つて差上げたが、思ふやうにうまく廻つて、水を汲み入れる事が見事であつた。何事によらず其の道を得てゐるものは大したものだ。

【文旨】 水車が廻る廻らぬといふ平凡な而非常に面白い出来事を題材として「よろづにその道を知れるものはやんごとなきものなり」といふ一つの主張——といふよりも趣味觀を敘してゐるのである。兼好は成上りよりも家柄、悪達者の土場藝よりも専門の家の藝をよいとしてゐる。こゝもその主觀が好個の題材を見出した一例である。

【語義】 ○龜山殿。大覺寺の離宮で一に嵯峨院ともいふ、後嵯峨院御造業、龜山院御傳領。○御池。お庭の泉水。○大井川。源を丹波に發し嵯峨嵐山を過ぎて桂川となる川、それが龜山殿のそばを流れてゐたのである。○水をまかせられむとて。水を引かせられようとして「まかす」は水を引くといふ意のサ行下二段の動詞。○おほせて。仰せて、仰せつけて。○水車。水を汲み込むためのミツグルマ。米などを舂くスキシヤではない。○あし。錢。○いとなみ出して。骨を折つて作り上げて。○かけたりにけるに。その水車を掛けた所が。○おほかた。とんと、丸で、少しも、さつぱりの意。○とかく。あゝかうと、色々、様々に。○徒に立てりけり。空しく立つてゐたのであつた。徒に「は水車が廻らずに、即ち水車としての役に立たず空しくの意。○さて。○宇治。山城の名所で水車に名高い所。○やすらかに結ひて。雑作なく拵へて。造り上げた水車が無難だといふのでなくて、其の造る事が如何にも樂々したものだといふのである。「ゆふ」は拵へる意。○參らせたりけるが。差上げたが、お上げ申した。「拵へたが」といふのを敬體にした迄である。○水を汲み入るゝ事めでたかりけり。その水車が水を池に汲み入れる事が見事だつた。○よろづに。萬事に「に」は「につけて」の意。○やんごとなき。貴い。有難いものだ、立派なものだ、大したものだ、などいふ口語の思想と一致する。

第五十二段

仁和寺に、ある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うくおぼえて、ある時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、「年ごろ思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごと、山へのぼりしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも、先達はあらまほしきことなり。

【通解】 仁和寺にみた、或法師が、年とる迄石清水の八幡様を拜まなかつたので、それを氣掛りに思つて、或時思ひ立つて、たつた一人で、乗物にも乗らず徒歩で参詣したのであつた。そして極樂寺や高良などの末社だけを拜んで、山の上にある肝心の八幡様は拜まずに、これだけのものと心得て歸つて了つた。そして傍輩に向つて、「年來思つてゐた事を果しました。聞いてをつたものにも増して、誠に有難い事でした。それにしても参詣に来てゐた人が、皆山へ登つて行つたのは、何事があつたものか、私も行つて見たくは思つたが、神へ参るのが抑もの主意だと思つて、山までは見ないで歸つた」というたのであつた。一寸した事にも指導者はありたいものである。

【文旨】 前段を受けて、これも心得なき人の勝手な振舞が飛んだしくじりの因となるといふ事を面白く書いたのである。即ち「すこしの事にも先達はあらまほしきことなり」が、前段の「よづろに道を知れるものはやんごとなきものなり」と同工異曲の筆致で、この文の眼目を爲してゐる言葉である。そして最も人口に膾炙してゐた仁和寺と石清水とを點出して、如何にも眞面目くさつた、寧ろ莊重な調子で、愚にもつかぬ大間遠を老僧に遣らせておい、

て、さて軽くさら／＼と文を結んだ所に、滑稽描寫から軽い反省教訓に急轉した、一種言ひ難い妙味がある。

【語義】 ○仁和寺 山城の葛野郡花園村御室にある有名な寺。○ある法師 「或法師」と見て、上の「に」といふ助詞の中に「の」に於ける「にありし」の意を含めて見るがよい。「に」の一用法である。○石清水 有名な男山八幡宮。○心うくおぼえて つらく思つて。「心うく」は、残念に、氣掛りにといふ思想。○かちより 徒歩で。○極樂寺高良 共に男山の麓にあつて八幡宮の宮寺と攝社とである。○かばかりと心得て これだけと思つて。○かたへの人 傍輩。○あひて 相對して、向つての意。○年頃 年來、數年このかた。○聞きしにも過ぎて 尊くこそおはしけれ。話に聞いてゐた以上に誠に尊いくいらせられた。立派だ／＼と聞いてゐたが、どうして聞いてゐた以上に尊いくいらせられて有難く感じましたといふのである。この文の趣から考へて見ると、立派だ／＼と聞いてゐた八幡宮が實際参詣して見ると案外質素なものだ——ほんとの八幡様でなく末社を拜んだのだから——そこで、なるほど斯うしたお粗末なものを世人があれ程やかましくいふのかと思ふと、そこに一層の有難味を感じたといふ心持のやうに思はれる。○そも それにしても。○参りたる 参つてゐる、参詣に来てゐる。○何事かありけむ 何事があつたものか。○ゆかしかりしかど 行つて見たくはあつたが、「ゆかし」はもつと其の奥を究めたい、見たい、聞きたい、知りたい、心が引かれる、といふやうに、凡て追求的興味の起つて來る心的状態をいふ語。○本意 本來の精神、主意、本望。○先達 指導者、案内者。センダチともセンダツとも讀んでゐる。

第五十三段

これも仁和寺の法師、童の法師にならむとする名残とて、おの／＼遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおし

ひらめて、顔をさし入れて、舞ひ出でたるに、満座興に入ること限なし。しばしかなでて後、抜かむとするに、おほかた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。

【通解】これも仁和寺の坊さんの話、お稚児がいよく坊さんにならうとする別宴といふので、めいよく遊び興ずる事があつたが、その坊さんが酔つて興に乗じた擧句に、足つきの鼎を取つて、頭に被つた所が、少しきつてつかへるやうな具合であつたのを、無理に鼻を押し平めて、顔をその中へ突込んで、づうーッと座中へ舞つて出た。すると満座の人々は限なく興に入つて面白がつた。しばらく舞を舞つて後、それを抜かうとすると、どうしても抜けない。酒宴の興もさめて了つて、どうしたものかと一同途方に暮れた。

【文旨】前段に仁和寺の事を書いた序手に、もう一つに仁和寺に起つたへうきんな話を書いたのである。解釋の便宜上三節に分つたが、勿論これは全文一続きで、どこ迄も事の経過があるがまゝに書いて行つたといふに過ぎない。假に節を分けて言へば、こゝ迄が此の喜劇的悲劇の發端で、謂はゞ敍幕といふ所である。

【語義】○これも仁和寺の法師。一篇の總敍で、文法的にいへば、「酔ひて興に入るあまり」云々の主語と見てよからう。○童。ちこ、寺で召使はれる童。○法師にならむとする名残。僧にならむとするお別れ。童の間は髪を延ばしてゐる、それが成長して得度の式がすんで坊主になる時にはその髪を削り落して了ふ、そのお別れに宴を催して親しい人々を御馳走するのである。○おのゝ遊ぶ。一同酒宴を催して遊び興ずる。皆で藝盡しなどやるのをいふ。○酔ひて興に入るあまり。或一人の僧があつて、法師にならうとする其の人ではない。更に文法的にいへば、文初の「仁和寺の法師」が、この語の主語になると見て差支なからう。○足鼎。足の三本ある釜。○つまるやうにする。つかへるやうになるのを。鼻や耳が支へるやうになつてうまく這入らぬといふのである。○おしひらめて

ぐツと平たくべしやんこにして。おしは強め詞。○舞ひ出でたるに。座中に舞つて出た所が。○満座。一座の人は皆。○かなでて。舞つて。○おほかた。丸で、さつぱり、どうしても。○ことさめて。興がさめて。○いかはせむと惑ひけり。どうしたものかと當惑した。

とかくすれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らむとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、かなはで、すべき様なくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手をひき、杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら、人の怪み見ることに限なし。

【通解】彼これしてゐると、首のまはりか切れて、血が垂れ、只もう一杯に腫れ上つて、息もつまつたので、打割らうとしても、仲々たやすくは割れず、その叩くのがあたまたま響いてこらへられなかつたので、割りもならず、何とも手のつけやうが無くて、鼎の三足の角の上に、帷子をかけて、手を引き、杖をつかせて、京の醫者の所へつれて行つた所が、其の道々、不思議がつて人の見る事といつたらない。

【文旨】「三足なる」云々からが、この節——二幕目の中心で、その滑稽な姿が目に見えるやうである。はたでする事と其の當事者の事とを混淆して描寫してゐるが、斯ういふ事は文——殊に古文にはいくらかもある例である。

【語義】○とかくすれば。かれこれしてゐると、あゝ斯うし色々にすると。抜かうとして色々手を施して見るのをいふ。○首のまはりかけて。首の廻りが鼎ですれ切れたといふのを「缺けて」と大げさにいうたのである。廻りへ掛けてと考へては文の趣が出ない。○たゞ腫れに腫れみちて。只もう一杯に腫れ上つて。○息もつまりければ

鼎の中で息もつまつて苦しくなつたので。○たやすく割れず。容易に破れない。○響きて堪へがたかりければ。無理に打割らうとして叩くとそれががん／＼頭に響いてこらへられないので。手でも振つて響いて困るといふ仕打をして止めたのであらう、それを當事者の側に立つて「堪へがたかりければ」というたのである。○かなはで割る事が出来ないで。○三足なる角。彼つた鼎の三本の足の突き出てるのを「角」といつたのだ。○帷子。今は麻の單衣をいふが、當時は何に限らず裏の附かぬ、ひとへの著衣をいふ。○醫師のがり。醫者の許へ。○みて。率ゐて、引連れて。○道すがら。道々、途中。

醫師のもとにさし入りて、むかひ居たりけむありさま、さこそことやうなりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、また仁和寺へかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕上により居て、泣き悲めども、聞くらむとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやうは、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなか生きざらむ。たゞ力をたてて引き給へ」とて、薬のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるばかり引ききたるに、耳鼻かけうげながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

【通解】 醫者の所へずつと入つて、醫者と相對してゐたのだらうが、その有様はさぞまア珍妙なものだつたらう。何か物をいふのも、こもり聲に響いて聞き取れない。醫者が「こんな事は醫書にも見えず、師匠からの口傳の教もない」といふので、また仁和寺へ歸つて、親しい者や老母などが、枕許に集つて泣き悲んでも、當人にはそれが聞

えさうにも思はれない。斯うしてゐる内に、或者のいふのには、「よしや耳や鼻は成程ちぎれてなくなるにしても、一命だけはどうして取りとめられぬ事があらう。たゞ力一杯引いて御覽なさい」といふので、薬しべを首のまはりにさし込んで、鐵を距たらしめておいて、首もちぎれる程引いた所が、耳や鼻はもげて穴になりながら抜けたのであつた。斯うしてやつとあぶない一命を拾つて、久しくわづらつてゐたのであつた。

【文旨】 話がよい／＼佳境に入る。「醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけむありさまこそことやうなりけめ」といふ想像の文句を使つて、一寸低徊しておいて、それから直ちに又直接描寫の形を取つて、「さる事は書にも見えず、傳へたる教もなし」などと、眞面目くさつた勿體ぶつた醫者の言葉の直説敘法で書いた所が、實にこの一文のクライマックスである。終幕の悲歎場も實に要領よく描き出されてゐる。

【語義】 ○さし入りて。ずつと這入つて行つて。○むかひ居たりけむありさま。相對坐したらうその有様。「けむ」は過去を推測する語。○さこそ。さぞまア。○ことやう。異様、奇體な有様。○くゞもり聲。こもつて不分明な聲。鼎の中にもつて外からでは何をいふやら分らぬ聲といふ意。○かゝる事は書にも見えず。こんな事(こんな場合の療法)については醫書にも見えない、本にも何とも書いてない。○傳へたる教。師匠からの口傳の教。或は「一家相傳の秘法とても御座らぬ」といふ口吻。○枕上。枕もと。○聞くらむとも覺えず。聞くだらうとも思はれぬ。それが聞えようとも思はれぬの意。鼎はかぶつてゐるし、それに意識も既に潤濁して、人々の悲歎など當人の耳に入りさうにもないといふのである。○などか生きざらむ。どうして生きたからう、必ず一命は取止めるに違ひない。「などか」は反語。○力をたてて。うんと力を出して、力一杯。○薬のしべ。薬の穂の心、わらのみご。○まはりにさし入れて。首と鼎と相接してゐるそのまはりに差し込んで。○かねを隔てて。鼎の鐵と首とびつたり接してゐるのを、わらしべで其の間が隔たるやうにして、の意。單に「金の上から」と見ては表現の趣に副はぬやうだ。○ちぎるばかり。ちぎれる程に。○耳鼻かけうげながら。耳や鼻がもげて穴のあいたやうになりながら。「うげ」は「穿

ぐ」といふ下二段の動詞で、穴のあく意。○からき命をうけて。危ふい一命を拾つて、あふなく命拾ひをして。

第五十四段

御室にいみじき兒のありけるを、いかで誘ひ出して遊ばむとたくらむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流の破籠やうのもの、ねんごろにいとなみ出でて、箱風情のものにしたゝめ入れて、雙の岡の便よき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなど、思ひよらぬさまにして、御所へ参りて、兒をそゝのかし出でにけり。うれしと思ひて、こゝかしこ遊びめぐりて、ありつる苔の筵になみみて、「いたうこそこうじにたれ。あはれ紅葉を焼かむ人もがな。しるしあらむ僧たち、いのり試みられよ」などいひしるひて、埋みつる木のもとに向きて、數珠おしすり、印ことごとしく結びいでなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つやつやものも見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく、山をあされども、無かりけり。埋みけるを人の見おきて、御所へ参りたる間に、盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞きにくゝいさかひ腹だちて歸りにけり。あまり興あらむとすることは、必ずあいなきものなり。

【通解】 仁和寺にすてきに可愛らしいちこがあつたが、何とかしてそのちこをさそひ出して楽しく遊ばうとたくらんだ法師共があつて、藝のうまい遊藝僧達などを仲間に入れて、洒落れた破籠のやうなものを殊に念入に拵へて、

箱みたいなものにちやんと入れ込んで、それを雙の岡の具合のよい所に埋めておいて、其の上に紅葉を散らし掛けたりなどして、一寸人が氣がつかないやうな風にしておいて、それから御所へ参つて、そのちこをそゝのかして、出掛けたのであつた。一同うまく行つたと嬉しく思つて、あちらこちら遊び廻つて、それから例の雙の岡の苔の生えた閑静な所に並んで腰をおろして、「いやどうもすつかりくたびれて了つた。あゝ誰か紅葉をたい一杯つけてくれる人があるといゝなア。靈驗あらたかな僧たち、一つ祈り出して見られよ」などとお互にさう言ひ合つて、巖に埋めておいた木の下に向つて、數珠をおしすり、印を事々しく結んだりなどして、仰々しい眞似をして、木の葉をかきのけて見た所が、さつぱり何も見えない。さては場所が違つたのであらうかと、掘らぬ所もなく、山をあさり廻つたが、たうとう無つた。埋めた所を見ておいて、僧達が御所へ参つたすきに、盗んだのであつた。坊主どもは面目を失つて、何といはう言葉もなく、聞き苦しいひ争ひ、腹を立てて歸つて了つたのであつた。餘りに物事を面白くやらうとすると、何でもこの通り必ず苦々しい事になるものだ。

【文旨】 序手に今一つ仁和寺の話、これは又前段とは一層念入りで、由來風流を解せぬものが、殊更に風流がつて大いに失敗に終るといふ筋。前段は興に乗じた自然の勢で仕出かした悲喜劇であるが、これは大いにたくんで入念にしくじつた滑稽劇である。「いたう困じにたれ」云々と、如何にも風流さうな坊主の言葉を點出し、それから「印ことごとしく」云々とさうした坊さんの業々しい祈りの様を如實に書いて、「つやく」ものも見えず」と軽く結んだ邊が此の文のクライマックスである。「あまりに興あらむとすることは必ずあいなきものなり」は、常に兼好の抱いてゐる一つの主張——趣味的感想である。教訓の詞といふやうに重く見るべきではないが、吾々としても大いに學ぶべき所である。それにしても此の文の中心は、どこ迄も斯うした喜劇的話柄を面白く描寫した所にある。

【語義】 ○御室。仁和寺をいふ。○いみじき。すぐれた、立派な。こゝは非常に美しく愛らしいといふ意。○いかで。どうか、何卒。こゝは願望の意で反語ではない。○たくむ。巧む、もくろむ。○能ある。藝能のある、藝のかで。

上手な。○遊び法師。遊藝僧、歌舞音楽などを専門とする僧。○かたらひで。語らつて、話し込んで自分の仲間を引き入れての意。○風流の破籠やうのもの。洒落た破籠のやうなもの。○破籠は破子とも書いて、飲食物を入れる器。内に仕切りがあつて半分に割つたやうな具合になつてゐる。やうのものはやうなもので、ほんやりとそれを指した趣の語である。○ねんごろにいとなみ出でて。念入りに苦勞して拵へて。○箱風情のもの。箱のやうなもの。○したゝめ入れて。ちやんと収めて。○雙の岡。山城國葛野郡に在つて仁和寺に近い丘陵。○便よき所。具合のよい所。静かでゆつくり遊ぶにぐあひのよい所の意。○うづみおきて。埋めておいて。○紅葉ちらし。かけなど紅葉を散らしかけたりなどして。○思ひよらぬさまにして。氣がつかぬやうにして。こんな所にそんなものが埋めてあらうとは思ひもよらぬやうにしての意。○御所。御室の御所即ち仁和寺。仁和寺は代々親王が相承けて法務をお執り遊ばされたので、世に「御所」とも稱してゐたのである。○そのかし。さそひ動かして。○うれしと思ひて。いよ／＼目的が達したので坊主達一同が嬉しく思つて。○ありつる。前に在つた——こゝで言へば前に埋めておいたあのの意。○苔の筵。苔の一面に生えてゐる所。閑静な場所といふ心持の表現と考へられる。○なみみて。並んで坐つて。○いたうこそ。ひどくどうも。いたうは「いたく」の音便。「こそ」は強め詞。○こうじにたれ。くたびれて了つた。「こうず」は「困ず」の音便で、こまる、閉口するといふのが語の原義。○紅葉を焼かむ人も。な。紅葉を焼かう人があつてほしい。白樂天の有名な詩句に『林間燵酒燒紅葉石上題詩拂綠苔』といふのがある。それを取つて、誰か紅葉を焼いて酒の潤をつけて應める風流人はいかなアというたのである。○しるし。あらむ僧たち。加持祈禱の靈驗あらう僧達。「しるし」は靈驗の意。「あらむ」は「ある」の婉曲敘法。○いひしろひて。お互に言ひ合つて。「しろふ」は他の動詞に添つて、互にその働きをする意をあらはす語。○印ごとごとしく結びいでなどして。仰山に印を結んだりなどして。「印を結ぶ」といふのは、眞言宗の祕法で、指で色々の形象を拵へて、呪文を唱へて觀想するのをいふ。○いらなくふるまひで。大さうらしく振舞つて。「いらなく」は如何にも業々しく、

事々しく、大さうらしくの意。○つや／＼。ちつとも、丸つきり。○あされども。尋ねもとめたけれども。○言の葉なくて。言葉もなく。きまり悪く面目なくて言ひわけの言葉も出ないといふ意。○聞きにく。いさかひ腹だちで。聞き苦しく言ひ争ひ腹を立てて。「いさかふ」は、言ひ争ふ、喧嘩口論する意。○あいなき。愛なき。面白くない、つまらぬ、苦々しい、事はしだの意。

第五十五段

家のつくりやうは、夏を主とするべし。冬はいかなる所にも住まる。暑き頃わろき住ひは堪へがたきことなり。深き水は涼しげなし。浅くて流れたる、遙かに涼し。こまかなるものを見るに、遺戸は葺の間よりもあかし。天井の高きは、冬寒く、燈くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るもおもしろく、よろづの用にも立ちてよしとぞ、人のさだめあひ侍りし。

【通解】家の造り方は、夏を主とするかよい。冬はどんな所にも住んでゐられる。暑い頃よくない住ひは堪へ難い事だ。庭に遣水を造るのにも、深い水はどろも涼しげがない。浅くてチヨロ／＼と流れてゐる方が、ずつと涼しい。細かいものを見るのに、引戸の方が葺の間よりもあかるい。天井の高いのは、冬寒く、あかりが暗い。凡て家の普請は定つた用のない所を拵へてあるのが、見た目も面白く、何かの用にも立つてよいと、人々が論評しあつた事でありました。

【文旨】家の造りやうについて、作者の好みを述べてゐるのである。「浅くて流れたる」といひ、「造作は用なき所を造りたる」といひ、それが凡て兼好の日頃の趣味である。文末に「人のさだめ合ひ侍りし」とある、その詞、即

ち「とぞ」が受けるクォーテーションはどこ迄か、文の讀み出しの邊は一向それらしくないから、どうやら「造作は」云々の一句だけのやうにも取れるが、もと／＼この文は、作者自身の考をずん／＼と書いて行つて、おしまひになつてそれを一寸軽くそらして、他人のいうた事のやうにしたものと見るべきである。

【語義】○むねとすべし。主とすべし。○こまかなるものを見るに。細かい書き物などを見るのに。○遣戸。引戸。左右に引違へて開閉する戸。○葎の間。葎のついてゐる部屋。葎は格子の裏に板を張つた様なもの、からりと開く事が出来る遣戸よりは此の方が暗い譯である。○あかし。あかるい。○深き水・淺き水。庭の遣水の引き方についていうたのである。○造作。普請。この語は、今日いふのと違つて、この頃までは家の建築主體の稱であつた。○用なき所をつくりたる。これ／＼に使ふべきものと定まつた所、即ち建築上是非共造るべき所以外で、定つた用途の無い部分をつつたのをいふ。○よろづの用にも立ちて。様々の役にも立つて。○さだめあひ。評し合ひ。品定めしで、論評といふ語に當る。

第五十六段

久しく隔たりて逢ひたる人の、わが方にありつる事、かず／＼に残りなく語りつゞくるこそあいなけれ。へだてなく馴れぬる人も、程へて見るは、恥かしからぬかは。

【通解】久しく間をおいて久しぶりで逢つた人が、自分の方にあつた事を、あれもこれもと残りなく語りつゞけるのは實にいやなものだ。隔てなく馴れきつてゐる人でも、程たつて逢へば、どうして氣のおけない事があらう。必ず多少の遠慮はあるべきものだ。

【文旨】世間にありがちの、あげすけとした態度を擧げて、趣味の上からそれをひどく厭つて書いたのである。全文を三節に分けて見ると、この一節は、どんな親しい仲の人でも、しばらくぶりであへば多少の氣兼ねはある筈、それを臆面もなく、自分勝手の事ばかり語りつゞけるのは實に不快だ、といふのである。

【語義】○かず／＼に。何もかも、あれもこれもと。○あいなけれ。面白くない、興がない。○程へて見るは。程たつて再び面會する時は。○恥しからぬかは。恥しくなからうや、恥しい。かはは反語。先方に對して何となく氣恥しい感じがするといふのである。

つぎさまの人は、あからさまに立ち出でて、興ありつる事とて、息もつきあへず語り興するぞかし。よき人の物がたりするは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出でて、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。

【通解】下さまの人は、一寸そこらへ出掛けても、面白かつた事だというて、息もつかずに語り興するものだ。よい人の話をするのは、人が大勢居ても、その中の一人に向つて話すのを、自然と他の人も聞くのである。之に反して、つまらぬ人は、誰といふ相手もなく、多人數の中へ出しやばつて、まざ／＼と目に見る事のやうに語り立てると、聞く者が皆一所になつてがや／＼と笑ひ騒ぐ、いやもう實に騒々しい。

【文旨】下品な人と上品な人の話しぶりを、如實に、如何にも面白く描寫してゐる。日常我々の見聞する事實だが、さてこれだけ要領よく、委曲に描寫されて見ると、成程なアと今更のやうに感歎もされよう。

【語義】○つぎさまの人。下さまの人、下層の人。○あからさまに。つい一寸、かりそめに。○立ち出でて。外出して來ても。○興ありつる事とて。面白味のあつた事だというて。けふありつるとなつた本があるために「今日ありつる」と解する説もあるが、それはいけない。それは假名遣の混亂によるもので、現に「語りけふするぞかし」とした本もある位だから、さういふ事に拘泥すべきではない。○息もつきあへず。息もつききれず、息をつく間もなく、立てつづけに。○語り興ずるぞかし。話し興ずるものだ。かしは、丁寧に指し示していふ語。○よき人。身分のよい、上品な、ものの分つた人。○あまたあれど。人が大勢居つても。○よからぬ人。身分のよくない人、つまらぬ下品な人。○誰ともなく。誰を相手に話すともなく。○うち出でて。のこくと出しやばつて。まけてと解する説もあるが、こにはしつくりしない。○見る事のやうに。目の前に見る事のやうに。○語りなせば。話し立てると。○皆同じく。聞く人が皆一所に。○笑ひのゝしる。アハくと大聲を立てて笑ひ騒ぐ。○らうがはし。亂れがはしい。亂がはし」の音便で、亂雑だ、騒々しいの意。

をかしき事をいひても、いたく興ぜぬと、興なき事をいひても、よく笑ふにぞ、品の程はかられぬべき。人のみさまのよしあし、才ある人は、その事など定めあへるに、おのが身にひきかけていひ出でたる、いとわびし。

【通解】面白い事をいつても、それを聞いてひどく笑ひ興じないのと、面白くもない事をいつても、それを聞いてよく笑ふのとによつて、種姓の高下はすつかり推測されよう。人の様子のよしあしを批評し、又學問のある人については、その學問の事などを評し合つてゐる場合に、それを自分の身に引き當てて、自分を引き合に出していつてゐるのは、實にやりきれない。

【文旨】この節は、更に分ければ二つになる。「をかしき事……はかられぬべき」迄は、面白い事を聞いてもそんなに興じないと、愚にもつかぬ事にもえへらく、と笑ふのとで種姓の高下がすぐ分るといふ事、それから終りまでは、人を批評する場合に、すぐと自分を引合に出して、「私なら斯うくだ」といふ、それは實にいやだといふのである。兼好はどこ迄もあけすけとした圖々しい態度を厭つて、靜かにつましましやかにしてゐる事を喜んだのである。そこにも吾々の大いに學ぶべきものが見出される。

【語義】○をかしき事。面白い事。○いたく興ぜぬ。ひどく面白がらぬ、そんなに無暗と面白がらぬ。○笑ふにぞ。笑ふのによつて。にぞは「によりてぞ」の意。○品の程。氏種姓の高下。○はかられぬべき。推し量り得べきだ。「られ」は可能(デキル)の意。○みさま。様子、見様の意、目に見える様子である。○才ある人は。學問のある人については、「才」は學問。この文脈は、

人のみさまのよしあし
才ある人はその(才ノ)事

など定めあへるに
となるのである。「學問のある人たちの集まつた場合などは學問の方面の優劣などを」と解した書もあるが、原文そのものの表現はさうは取れない。○定めあへるに。お互に評し合つてゐる場合に。○おのが身にひきかけて。自分の身に引き掛けて。自分と比較して、自分を引き合ひに出しての意。○いひ出でたる。いうたのは。その評言を發表したのはの意。○わびし。いやだ。不快でたまらぬ、やりきれないの意。

第五十七段

人のかたり出でたる歌物語の、歌のわるきこそ本意なけれ。すこしその道知らむ人は、いみじと

思ひては語らじ。すべていとも知らぬ道の物がたりしたる、かたはらいたく、聞きにくし。

【通解】 人が歌に關する話をする時、肝心な其の歌のよくないのは實になさけないものだ。少し歌の道を得てゐる人だつたら、さういふよくない歌を立派なものだと思つて話しはすまい。何によらず、餘りよくも知らない道の話をしてゐるのは、傍で聞いてもはら／＼するやうで、聞きにくいものだ。

【文旨】 歌物語を例に取つて、すべていとも知らぬ道の物がたりしたのは聞きにくいものだというたので、簡單ながらも、兼好の好みの端的に窺はれる一つであり、吾々の大いに心すべき事でもある。

【語義】 ○歌物語。歌に關する物語。歌についての逸話美談の類。○本意なけれ。不本意だ、つまりぬ、なさけない。それを聞くとがっかりしてすふといふ思想。○その道知らむ人は。その道得心得て居るやうな人は。知らむは知るの婉曲技法。○いみじと思ひては語らじ。立派だと思つて話しはすまい。うまいと思はないから従つて人に喋々と語りもしないといふ意だらう。○いとも知らぬ。あまりよくも知らぬ。○かたはらいたく。はたで聞いてもはら／＼するやうで。

第五十八段

道心あらば、住む所にしもよらじ。家にあり、人に交るとも、後世を願はむに難かるべきかはといふは、更に後世知らぬ人なり。げには、この世をはかなみ、必ず生死を出でむと思はむに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家を顧みるいなみのいさましからむ。心は縁にひかれて

移るものなれば、靜かならでは道は行じがたし。

【通解】 求道の精神があるなら、どこに住まうと構ふまい。在俗のまゝで居り、世人と交つてゐても、後世を願ふのに何の難い事があらう、といふのは、一向に極樂往生の道を解しない人である。實際のところ、この世をはかなく思ひ、必ず生死の境を超越しようと思ふならば、何の面白があつて、朝夕君に仕へ、營々として家事を顧みるやうな事に氣が進まうや。心は環境に引かれて移るものだから、靜かな境地に居なくては佛道は修め難いものである。

【文旨】 佛道修行の第一義は俗縁を解脱するにあるといふのである。何、道心さへあればよい譯で、必ずしも家を出で世を通れる必要はない」といふ、世の人の言ひ勝ちな言葉を點出して、さういふ人は「更に後世知らぬ人なり」と斷じ、ほんとに無常を觀じ、後世を願ふ人には、てんでそんな考は起らぬ筈。由來人の心は環境に支配されるものだから、道を行ぜんとする者は、是非とも靜かに世を離れてゐなくては駄目だといふのである。

【語義】 ○道心。菩提心と同義で、求道の心、佛果菩提を求める心。○住む所にしもよらじ。何も住む所によりはすまい。○しもは強勢の辭。どこに住んでゐても構ふまいの意。○家にあり人に交るとも。世を通れたりせずに、自分の家に妻子眷族と共に居り、世間の人と交際してゐても。○後世を願はむに。來世の安樂を願ふのに。「後世」は來世、未來、後の世、即ち極樂往生をいふ。○難かるべきかは。むづかしからうや、決してむづかしくはない。○更に。一向、少しも。○げには。實際、ほんとに。「は」は強め詞「ほんとうの事をいへば」といふ解はこの語感にしつくりしない。○はかなみ。はかなしと思ふ。世の無常を觀するの意。○生死を出でむと思はむに。生死の境を出離しようと思つたならば。○何の興ありてか。何の面白があつてか。○家を顧る。我が家を顧みる。家事を執り、妻子眷族を養ふ、それ等の凡てを指す。○いとなみ。仕事、それについて營み爲す事。○いさましからむ。

心が進まうや、氣が乗らうや。上の「興ありてか」と呼應して反語になつてゐる。○心は縁にひかれて移る。心は外界の事情に引かれて移りかはる。心は環境次第でどうともなるものだといふ意。○静かならでは、静でなくては。外界の諸縁を離れてひとり静かな境界に居なくてはの意。○道は行じがたし。道は行ひ難い、佛道を修め行ふ事は出来ない。

そのうつはもの昔の人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ、嵐をふせぐよすがなくては、あらぬぬわざなれば、おのづから世を食るに似たることも、便にふればなどか無からむ。さればとて、「そむけるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てし」などいはむは、むげのことなり。さすがに一たび道に入りて、世をいとむ人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人のつひえをなさむ。求むる所はやすく、その心早く足りぬべし。形にはづる所もあれば、さはいへど、悪にはうとく、善には近づくことのみぞ多き。人と生れたらむしるしには、いかにもして世を通れむ事こそあらまほしけれ。ひとへに食ることをつとめて、菩提に赴かざらむは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。

【通解】 その器量が昔の人に及ばず、山林に隠遁しても、やはり飢を凌ぎ、寒さを防ぐだけの手立てがなくては、居られない事であるから、自然慾はつたやうな事も、時に觸れては無い譯にはゆかない。さればというて、「それで

は世を通れた甲斐がない。そんな位なら何で世を捨てたのだ」などといはうのは無茶な事だ。何といつても一たび佛道に入つて、世を厭はう人は、よしや欲望があつても、それは世に勢力を張つてゐる人の貪欲の多いのに似よう筈はない。紙の夜具、麻の衣、一鉢の食事、藜の羹、といふ位のもが、どれだけ人の費えにならう。求める所は容易で、その心はすぐと満足するに違ひない。圓頂黒衣といふ自分の形に對して恥ぢ憤む所もあるから、何といつても、悪には遠ざかり、善にはどうしても近づく事が多い。苟も人と生れたしるしには、どうかして世を離れる事がありたいものだ。只一途に慾はる事を勉めて、佛道の正しい悟に進まないやうな者は、よろづの畜類と變つた所がないといふものだらう。

【文旨】 前節を受けて、どこ迄も遁世入道の必要を高調してゐる。そして「背けるかひなし。さばかりならばなじかは捨てし」といふ世人の非難攻撃を「むげの事なり」と斷じて、いくら隠遁者でも、雪の降る日は寒くこそあれ、「飢をたすけ嵐をふせぐよすがなくてはあらぬぬわざ」だから、時には「世を食るに似たることも」ありはする、それは止むを得ぬが、さればとてその求める所は「紙の衾、麻の衣」云々の類に過ぎない。世に幅を利かせてゐる連中のそれとは雲泥の差だ。それに又「形にはづる所も」あるから、何といつても善い方へ善い方へと近づいて行く。斯う考へて見れば、どうしても世を通れなくては人と生れた甲斐がない、貪欲一徹では畜類と分つ所がないといふのである。

【語義】 ○うつはもの。器量。人の人物才幹をいふ。○山林に入りても。世を遁れて山林の中にかくれても。○飢をたすけ。腹のへつたのを救ひ。○嵐をふせぐ。風を防ぐ。寒さを防ぐ意。○よすが。よるべ、たより、てだて。○あらぬぬわざ。在り得ない事、居られない事。○世を食る。世間の慾を逞しくする。○便にふれば。時宜によつては、場合によつては。○さればとて。さうあるからというて。そのやうに世を食るに似た事が間々あるからというての意。○背けるかひなし。世を背いた甲斐がない。○さばかりならば。それほどならば、そんな位ならば。

○な。じ。か。は。捨。て。し。何。で。捨。て。た。か。は。は。反。語。で。な。く。疑。問。の。辭。で。あ。る。こ。は。世。人。の。詰。問。的。語。調。を。そ。の。ま。ま。寫。し。た。の。で。あ。る。○む。げ。の。事。な。り。一。概。な。事。だ。丸。で。無。茶。苦。茶。な。言。ひ。條。だ。の。意。○さ。ず。が。に。そ。れ。で。も。や。は。り。何。と。い。う。て。も。や。は。り。上。の。お。の。づ。か。ら。…。な。ど。か。無。か。ら。む。を。承。け。て。抑。揚。的。に。い。う。た。詞。○た。と。ひ。望。あ。り。と。も。よ。し。ん。ば。欲。望。が。あ。る。と。し。て。も。○勢。あ。る。人。世。に。權。勢。の。あ。る。人。幅。を。利。か。し。て。あ。る。人。の。意。○似。る。べ。か。ら。ず。似。る。筈。は。な。い。決。し。て。似。て。は。あ。ら。な。い。○紙。の。衾。紙。で。こ。し。ら。へ。た。夜。具。「衾」は。方。形。の。夜。具。の。こ。と。で。今。日。の。掛。布。團。に。當。る。も。の。○麻。の。衣。麻。の。法。衣。僧。侶。の。著。る。麻。布。で。仕。立。て。た。衣。で。法。衣。と。し。て。最。も。質。素。な。も。の。○一。鉢。の。ま。う。け。鉢。一。杯。の。食。事。「ま。う。け」は。食。物。食。事。の。用。意。○藜。の。あ。つ。も。の。藜。と。い。ふ。草。の。吸。ひ。物。粗。末。な。食。物。を。い。ふ。「あ。つ。も。の」は。熱。物。の。義。で。吸。ひ。物。汁。を。い。ふ。○い。く。ば。く。か。人。の。つ。ひ。え。を。な。さ。む。ど。れ。だ。け。人。の。費。え。を。な。さ。う。い。く。ら。も。人。に。費。用。を。掛。け。る。譯。で。は。な。い。の。意。○求。む。る。所。は。や。す。く。求。め。る。所。は。手。輕。で。「や。す。く」は。簡。易。單。純。の。意。○そ。の。心。早。く。足。り。ぬ。べ。し。そ。の。心。は。直。ち。に。滿。足。し。て。了。は。う。求。め。る。所。が。單。純。で。そ。の。單。純。な。物。が。得。ら。れ。ば。そ。れ。で。心。は。直。ち。に。滿。足。す。る。と。い。ふ。意。○形。に。は。づ。る。自。分。の。形。に。對。し。て。恥。ぢ。る。頭。を。丸。め。て。身。に。墨。染。の。衣。を。纏。ふ。さ。う。し。た。自。分。の。形。を。見。て。は。さ。ず。が。に。恥。し。く。て。惡。い。事。は。出。來。に。く。い。と。い。ふ。意。○さ。は。い。へ。ど。さ。う。は。い。つ。て。も。何。と。い。つ。て。も。○う。と。く。疎。々。し。く。遠。ざ。か。つ。て。の。意。○近。づ。く。事。の。み。ぞ。多。き。ど。う。し。て。も。近。づ。く。事。が。多。い。こ。の。み。ぞ。は。強。め。の。語。○し。る。し。に。は。甲。斐。に。は。○い。か。に。も。し。て。何。と。か。し。て。是。非。と。も。い。ふ。に。近。い。思。想。○あ。ら。ま。ほ。し。け。れ。あ。り。たい。望。ま。し。い。○苦。提。正。覺。と。譯。す。る。佛。教。上。の。正。し。い。悟。○畜。類。畜。生。と。い。ふ。と。同。義。で。獸。類。の。總。稱。○か。は。る。所。あ。る。ま。じ。く。や。か。は。る。所。が。あ。る。ま。い。變。り。が。な。い。と。い。ふ。も。の。だ。ら。う。ま。じ。く。や。は。下。に。あ。ら。む。の。略。さ。れ。た。形。

第五十九段

大事を思ひたむ人は、さりがたき心にかゝらむことの本意を遂げずして、さながら棄つべきな

り。「しばしこの事はてて、おなじくは彼の事沙汰しおきて、しかじかの事、人の嘲やあらむ、行末難なくしたゝめ設けて、年ごろもあればこそあれ、その事待たむほどならじ、物さわがしからぬやうに」など思はむには、えさらぬ事のみいとゞかさなりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、すこし心あるきは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。

【通解】 出家入道の一大事を思ひ立たうとする人は、棄て難い、心にかゝるやうな事の素意を遂げないで、そつくりそのまゝ棄てるべきである。「まアこの事をしてつて、同じ事なら彼の事も處置をつけておいて、それから斯の事は、人の嘲があるかもしれぬから、將來困らぬやうにちやんとしておいて、年來も斯うして居ればこそ居たものを、それ等の事を待つのがどれほど掛るといふでもあるまい、あわてくさつた風でないやうに、心靜かに思ひ立たう」などと考へて居た日には、避けるに避けられぬ事ばかり層一層重なつて、事のなくなる際限もなく、いよいよ一大事を思ひ立つといふ日もあらう筈はない。大體世間の人を見るに、少し考へのあるといふ側の連中は、皆斯うした計畫立てで其の一生は過ぐるやうである。

【文旨】 前段を承けて「大事を思ひたむ人」というただのだから、勿論佛道悟入の一大事を指したものと見るべきである。然しその中には一般修養の意味も籠められよう。少くも此の文を我々が何か斯うと思ひ立つた時のはかない自己辯解を描寫し、今に／＼で一生を終る其の間の心理を如實に表現したものとして見る時、端的にそこに貴い教訓が見出されるであらう。

【語義】 ○大事を思ひたむ人は 一大事を思ひ立たうとする人は。この文の表面の意味は、佛家の所謂大事で

平たくいへば佛道に入つて世の俗塵を脱れむとする事を指したものである。○さりがたき。避け難き。棄てるに棄てられぬ、のくにかれぬの意。

さりがたき
心にかゝらむ 事の本意を

といふ對立形容詞の格である。○心にかゝらむことの本意を遂げずして。氣にかゝるやうな事の本意を遂げないで。これだけは是非なくてはならぬといふ事の望を遂げずに乗せて了へといふ意。○さながら。そつくりそのまゝ。○しばしこの事はして。まア一寸この事をしてつて。下に「こそ思ひ立たため」と補へば思想がはつきりする。この句以下の文脈をやゝ嚴密に立てて見ると、

しばしこの事はして

おなじくは彼の事沙汰しおきて

しかしかの事人の嘲やあらむ行末難なくしたため設けて

物さわがしからぬやうに(コソ思ヒ立タメ)

斯うなる。「」の間は二つの挿入句と見るとよく分る。斯うして見ると「その事」は結局上の三つ——勿論假想的に例示した其の三つを受けて、それらの事をいうたものとなる。○おなじくは彼の事沙汰しおきて。同じ事ならあゝの事も處置をつけておいて「おなじくは」は、同じ事なら、どうせするなら一層の事の意。「沙汰し」はこゝでは處置しの意。處置をつける、きまりをつけるなどいふに當る。○しかしかの事。斯く／＼の事。或事を一般的に假示的にいふ語。○人の嘲やあらむ。人の嘲笑があるかもしれないから。このまゝにして置いては人から笑はれるかも知れぬといふ意。終止でなく、副詞的終止で、下の方につゞいて行く形である。○行末難なく。將來無難に、先き先きに行つて困らぬやうに。○したため設けて。ちやんと置いて、ちやんとよく始末をつけておいての意。○年

「年ごろもあればこそあれ」「その事待たむほどあらじ」

ごろもあればこそあれ。年來も斯うして來ればこそ來たものを。年頃も在ればこそ在りけれ」と見てよからう。佛道悟入といふやうな大事は思ひ立たずに、年來も斯うして俗事にかゝづらつて來たものを、今になつてそれほどの氣掛りな事も打棄つて大急ぎで大事に赴くにも及ぶまいといふ思想。○その事待たむほどあらじ。その事を待つ間がどれほど掛るといふでもあるまい。その結末はぢきについて了ふだらうの意。待たむを連體假止のやうに考へて「待たむ、程あらじ」と句讀を切つて「待つのにいくらも時間は掛るまい」と見ると、思想ははつきりするやうだが、古文の調子としてはそれは不自然で「待たむ程」はやはり「待つ間」といふ連體の形と見るべきであらう。○物さわがしからぬやうに。あわてさわいだ様でないやうに。よく落著いて心靜かにである。下に「こそ思ひ立ため」と補つて見よ。○えさらぬ事。よう避けぬ事、避けるに避けられない事。○いと。層一層、愈々益々。○事の盡くるかぎり。事のなくなる際限。「かぎり」は限度、際涯、際限、はての意。いくらやつてもやつてもする事ははてしがたない、はてしなく幾らでも事は生じて來るの意。○思ひたつ日。大事を思ひ立つ日。○あるべからず。あらう筈はない。○おほやう。大體、概して。○人を見るに。世の人を見ると。○すこし心あるきは。少し考へのあるがはの人。「心ある」は考がある、物のわけのわかるといふ意。「きは」は分際、程度の意。丸で考のない人はてんで大事など思ひ立たうともせぬ、大いに考があれば勿論直ちに大事に赴く、その中邊で、全く考がないでもなく、さればとて大いに情理を解するといふでもない、さうした世の一般者流、即ち少しばかり譯の分つたといふ程度の連中はといふのである。○このあらましにてぞ一期は過ぐめる。斯ういふ豫想で一生涯は過ぐるやうだ。上述の如く「あゝして、斯うして、それからゆつくり」といふ豫想的計畫だけで終に其の事の實現を見ずに一生を終へるやうだといふ意。「あらまし」は豫定、豫想、計畫。「一期」はその人の一生、生涯の意。

近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身を助けむとすれば、恥をも顧みず、財をも棄てて

逃れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火の攻むるよりも速かに逃れがたきものを、その時老いたる親、いとけなき子、君の恩、人の情、棄てがたしとて棄てざらむや。

【通解】 近火なで逃げる人は、一寸待つてくれなどというや。自分の身を助けようとすれば、恥も外聞も構はず、財産をも棄てて逃げ去るのだ。命は決して人を待つものではない。無常即ち死の迫つて來ることは水火の攻めて來るよりも迅速で、逃げ難いものであるのに、その時になつて、老いた親、幼けない子、君の恩、人の情誼、それが棄て難いとて捨てずに居られようや。

【文旨】 前節を受けて、近火などの火急の場合を例に取つて、無常の來る事はそれよりも烈しい、その時になつて、浮世のあらゆるほだしが棄て難いとて棄てずに居られようやというて、大事に赴かんとする者の、あれをして、これをして、それからゆつくり思立たうといふ、さうした愚かさを言外に明かにしたのである。

【語義】 ○近き火 近火。○しばしとやいふ しばし待てといはうや、一寸待つてくれなどというてはぬない。「や」は反語、「いふ」はこれに呼應した連體の形。○恥をも顧みず 他人に對する恥をも顧みない。恥も外聞もないといふ意。○命は人を待つものかは 命は人を待つものであらうや、決して待ちはせぬ。「かは」は反語。命——壽命は時が來ればさつさと引上げて行く、人（其の命の持主）が一寸待つてくれ——もう少し生かしておいてくれというても、然らばと云つてそれを待つて居るものではないといふ思想。○無常 一切萬物の生滅變遷して常住ならざること。こゝでは特に死を指していふ。○その時 其の無常の來た時、即ち、死に當面した時。○いとけなきいとけなきに同じ。○棄てざらむや 棄てずあらむや。「や」は反語。但、この文意は、棄てなからうや棄てるといふよりも、棄てずに居られようや棄てずには居られぬといふ方の趣に近い。

第六十段

眞乘院に、盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋頭といふものを好みて、多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづたかく盛りて、膝もとにおきつゝ、食ひながら書をも讀みけり。煩ふことあるには、七日二七日など、療治とてこもり居て、思ふやうによき芋頭をえらびて、ことに多く食ひて、よろづの病をいやしけり。人に食はすることなし。たゞ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にさまに、錢二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋頭のあしと定めて、京なる人にあづけおきて、十貫づつ取りよせて、芋頭をともしからずめしけるほどに、またことようにも用ふる事なくして、そのあし皆になりけり。「三百貫のものを貧しき身にまうけて、かくはからひける、誠にありがたき道心者なり」とぞ、人申しける。

【通解】 眞乘院に、盛親僧都というて、尊い智者があつた。其の僧都は親芋といふものをすいて、澤山食べた。佛典の講義をする席でも、大きな鉢に、親芋を堆く盛つて、膝のもとに置いては、それを食ひながら本の講義をもした。からだの具合のわるい時には、七日、二七日などと期間を切つて、療治というて室内にとちこもつてゐて、

思ふやうによい親芋を選んで、特に多く食つて、凡ての病氣をなほしたのであつた。外の者に食はせる事はない。只自分一人だけ食つたのであつた。非常に貧乏であつた所が、師匠が死に際に、錢二百貫と寺を一つ譲つて呉れたのを、寺を百貫に賣つて、都合三萬疋即ち錢三百貫を親芋の料金ときめて、京にゐた人に預けておいて、十貫分づつ取りよせて、親芋を不足なくふんだんにたべた、さうしてゐる内に、更に外の費用に使ふ事なしに、其の料金が皆になつて了つた。三百貫がものを、貧乏な身に手に入れて、而もそれを斯ういふやうに使つたのは、誠に珍しく道心堅固な人だ」と或人が申した事である。

【文旨】 盛親僧都の奇行をそのまゝ描寫したといふだけで別意はない。この節は芋頭といつた變つた好み、而も徹底的な好みを述べ、次の節はその一般的奇行を述べたのである。そして此の節では「誠にありがたき道心者なり」といひ、次の節では「徳のいたれりけるにや」といひ、共にそれに共鳴してゐる。同じ奇行といふ中にも、天性から溢れ出る、自然のまゝの奇行と、術氣で殊更にやる奇行とがある。天性流露の奇行は人に許され人が共鳴する、術氣でやる奇行は臭くてたまらぬ。さうした心持から、この僧都の奇行を共鳴的筆致で敘したものだ。敘述がさら／＼として少しのこだはりもなく運んで行く所は、さすがにうまいものだ。

【語義】 ○眞乘院 仁和寺の末寺で院家即ち格式の高い末寺の一つである。○盛親僧都 傳は不明。僧都は僧官の第二位で、僧正に次いで諸僧を統べる任務に當る者である。○やんごとなき 尊い、すぐれて尊い。○智者 えらい人、ものしり。茲では佛教に通じたえらい長老の義。○芋頭 親いも、里芋の大きなやつ。○談義 佛典の教義を談ずること。衆僧に對して佛典の講義をしたものと考へられる。○うづたかく 堆く。山もりにするをいふ。○書 書物。茲は勿論佛書。○煩ふことあるには 病氣する事ある時には。○師匠 師の僧。○死にざまに 死に際に。○坊 寺中の區院。禪家ではそれを塔頭といふ。○かれこれ あれとこれと。錢二百貫と坊を賣つた百貫とで都合三萬疋といふのである。○三萬疋 この時代は永錢の勘定で、一貫を百疋というた。それで三百貫は恰度三

萬疋になる譯である。○あし 錢、料金。○十貫 これも錢をいふ語で、芋頭の目方ではない。○ともしからず 乏しからず、不足なく、十分に。○めしけるほどに 召上つた内に「めす」は食ふの敬語。○ことよう 外の用、他の費用。○そのあし皆になりけり その錢が皆になつた、その錢を全部使ひ果して了つた。○まうけて 儲けて。得て、手に入れての意。○かくはからひける このやうに處置した。全部芋頭の代金にして了つたのをいふ。○ありがたき 珍しい、稀な。○道心者 求道心の堅い人。道心は菩提心ともいふ。佛果菩提を求めぬ心で、その心を堅く發起した者といふのである。○人申しける 人が申した。人々が「でなくて「或人が」といふ文調と考へられる。

この僧都、ある法師を見て、しろうろりといふ名をつけたりけり。「とは何ものぞ」と、人の問ひければ、「さるものを我も知らず。もしあらましかば、この僧の顔に似てむ」とぞいひける。この僧都、みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説、人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を軽く思ひたるくせものにて、よろづ自由にして、おほかた人に隨ふといふことなし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前すゑわたすを待たず、我が前にすゑぬれば、やがてひとりうち食ひて、歸りたければ、ひとりついたちて行きけり。とき非時も、人にひとしく定めて食はず、我が食ひたき時、夜中にも、曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふこと聞き入れず。目さめぬれば、幾夜もいねず、心をすましてうそぶきありきなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よ

ろづ許されけり。徳のいたれりけるにや。

【通解】この僧都が、或る坊さんを見て、しろうるりといふ渾名をつけたのであつた。といふのは何ものですかと、或る人が尋ねた所が、「さういふものをわしも知らない。若しあつたら、この坊さんの顔に似てみよう」というた。この僧都は、容貌がよく、力がつよく、大食で、手のいゝ事、學問の出来る事、辯説、凡て人々にすぐれて、一宗の大立物であつたので、仁和寺中の僧達からも重く思はれてゐたが、世の中を屁とも思はぬ變り者で、何事も我儘勝手にして、丸で人につれて調子を合はせるといふ事はない。高貴の所へ佛事によばれて御馳走の膳部につく時も、一座の人々の前にずうーと膳部を置くのを待たず、自分の前に膳をすゑると、すぐ一人で食つて、歸りたければ、一人ふいと立つて歸つて行つた。定時の食も非時の食も、人と同様に時をきめて食はず、自分の食ひたい時には、夜中でも夜明でも構はず食つて、ねむたければ、晝もさつさと部屋の内にとちこもつて寝て、どんな重要な事があつても、人のいふ事を耳にも入れない。目が覺めると幾晩も眠らず、心をすまして悠々と歩き廻つたりなどして、どこ迄も常規を逸した風であつたが、それでも人にいやがられず、何事も人に許されてゐた。非常に徳が高く達して居つた爲めであらうか。

【文旨】前節を受けて、一般的奇行を述べたのである。人に「しろうるり」などいふ渾名をつけて、「そんな物はおれも知らぬ、若しあつたらこの坊さんに似てみよう」などと空とぼけたやうで超然たる所に、その僧都の面影が活躍してゐる。そして「世を軽く思ひたるくせもの」といふやうな言葉の内にも、どことなくそれが兼好自身の趣味にかなつた面白い人だといふ心持が窺はれる。

【語義】○しろうるり 本文に書いてある通り、深い考も何もなく吐嗟に口に出たで、たがめの詞と見てよからう。古來いろ／＼と面倒な解がある。黒川眞頼は、しろうりを延ばしてわざと解し難いやうにいうたものだ、それは此

の僧の顔の色が白く面長で白瓜のやうだつたからだ、と解してゐる。一寸面白い見方で、どうやら事實に近いやうな氣もする。而しわざと解し難いやうにいふなどは、斯うした僧都にはありさうもない事だ。或は白瓜などの聯想で、つい何氣なしに「白うるり」といつたのかもしれない。何れにしても定説の得られよう筈はない。結局原文のままにたがめの詞と見ておくが一番よい。○とは何ものぞ しろうりとは何ものぞの略。○さるものを さういふものを、しろうりなどいふものを。○あらましかば あつたら。假定的にいふ語。○似てむ 似てみよう。○みめよく 顔がよく、容貌がよく。○能書 手のよい事、字のうまい事。○學匠 學問のよく出来ること、即ち學者としての意。○宗の法燈 宗内の棟梁、宗内の大立物、宗内の人々から仰がれるもの。○寺中 仁和寺の僧達をいふ。○世を軽く思ひたる 世の中を軽く思つてゐる。世間の人を屁とも思はぬ、世俗の事などは丸で何とも思はぬの意。○くせもの 變り者。一風變つた面白い人といふ心持。○おほかた ちつとも。○人に隨ふ 人につれる、人に調子を合はせる。世間につれて人のする通りにやるといふ意。○出仕して 佛事に出仕して。即ち高貴の所に法事などと呼ばれて行つての意。○饗膳 饗應の膳部、御馳走。○皆人 皆の人、その座の皆の人々。○すゑわたす ずうと御膳をすゑる。○やがて すぐと、すぐそのまゝ。○ついたちて つつと立つて。○とき非時 僧の食事をいふ。○とき は時とも齋とも書く、正午以前の食事の稱。それから以後の食事は凡て「非時」といふ。元來僧侶は正午以前の正時に於て一回食事するのを本義とした、それは食すべき時の食なので「とき」といひ、その以後の食は時でないといふ思想から「非時」というたのである。但、こゝに「人にひとしく定めて食はず」とあるのは、恐らく當時の一般の僧が、中食（即ち時）、夕食（非時）を定めて食つた、それには構はなかつたといふ事であらう。○定めて 時をきめて。○かけこもりて 部屋の中にとちこもつて。第三十二段にも類例のあつたやうに、障子についてゐる掛金を掛けて部屋の内閉籠るのをいふ。「驅け」の義ではない。○大事あれども 重大の事があつても。「あれども」は「あるけれども」でなく「あつても」の意の表現である。○心をすまして 清澄な氣分になつ

て。ナイツと心をすましてである。○うそぶきありき。悠々として歩く。うそぶくは嘯くと書いて、口笛を吹く、口をすぼめて聲が出るほどに長い息を吐く、といふ意の語であるが、こゝは只悠々として歩くといふだけの心持。○世の常ならぬさま。世の常でない様子。世間一般の常規にはづれてひどく變つてゐるといふ意。○よろづ許されけり。萬事人から許されてゐた。「許さる」は許可されるといふのとは違つて、あの方の事だから、といふやうに、何をしても人から厭はれず咎められず、其の爲すがまゝを人がよいとしたといふ意。○徳のいたれりけるにや。徳が至極してゐたからであらうか。その人の徳が十分に達してゐて、それで自然こんな事をして人から許されてゐたのだらうといふ思想。

第六十一段

御産のとき、飯おとすことは、定れることにはあらず。御胞衣とどこほる時のまじなひなり。とどこほらせ給はねばこの事なし。下さまより事おこりて、させる本説なし。大原の里の飯をめすなり。ふるき寶藏の繪に、賤しき人の、子産みたる所に、飯おとしたるを書きたり。

【通解】 宮中の御産の時に、飯を家の棟から落すことは、きまつた事ではない。御胞衣が滞つてすらくおりにない時のまじなひである。滞り遊ばされぬ時にはこの事はない。これはもと下々から起つた事で、格別これといふたしかな本據はない。大原の里の飯をお召しになるのである。古い寶藏の繪に、賤しい者が子を産んでゐる所に、飯をおとしてゐる所を書いたのがある。

【文旨】 考證的の事を書いた一つで、兼好は斯うした方面の趣味も豊かであつた。

【語義】 ○御産の時。皇后とか女御とかいふ方々の御産の時。○飯。飯を蒸す器。これを御殿の棟から落すといふ事は、平家物語卷三の公卿揃の事といふ所にも見えてゐる。○胞衣。今もいふのと變りはない、腹の中で胎児を包んだ膜で、それが所謂産後と稱して、産後に出るのである。○下さまより事おこりて。下々から起つて、事おこりては、起つて、起つた事での意。○させる。さしたる、格別これといふしつかりした。○本説。根據、よりどころとすべき文獻上の説。○大原の里。京都近郊の地名。○めす。召上げる、お取り寄せになる。○寶藏。たからぐら、種々の寶物を収めておく藏。○繪。繪卷物。○書きたり。書いてある。書いたのがある、書いたのを見た事があるといふ心持の言葉。

第六十二段

延政門院いときなくおはしましける時、院へまゐる人に、ことづてとて申させ給ひける御歌、

ふたつもし牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ、君はおぼゆる。

こひしく思ひまゐらせ給ふとなり。

【通解】 延政門院が御幼少におあり遊ばされた時、上皇の御所へ参る人に、おことづけというて申上げ遊ばされた御歌、

ふたつもし……二つになつた文字(こ)、牛の角の文字(い)、眞直な文字(し)、歪んだ文字(く)と、君の事をば思はれまする。

これは父の院の御事をこひしくお思ひ申上げるといふことである。

【文旨】 風變りの面白い御歌を書きとめたといふ迄の事だが、「こひしく思ひまゐらせ給ふとなり」といふ説明の詞が如何にも輕妙だ。

【語義】 ○延政門院。後嵯峨院の皇女、悦子内親王、御母は大納言公經卿の女。○院。後嵯峨上皇の御所。○ことづて。傳言、ことづけ。○ふたつもじ。「こ」の字。上と下と離して二つに書くからである。○牛の角もじ。「い」の字。牛の角に似てゐるからである。「ひ」の假名遣であるが、それは致し方がない。「ひ」の字の事だといふ説もあるが首肯し難い。○すくなもじ。「し」の字。すくななる（眞直な）文字の義。活字ではお尻が曲つてゐるが、書くには眞直に書いたものと思へばよい。○ゆがみもじ。「く」の字。ゆがんでゐる文字の意。○君はおほゆる。あなた様の事をば思はれます。「君」は父皇を指す。「は」はをばの意。○となり。といふ事である。

第六十三段

後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人にあひにけるより、宿直人とて、かくことごとしくなりにけり。一とせの相は、この修中の有様にこそ見ゆなれば、つはものを用ひむこと、おだやかならぬ事なり。

【通解】 宮中の後七日の御修法を勤める導師が、警固の武士を集める事になつてゐるが、それは何時とか斯ういふ際に盜賊にあつた事があるので、それから宿直人といつて、斯んなに仰々しい事になつて了つたのである。然し一年間の吉凶の相は、實に此の修法の中の有様にあらはれるものだから、武人を用ひるといふ事は、穩當を缺く事である。

【文旨】 例の故實趣味から、當時公事の一つに存する習慣を批判したといふに過ぎない。

【語義】 ○後七日。後七日の御修法。正月八日から十四日まで七日間、朝廷にある眞言院で行はせられる御修法をいふ。國家の鎮護、五穀の豐熟を祈る儀である。後七日といふのは、元日から七日間東坊で行ひ、これについて更に七日間眞言院で行ふからの稱である。○阿闍梨。「アジャリ」ともよむ、もと梵語、師範の義で、能く子弟を糾正する意。こゝは御修法を勤める導師を指していうたのである。○武者を集むる事。この御修法の時、武官の侍が、甲冑をつけて、四門を警固したのである。○いつとかや。いつの事とか。はつきり時は覚えぬが、何でもいつだか、といふ意。四季物語には大治二年の御修法にさうした事實のあつた事が見えてゐる。○とのゐる人。宿直の人、當直の人。○とて。といつて、といふ名義で。○かくことごとしくなりにけり。今日の如く仰山らしい事になつて了つたのだ。或阿闍梨がこの御修法の時に盜賊にあつたので、その警固の爲めに宿直人といつて人を附けたのが、追々と今日の如く甲冑を帯びた武士を集めて四門を警固させるといふやうな大仰な事になつて了つたのだといふ文意であらう。○一とせの相。其の一年間の天下の吉凶の相。○修中。御修法の間。○有様にこそ見ゆなれば。有様にあらはれるのだから。○つはもの。武人、兵士。さういふ大切な御修法に凶器たる兵を用ひるのは穩當でない、何となく不穩の兆が見えて面白くないといふのである。

第六十四段

車の五緒は、かならず人によらず、ほどにつけて、極むる官位に至りぬれば、乗るものなりとぞ、ある人おほせられし。

【通解】五緒のある牛車は、必ずどういふ人が乗ると人によつて定まつてゐるのではなくて、其の家柄に應じて、一番上の官位に至ると、誰でも乗るものであると、或人が仰せられた。

【文旨】例の故實觀で、五緒の車に對する當時の人々の謬見を正したのである。

【語義】○車の五緒。五緒の車をいふ。特に「車の五緒」というたのは、五緒を主としていうたからだと古註に書いてゐる。五緒といふのは、牛車の簾の上部に垂れる緒で、簾の一端から他の端迄の間に、等しい間隔に五つの緒のあるのをいふ。○必ず人によらず。人によつてきまつてゐるのではない。必ずしも人による譯ではないの意。○ほどにつけて。家柄に應じて。○極むる官位。達し得べき最上の官位。昔は家柄によつて、それ／＼達し得べき官位の限度が定められてゐた、それを先途といふ、その先途に至ればといふのである。

第六十五段

このごろの冠は、昔よりは遙かに高くなりたるなりとぞ、ある人おほせられし。古代の冠桶を持ちたる人は、端をつぎて今用ふるなり。

【通解】近頃の冠は、昔よりはずつと高くなつてゐると、或人が仰せられた。で、昔の冠桶を持つてゐる人は、今ではその縁の所をつぎ足して使つてゐるのである。

【文旨】例の故實の考證である。

【語義】○冠。かんむり。○古代。昔。今よりは少し前の時代を指した言葉。○冠桶。冠を入れる箱。○端をつぎて。ふちを過ぎ足して。

第六十六段

岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙をそへて、この枝につけて参らすべきよし、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ知り候はず。一枝に二つつくることも存知候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、また武勝に、「さらばおのれが思はむやうにつけて参らせよ」と、仰せられたりければ、花もなき梅の枝に、一つをつけて参らせけり。

【通解】岡本の關白殿が、満開の紅梅の枝に、雉子を一番添へて、この枝に此の鳥をつけて差出せといふ旨を、御鷹飼下毛野の武勝に仰せになつた所が、武勝は、「花の咲いた枝に雉子を附ける仕方を知りません。又一本の枝に二つ附ける事も知りませぬ」と申したので、料理方の役人に尋ねられ、又人々に御聞きになつて、重ねて又武勝に、「然らばお前が思ふやうに附けて差出せ」と仰せになつたら、武勝は、花もない梅の枝に、一羽附けて差上げたのであつた。

【文旨】これも例の故實の事だが、仲々委曲に、而も要領よく面白く書いてゐる。

【語義】○岡本關白殿。關白左大臣藤原家平。○さかりなる。花盛りの、満開の。○鳥一雙。雉子一番。單に「鳥」といへば雉子のこと。一雙は二羽で、雌雄一つがひである。○この枝につけて云々。昔は人に贈物をするに、その時折の花の枝などにつけて贈る習はしであつた。それで、これも雉子を贈物にしようとして、この梅につけて出せと命ぜられたのである。○御鷹飼。鷹を飼ふ役人。宮中の官人だから「御鷹飼」といふ。○下毛野武勝。鷹飼の

役人の名。○すべ。しかた、方法。○膳部。大膳職の下役人の稱であるが、こゝは關白家の料理人の事であらう。○人々に問はせ給ひて。膳部に尋ねても分らず、人々にお問ひになつたが、矢張り要領を得ず、といふのを省略の筆で書いたのである。○おのれ。汝、お前。元來第一人稱の詞で、それを目下の者に對する第二人稱に轉用したのである。

武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、つぼみたると、散りたるとにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、あるひは六尺、かへし刀五分に切る。枝のなかばに鳥をつく。つくる枝、ふまする枝あり。しづら藤のわらぬにて二所つくべし。藤のさきは、火打羽のたけに比べて切りて、牛の角のやうにたわむべし。初雪のあした、枝を肩にかけて、中門よりふるまひてまゐる。大砌の石を傳ひて、雪に跡をつけず、雨覆の毛を、少しかなぐり散らして、二棟の御所の高欄によせかく。祿をいださるれば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、杏のはなの隠れぬほどの雪にはまゐらず。雨覆の毛を散らすことは、鷹は弱腰をとることなれば、御鷹のとりたるよしなるべし」と申しき。

【通解】 武勝が申した事には、雉子は雑木の枝や、梅の枝につける、梅の枝は花の蕾であるのか、散つたのかにつける。五葉の松などにもつける。枝の長さは七尺か或は六尺、そして枝を切るのは、逆刀で五分程切る。枝の中段の所に鳥をつける。鳥をつける枝と、鳥の足を踏ませる枝とある。つづら藤の割らない丸のまゝので、二ヶ所結

び附けるものだ。その藤のさきは、鳥の火打羽の長に比べて切つて、牛の角のやうに撓めるべきものだ。そして斯うした雉子を贈物にするのには、初雪の降つた朝、枝を肩に掛けて、中門から威儀をつくらうて参る。雨垂落の敷石を傳つて、雪の上に足跡をつけず、雉の雨覆の毛をむしつてそこらに散らして、二棟の御所の欄干に寄せ掛ける。御祝儀の衣を下されたら、それを肩に掛けて、拜舞して退出する。いくら初雪でも、杏の先の隠れない位の雪では参らない。雨覆の毛をむしり散らすのは、鷹は弱腰をねらつて捕るものであるから、その場でその鳥を御鷹が捕つたといふ體を示すのであらう」と申した。

【文旨】 武勝の言葉、複雑な内容を持つた言葉を、如何にも簡明に、順序よく書きあらはしてゐる。「初雪のあした」云々の邊は、當時の斯うした趣があり／＼と見えるやうで實に面白い。

【語義】 ○柴。山野の雑木を總稱的にいふ言葉。○つぼみたると散りたると。これは梅の枝についていうたのである。花の蕾の枝か花の散つた枝かにつける、満開の枝にはつけない、といふので、前節に、「花に鳥附くるすべ存知候はず」といふに呼應してゐる譯である。○五葉。五葉の松。○かへし刀。逆刀。枝のもとを一旦斜に切つて、更にその先を裏からかへして又切るのをいふ。最初切つた時の刀を逆にかへして更に切るといふ思想の語。○つく。枝。鳥を附けてぶらさげる枝。○ふまする枝。鳥の足で踏んでゐるやうにさせる枝。○しづら藤。つづら藤ともいふ、あをつづらの一名、蔓莖で他物に纏繞する野生の植物。○わらぬにて。裂かないので、丸の儘なので。○二ヶ所。二ヶ所。一羽の鳥を藤で上下二ヶ所枝にゆはへつけるのである。○火打羽。鳥の翼の先の特に長い羽、それが火打の形に似てゐるからの稱といふ。○牛の角のやうに云々。牛の角（いの字の形）のやうに、両方から丸味を持つて向ひ合ふやうに藤の先を曲げておく。○枝。鳥をつけた枝。○中門。外門と寢殿との間に設けた門。○ふるまひて。威儀をつくらうて、特別にしなをつくらうて。○大砌の石。庭の側の軒下の敷石、雨垂落ちの敷石。○雨覆の毛。雉子の尾の付け根の所にある毛。○かなぐり散らして。むしり散らして。むしつて其の邊に散らすといふのであらう。

○二棟の御所 本屋から横に棟を突き出し棟が丁字形をなすやうに造つた建物だらうといふ。○高欄。欄干。○祿使の者に當座の寝美として下される衣類をいふ。○杵のさき。○弱腰をとる。尾の付け根の所をねらつて、そこを打つて鳥を捕る。弱腰はもと人の腰の細くなつた所即ち帯を締める所をいふ語。それを鳥の尾の付け根の稱呼に轉じたものだらう。○御鷹のとりたるよしなるべし。御鷹が取つたといふ意味で、そこをむしるのであらう。

花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけむ。長月ばかりに、梅のつくり枝に、雉をつけて、「君がためにと折る花は、時しもわかぬ」といへること、伊勢物語に見えたり。つくり花はくるしからぬにや。

【通解】 花に雉子を附けないといふのは、どういふわけであつたらう。九月の頃に、梅の作り枝に雉子をつけて、「君がためにと折る花は、時しもわかぬ」というたといふ事が、伊勢物語に見えてゐる。作り花なら差支ないのであらうか。

【文旨】 伊勢物語の歌を想起して、武勝の「花に鳥附けず」というた言葉に軽く疑を挿んだのである。

【語義】 ○長月。陰曆九月の異稱。○君がためにと云々。伊勢物語に「昔、おほきおほいまうちぎみと聞ゆる、おはしけり。つかうまつる男、九月ばかりに、梅の作り花に雉を附けて奉るとて、「我が頼む君が爲にと折る花は時しも分かぬものにぞありける」とよみて奉りければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に祿賜へりけり。」とあるのをいふ。○時しもわかぬ。時を分たぬ、いつといふ季節の分ちのない。○苦しからぬにや。差支ないのだらうか。

第六十七段

賀茂の岩本、橋本は、業平、實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一とせ参りたりしに、老いたる官司の過ぎしを呼びとどめて、尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覚えはべる。吉水和尙、

月をめで花をながめしいにしへのやさしき人は、こゝにあり原。

と詠みたまひけるは、岩本の社とこそ承りおき侍れど、おのれらよりはなか／＼御存知などもこそさぶらはめ」と、いと恭しくいひたりしこそ、いみじく覚えしか。

【通解】 賀茂の岩本、橋本兩社は、業平と實方を祭つた社である。人が常に間違つて混同していうて居りますので、或年参詣に参つた時に、年寄つた神官の通り掛つたのを呼び止めて、尋ねました所が、「實方は御手洗に影の映つた所と御座りますから、橋本の方が一層水が近いので、その方だらうと思はれます。吉水和尙が、月をめで……月を賞観し、花を眺めて歌を詠じた古への風流な人は、こゝに祀つてある在原業平その人である。

と御詠み遊ばされたのは、岩本の社と承つて居りますが、さういふ事は、手前共よりもあなた様の方が却てよく御存知でも御ありなされませう」と、大層恭しく申したが、實に立派な態度だと深くそれに感服した事であつた。

【文旨】 上賀茂の末社岩本は業平、橋本は實方が祀つてあるのだが、兎角人がそれを混同してゐる。それについ

て、其の神官の話を書いて錯誤を辨じたのであつて、そのつゝまじやかな神官の態度がさりりとしてよく書けてゐる。

【語義】 ○岩本橋本 共に京都上賀茂神社の末社。原文の意味は、「岩本は業平、橋本は實方なり」の意。○業平在原業平。有名な歌人。○實方 藤原實方。これも有名な歌人。○云ひまがへ侍れば 混同して言ふので。二社の區別を間違へてゐるからの意。○宮司 神官。神社の諸務、祭祀祈禱等を掌る者の稱で、今日の所謂宮司即ち官國幣社の奏任神官とは言葉の内容が違ふ。○御手洗 神社の傍にある川や泉の類をいふ語。參詣人が手を洗ひ清める所である。○影のうつりける所 實方の亡靈の影が映つた所。これは多分その社の縁起の文句か何かに實方の亡靈の影が御手洗に映つたので、そこに社を建てて祀つたといふやうな事が書いてあるといふのだらう。○橋本やなほ水の近ければ どちらも水のそばではあるが、橋本の方が一層水が近いから。下に橋本の方が實方でありませうといふ心持が略されてゐる。○吉水和尙 有名な歌人の慈圓、諡を慈鎮といふた人。東山の吉水（今の丸山）に居つたから、世に吉水の和尙と稱した。和尙は梵語、師の義で、我國では僧位の稱となつてゐた。和上とも書く。そして天台宗ではクワジヤウ、法相宗ではワジヤウ、禪宗ではヲシヤウとよみ習つてゐる。又律宗では「上」の字を書き、餘の宗では「尙」の字を書くのが例である。○月をめで花をながめし 月を愛し花を眺めた。月につけ花につけて歌を詠じたといふ心持の言葉。○やさしき人 優雅な人、風流なみやびな人。○こゝにあり原 こゝに在るに、在原の姓を掛けたのである。○岩本の社とこそ 岩本の社に詠んで手向けたのだとの意。○承りおき侍れど 聞いて居りますが、「おき」は置きで、「聞き」承りにつく場合、口語でいへば「居る」に當る一種の慣用語。○おのれら 私達、手前共。こゝは第一人稱の謙辭。○なかく 却て。○御存知などもこそさぶらはめ 御存知でもおありなされませう。知つてゐるだらうといふのを、丁寧にして婉曲にいうた形。○いみじく覚えしか えらいと思つた。そのつゝまじやかな、而も事理を明かにする態度にひどく感服したといふのである。

今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前の水にて書きてたむけられけり。誠にやんごとなき譽ありて、人の口にある歌おほし。作文詩序など、いみじく書く人なり。

【通解】 今出川の院の近衛というて、色々の歌集に澤山歌のはひつてゐる人は、若かつた時、いつも百首の歌を詠んで、彼の二つの神社の御前の水で書いて捧げられた。ほんとにすぐれて高い名聲があつて、人口に膾炙した歌が多い。詩や詩の序など、すぐれてうまく書く人である。

【文旨】 岩本橋本兩社の區別を書く序手に、其の社に縁故のあつた近衛といふ歌人を想ひ出して、一寸書き添へたのである。

【語義】 ○今出川の院の近衛「今出川院」は龜山天皇の中宮嬪子。近衛はそれに仕へてゐた宮女で、大納言伊平の女。○集 歌集。近衛の歌は、續古今以下五代の勅撰歌集に數多く載つてゐる。○たむけられけり 捧げられた。手向くは神佛に奉るのをいふ。○やんごとなき譽 尊い譽。非常に高い名聲の意。○人の口にある 人口に膾炙してゐる。○作文 詩作即ち漢詩を作る事、又その作つた漢詩をいふ語。○詩序 詩の小序、漢詩につけるはしがきの文。

第六十八段

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみじき薬とて、

朝ごとに二つづつ焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時、館のうちに人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りて、かこみ攻めけるに、館のうちにつはもの二人出でてきて、命を惜まず戦ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議におぼえて、「日頃こゝにも少し給ふとも見ぬ人々の、かく戦したまふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年來たのみて、あさな／＼めしつる土大根らに候」といひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かゝる徳もありけるにこそ。

【通解】九州に、何某押領使とか何とかいふ者があつたが、大根をば萬事に非常な妙薬というて、毎朝二つづつ焼いて食ふことが長年になつた。或時、館の中に人も居なかつた其の際を覘つて、敵が突然襲つて來て、取圍んで攻めた所が、館の中に武士が二人あらはれて來て、命を惜まず戦つて、襲來した敵を皆追ひかへして了つた。其の人は非常に不思議に思つて、「平素この館に御いになるとも見えない方々の、斯うして御戦ひ下されたのは、どういふお方でありますか」と尋ねた所が、「年來信頼して、毎朝々々召上つた大根共で御座ります」といつて消えて了つた。深く信仰したればこそ、斯うした功德もあつたのであるわい。

【文旨】奇聞をそのまゝ録したのである。深く信をいたしぬればかゝる徳もありけるにこそ」というたのも、成程なアと感心した程度で、つまりさうした怪談めいた話それ自らを信ずるといふよりも、信仰の極致は斯うさへなる、えらいものだといふ方面から感心したものと見てよからう。

【語義】○筑紫 九州を總括していうた古稱。○なにがし 何のそれがし。○押領使 地方官の一で、奸惡の者を捕へたり、暴徒をうち平げたりする役。本文に「などいふややなる者」とあるのは、實際押領使であつたかどうかどうかもよく分らぬ、何でもさういつた役の者、といふ心持である。○土大根 大根。○よろづにいみじき薬 萬事に

ついて非常によい薬。萬病の妙薬の意。○館 城の狭小なるもの。城といつても、大阪城、江戸城、名古屋城といふやうな堂々たるものはごく近世の事、只普通の邸宅よりも構を嚴重にして、防守の設けがしてあつたといふ迄である。○人もなかりける 無人であつた。主人ばかりで、家來などは外出して不在だつたといふのである。○つはもの 武士、兵士。○日頃 常日頃、ふだん。○ものし給ふ おいでになる。○たのみて 頼んで。信頼しての意。○めしつる めしあがられた。めすは食ふの敬語。○失せにけり なくなつた。形が消え失せたの意。○信をいたしぬれば 信仰の誠を盡したから。こゝの「ぬれば」は「信仰したから」といふ特殊事態の中に「信仰すれば」といふ一般思想の強調をも含めたやうな趣と考へられる。○かゝる徳 斯様な功德。「徳」は功德、おかげ、りやく。

第六十九段

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅の假屋に立ち入られけるに、豆の殻を焚きて豆を煮ける音の、つぶ／＼と鳴るを聞き給ひければ、「うとからぬおのれらしも、うらめしく我をば煮て、からき目を見するものかな」といひけり。焚かるゝ豆がらはらはらと鳴る音は、「わが心よりする事は、焼かるゝはいかばかり堪へがたけれども、力なきことなり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

【通解】書寫の上人は、法華經を讀誦した功德が積んで、六根清淨にかなつた人であつた。或時旅の宿にはひつて行かれた所が、豆の殻を焚いて豆を煮てゐる音が、ぐつ／＼と鳴つてゐる、それをお聞きになると、「縁淺からぬお前達が、斯うして恨めしくも俺を煮て、ひどい目に逢はせるものだなア」といふのだつた。焚かれる豆殻のぼち

ばちと鳴る音は、「いや私の心から好き好んでする事かい。斯うして焼かれるのは實につらいが、何とも致し方のない事だ。そんなに恨んで呉れるなよ」と聞えたのであつた。

【文旨】 書寫上人が六根清淨になつて、豆の殻で豆を煮る音が、其の人には恨みの言葉、言ひ解く言葉と聞えたといふ話。書寫上人の六根清淨の功德を高調すると共に、特にその豆殻の話が面白いので、特別の興味を感じて筆録したといふわけであらう。斯うした豆殻の話は支那に有名な故事がある。それは世説などに出てゐる七歩の詩である。魏文帝が、弟の曹植を召して、七歩の中に詩を作れ、出来なければ殺すといふ時、曹植は聲に應じて、「煮豆持爲羹。漉^レ豉以爲汁。箕在^ニ釜^下。然。豆在^ニ釜^中。泣。本自^ニ同根^一生。相煎何^ニ太急^一」といふ詩を作つたといふ話である。どうやらこの詩がこゝの話の背景を爲してゐるらしくも思はれる。

【語義】 ○書寫の上人。有名な性空上人。播磨の書寫山にゐたからの稱。○法華讀誦。法華經を讀誦すること。○六根清淨にかなへる人。六根清淨にかなつた人、六根清淨の境地にまで達した人。「六根」は眼・耳・鼻・舌・身・意の六つで、それを清淨透徹ならしめるのを「六根清淨」と略して六根清といふ。○假屋。假に宿る家。○つづぶくとつづつと豆の煮える音。○聞き給ひければ……と云ひけり。お聞きになつたら……と云つた。上人には……といふ言葉に聞えたといふ意。六根清淨になつてゐる人だから、豆の煮える音の意味が上人にはちやんと分つたといふのである。○うとからぬおのれらしも。うとくしくない汝等が「うとからぬ」は疎くない、縁遠くない。言ひ換へれば、親しく近い中の意。豆と豆殻とだから斯ういふのである。「しも」は強めの詞。○からき目を見するものかな。つらい目にあはせるものだな。○はらくと。ばちくと豆殻の焼かれる音。○わが心よりすることかは。わが心からする事であらうや、決してわが心から斯うしてお前を煮るのではないの意。「かは」は反語。○いかばかり堪へがたけれども。どんなにか堪へ難いけれど。實につらいがの意。自分が焚かれるのはつらいといふので、斯ういふ所に「いかばかり」と推測的な語を使ふ事もまゝある。○力なきことなり。仕方のない事だ。力に及ばぬ事だといふ思想の語。○かくな恨み給ひ。そんなに恨み給ふな。……それは禁止命令の慣用形式。○とぞ聞えける。といふ言葉に其の音が上人に聞えたといふ意。

第七十段

元應の清暑堂の御遊に、玄上は失せにし頃、菊亭のおとど、牧馬を弾じたまひけるに、座につきて、まづ柱をさぐられたりければ、ひとつ落ちにけり。御ふところこそくひをもち給ひたるにて、附けられければ、神供の参るほどに、よく干て、ことゆゑなかりけり。いかなる意趣かありけむ、物見けるきぬかづきの、よりて放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。

【通解】 元應の清暑堂の御遊の時、其の頃はもはや玄上といふ琵琶はなくなつてゐた頃で、菊亭の大臣が、牧馬といふ琵琶を弾じなされた、所が、座について、まづ柱をさぐつて改めて見られると、一つ落ちて了つた。懐にそくひを持つて居られたので、そのそくひで附けられたら、神前の供へ物の奉られる間に、そのそくひがよく乾いて、何の仔細もなかつた。どういふ遺恨があつたものか、見物してゐたかづきを著た女が、そつと寄つて柱を一つはなして、又元のやうにして置いたのであつたといふ事だ。

【文旨】 菊亭の大臣兼季が、兼ねてより柱を調べ、又そくひを懐中してゐて、斯うした咄嗟の出来事にもまごつかなかつたといふ、其の行届いた心掛を中心としての一話柄である。殊更に感心した趣の言葉を使はずに、「神供の参るほどによく干てことゆゑなかりけり」といひ、さてその事の原因として、「いかなる意趣かありけむ」云々と書いたその凡ての筆致が、如何にも簡潔で面白い。

【語義】○元應 後醍醐天皇の年號。○清暑堂の御遊 天皇御即位の後、御一代に一度大嘗會を行はせられる、其の時清暑堂の御神樂といふ事があり、そのすんだ後に、清暑堂で群臣に御酒肴を下され、音楽の御遊がある、それをいふのである。○清暑堂は宮中豊樂院の後房。○玄上 宮中第一の琵琶の楽器、玄象とも書く。御代々宮中に秘藏されたもの。○菊亭のおとよ 藤原兼季。庭に菊を澤山植ゑ、仍て菊亭右大臣と號した。「おとよ」は大正の敬稱。○牧馬 玄上と相並んで、宮中の秘寶たりし琵琶。○柱 琵琶の鹿頸にとりつけて、絃を指でおさへる時の支へとなるもの。琴のコトヂのやうに絃を支へるのではない。○さくられたりければ 探られた所が、柱の所に手を遣つて一々調べて見たといふのである。○ひとつ落ちにけり 一つ落ちてしまつた。ほろりと一つ落ちたといふ意。○そくひ 續飯と書く、飯をねつて糊にしたもので、普通の糊よりも強い。○もち給ひたるにて「もち給ひたるそのそくひにて」の略と見るべき形。○神供の参るほどに 神供を奉る間に。「神供」は神饌即ち神前の御供へ物。○ことゆゑなかりけり 何の仔細もなかつた。○意趣 遣恨。胸中に何か其の人に對して恨みを抱いてゐるをいふ。○もの見ける 見物してゐた。○きぬかづき 衣被と書く、かつぎを著た女「きぬかづき」は昔婦人の外出する時被る服で、普通の衣の如く仕立て、頭から背に掛けて被り、手を擧げて支へ、深く顔を隠しく歩くもの。それから此の文のやうに、そのきぬかづきを被た女をも稱した語。こゝは市中から見物に入りこんだ女であらう。○よりて放ちて 琵琶のそばへ寄つてつけてある柱をとり放して。○元のやうに置きたりけるとぞ 元の通りに、即ち元つけてあつた通りに見せかけて置いたといふ事だ。斯うしていざ弾くといふ段になつて柱が一つ倒れるやうに仕掛けてまごつかせようとしたといふのである。「けるとぞ」は「けりとぞ」の慣用的破格。

第七十一段

名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心地するを、見るときは、又かねて思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家のそこ程にてぞありけむと覚え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。またいかなる折ぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝる事のいつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひ出でねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや。

【通解】 名を聞くなり、すぐと其の人の顔附は斯んな風だらうと推測し得られるやうな氣がするが、擬實際逢つて見ると、又兼々思つた通りの顔をしてゐる人はないものだ。昔の物語を聞いても、その話の中の場所が、今現在の人の家のあそこ位であつたらうと思はれ、その中の人物も、今現に居る人の中に思ひよそへられるものだが、これは誰でもこんな氣がするものかしらん。又どういふ折であらうか、今現在人の言ふ事も、目に見えるものも、自分の心の内に思ふ所も、こんな事がいつぞやあつたがなアと思はれて、さてそれがいつだと慥かには思ひ出せないけれども、まさしくあつたやうな心持がする、斯ういふ事は自分ばかりそんな氣がするのかしらん。

【文旨】 誰にも共通なデリケートな心理を如何にもよく描寫してゐる。武雄などいふ名を聞くと、如何にもやさしげな好男子のやうに思へる、所が逢つて見るとこれは又雲を突くやうな逞しい大男であつたりする、こんな事は誰しもよくある事。それから小説などを讀んでも、すぐそれを自分の知つた範圍の家なり人物なりによそへて考へる氣になる。要するに、豫想とか想像とか聯想とかいふ心理状態の描寫として遺憾なき筆致である。殊に「またいかなる折ぞ」から以下の迂曲な書きぶりが、さうした心的状態とびつたり合つて實によく出てゐる。「いつぞやありしがと覺えて」「いつとは思ひ出でねども」「まさしくありし心地のするは」といふやうに、辿り／＼行く所に何とも

いへぬ妙味がある。それから「誰もかく覺ゆるにや」と「我ばかりかく思ふにや」とを前後に分つて呼應させた修辭——勿論わざと巧んだ修辭でなく、筆の運びで自然とさうなつたのだが——それも一種の低徊趣味として面白く讀まれる。

【語義】 ○名を聞くより。名を聞くなり。斯ういふ「よりは」「や否や」といふ思想である。○やがて。すぐに、すぐそのまゝ。○面影。顔つき。○おしはからるゝ心地するを。推測し得られるやうな氣がするが。さういふ名前ならきつとこんな顔に違ひないと、その名によつて顔の推測が出来るやうな氣がするがの意。○見るときは。實際其の人を見ると、其の人に逢つて見ると。○かねて思ひつるまゝの。前以て思つてゐた通りの、兼ねて想像した通りの。○昔物語を聞きて。源氏物語、伊勢物語といふやうな昔の物語を聞いても。○この頃の。今の、今現在の。○そこ程。あそこ位。その話の中の家は、凡そあそこの家位だつたらうといふ意。○人も。話の中に出て来る人物も。○今見る人の中に。今現に自分が見る人の中に、自分の知つてゐる人の中に。○思ひよそへらるゝは。思ひ寄せられるのは。「よそへ」は「よせ」の延、くらべる、比較するといふ思想。「らるゝ」は自然にさうなるの意で、自然そんな聯想が心に浮ぶといふのである。○いかなる折ぞ。どういふ折か、どうかした折に。○たゞ今。今現に。この語は、人のいふことでも、目に見えるものでも、自分の心の内に思ひ浮ぶ事でも、と、その三つに掛つてゐるのである。

第七十二段

賤しげなるもの。居たるあたりに調度のおほき。硯に筆のおほき。持佛堂に佛のおほき。前栽に石草木のおほき。家のうちに子孫のおほき。人にあひて詞のおほき。願文に作善おほく書き載

せたる。おほくて見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。

【通解】 賤しげなもの。坐つてゐるあたりに道具の多いの。硯箱に筆の多いの。持佛堂に佛像の多いの。庭の植込みに石や草木の多いの。家の中に子や孫の多く居るの。人に向つて口數の多いの。祈願の文に善行の事を多く書き載せたの。多くて見苦しくないのは、書物車の書物と、ごみためのごみ。

【文旨】 全然枕草子の筆法をまねて、「いやしげなるもの」を列記しただけだが、凡てにごみ／＼とした事や慾はつた事を嫌ふ作者の趣味がよく現はれてゐる。「家のうちに子孫の多き」は、玩具箱をひつくり返したやうに、よと子供の居るのが下品だといふので、これは筆者の特殊の主観である。

【語義】 ○賤しげなるもの。如何にも下品なもの。○居たるあたりに。すわつてゐる邊に、自分の居るまはりに。○調度。手まはりの道具。○おほき。この連體形の省略終法を並列したのは全然枕草子を學んだ筆致である。○持佛堂。「持佛」は常に護持して朝夕信念する佛像、その佛像を安置する堂舎を「持佛堂」といふ。昔は普通の家に持佛堂があつた。○前栽。庭の植込み。○願文。神佛に向つて立願する時其の趣意を書いた文章。又、佛事を修する時、施主の願意を認めた文章。○作善。佛教上の語で、身・口・意の三業において善い行爲をするのをいふ。これはその願文中に、佛像を造つたとか、塔を起したとか、經を讀んだとか、寫經をしたとかいふ如き、自身の善行を澤山書き並べたのが賤しげだといふのである。○文車。下に車がついてゐて引き動かせるやうに出来てゐた一種の書架。○文。書物。○塵塚。ごみすて場、ごみため。

第七十三段

世に語り傳ふること、誠はあいなきにや、多くは皆虚言なり。あるにも過ぎて人はものをいひなすに、まして年月すぎ、さかひも隔りぬれば、いひたきまゝ語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて定りぬ。

【通解】 世の中で語り傳へる事は、ほんとの話は面白くないものか、多くは皆うその事ばかりである。一體人は物を事實以上に誇張していふものなのに、まして年月がたち、土地が隔つたりすると、いひたい放題に語り拵へて、それを筆にも書きとめる事になると、そのまゝそれが事實としてきまつて了ふ。

【文旨】 世の中の話の大部分はうそばかりだといつて、虚言の出来て行く順序、その心理から、虚言に對して取るべき態度に至る迄、委曲を悉して面白く書いてある。この一節はその總叙といふ所である。

【語義】 ○世に。世上に、世間で。○まことはあいなきにや。ほんとの話では面白くないのか。○あるにも過ぎて。事實それがあるよりも以上に、事實以上に誇張して。○人はものをいひなすに。人といふものは物をいひなすものなのに。人にはさうした習癖があるといふ筆法。いひなすはわざ／＼いふ、さうでもない事までさうであるやうに拵へていふの意。○さかひも隔りぬれば。場所も遠く隔つたとなると。土地の遠く離れた遠國他國の話でもする段になるとの意。隔りぬれば「隔れば」の強勢修辭と見てよい。○いひたきまゝに。自分のいひたい通りに、勝手放題に。○語りなして。話をして、話し拵へて。これもわざと語る、さうもないものをさういふ風に語り拵へてといふ思想。○筆にも書きとどめぬれば。筆にも書きつけて了ふと。文章にして書物などの上に残すやうな事になるとの意。この「ぬれば」も強勢の修辭。○やがて定りぬ。そのまゝすぐにきまつて了ふ。それが事實だとなつて了ふの意。この「ぬ」も強勢の修辭。

道々のものの上手のいみじき事など、かたくななる人の、その道知らぬは、そゝろに神の如くにいへども、道知れる人は、さらに信も起さず。音にきくと、見る時とは、何事もかはるものなり。

【通解】 色々な道の名人上手の非常にすぐれてある事など、教養がなく頑愚で、その道の心得のない人は、只もう丸で神様のやうにいふが、その道の分つてある人は、一向に有難がつて信ずる氣も起さない。すべて噂にきくと、實際に見るとは、何事でも變つてあるものだ。

【文旨】 これも世間によくある虚言の一つ、殊に昔の人に多かつた名人の超人間的な作り話の根柢を突いて、音にきくと見る時とは何事もかはるものなり」と斷じたのである。

【語義】 ○道々のものの上手。諸道諸藝の名人。ものの上手は何によらず其の道の達人をいふ語。○いみじきこと。非常にすぐれた事、ひどくえらい事。○かたくななる人のその道知らぬは。頑愚な人にして、その道知らざる者の意。○そゝろに。漫然と、むやみに。○さらに信も起さず。少しも信ずる心を起さない。そんな話を信じて有難がる氣などは起らぬの意。○音にきくと見る時とは。噂にきく時と實際に見る時とは。

かつ顯るゝも願みず、口に任せていひちらすは、やがて浮きたる事と聞ゆ。又われも誠しからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどおどめて言ふは、その人の虚言にはあらず。けにげにしく所々うちおぼめき、能く知らぬよしして、さりながら、つま／＼合せて語る虚言は、恐しきことなり。わがため面白あるやうに言はれぬる虚言は、人いたくあらがはず。皆人の興す

べからず。下さまの人のものがたりは、耳驚くことのみあり。よき人はあやしき事を語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言を懇に信じたるもをこがましく、よもあらしなどいふもせんなければ、大方はまことしくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひあざけるべからず。

【通解】 何にしてもうその多い世の中である。只世間普通にある珍しくない事の通りに承知しておけば、萬事違ふ筈はない。下賤の人の話は、聞いてたまげ、やうな仰山な事ばかりある。よい人は不思議な事を語らないもうだ。斯うはいつても、神佛の靈驗、權化の人の傳記などは、さう一概に頭から信じないといふやうにすべきでもない。この方面の事は、世俗の虚言を一から十まで本氣に信じてゐるものばからしく、又よもやさうはあるまいなどいふのもつまらぬ事だから、大體はほんとうらしくあひしらつて、むやみと信ぜず、又疑ひ嘲つたりせぬがよい。

【文言】 これは分ければ二節になる。○とにもかくにも……語らず。迄は、世の中にはうそが多いから、何でも不思議な事は、凡て日常平凡の事に引戻して考へるがよい、由來さういふ不思議な話は下賤の人のいふ事だ、といふ意。それから終までは、神佛の奇特、權者の傳記に對する筆者の態度で、「偏に信ぜず、また疑ひあざけるべからず」といふ不即不離の所に、兼好の一つの人生觀が窺はれる。

【語義】 ○とにもかくにも 何にしても彼にしても。○常にある 普通にある、世の常にある。○珍しからぬ事のなほに心得たらむ 珍しくない事の通りに心得ておけば。どんな奇抜な突飛な話を聞いても、それを世間普通の事實に引直して考へて、その事實のやうなものと承知しておけば、といふのである。「たらむ」は「たる」の婉曲敘法で、下に「には」を補つて考へるべき語格。○よろづ違ふべからず 萬事違ふ筈はない、何事も必ず間違がなく

てよからう。○下さまの人 下賤の人、下層の人。○耳驚く びつくりする、それを聞いてたまげる。○よき人はあやしき事を語らず 「よき人」は身分がよくて物の分つた人。「あやしき」は怪しき、不思議な。これは論語述而篇の「子不語怪力亂神」とあるのを取つたのだらう。○奇特 不思議な事、靈驗あらたかな事。○權者 權化の人。神佛が世を救ふ爲めに、權に其の身を化して人間となつて出現されたもの。○さのみ さう一概に、さう頭から。○これは 神佛權者に關する事は。こゝから別に一文節になるやうに解し、「これは」を「以上の如き事をいうたのは」と解する説もあるが、原文の表現に對して立入り過ぎるやうに思ふ。○ねんごろに信じたるもをこがましく どの迄も本氣に一から十迄皆信じてゐるのも馬鹿らしく、「ねんごろに」は心からすつかりの意。○よもあらし よもそんな事はあるまい。○いふもせんなければ いふもつまらぬ事だから。○大方は 大體はまア、大抵の所は。○まことしくあひしらひて 誠らしく取扱つて、それを誠として信じたといふやうにしておいて。○偏に信ぜず 偏に信じ切つて了はず。○疑ひあざけるべからず 疑ひ嘲つてはならない。むやみと疑つたり嘲つたりはしないがよいとの意。

第七十四段

蟻の如くあつまりて、東西にいそぎ、南北に走る。高きあり、卑しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり。夕にいねて、朝に起く。いとなむ所何事ぞや。生を貪り、利を求めて、やむ時なし。身を養ひて、何事をか待つ。期するところたゞ老と死とにあり。その來ること速かにして、念々の間にとゞまらず。これを待つ間、何の樂びかあらむ。惑へるものは之を恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを願みねばなり。愚かなる人はまた之をかなし